まさか！パンクラスの16年を70ページ大特集!!

enterbrain MOOK

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

kamipro Special

3.20 戦極 -第七陣-
徹底詳報
4.5 DREAM.8
直前特集

2009 MAY
880yen

PANCRASE
HYBRID WRESTLING

旗揚げ16年目の突然変異
キモ強王者のルーツに迫る
北岡悟

パンクラス
名勝負
ベスト50

実験団体がマット界に与えた多大なる影響——
なぜパンクラスに憧れたのか？

格闘MAD SCIENTIST
MMA完成への実験
船木誠勝

プロレスと格闘技の狭間で
パンクラス16年の理想と現実
鈴木みのる

"外敵"が語るパンクラス
郷野聡寛

"パンクラス誌上同窓会"を開催
ミノワマン

DREAMウェルター級GP主役宣言
桜井"マッハ"速人

UFC人気の原動力
リアリティショー『TUF』の構造に迫る!
ダン・ヘンダーソン
ラシャド・エバンス

CONTENTS

読まないと、ケチョンケチョンにしちゃいま～す!

『kamipro』がまさかのパンクラス大特集!!

表紙写真/タイコウクニヨシ

2009 MAY

プロレスから総合格闘技へ――
パンクラスを知ることは
劇的な進化の歴史を知ることである!

パンクラス
16年の実験

93年に〝UWFの最終型〟として、プロレスリングからリアルファイトへと大きな一歩を踏み出したパンクラス。あれから16年。パンクラスは真剣勝負の総合格闘技を競技としても、興行としても成り立たせるために、多くの試行錯誤、実験を繰り返してきた。

そしてプロレスから格闘技へというおおいなる実験には、もちろん成功だけでなく、挫折、誤算、犠牲が常に伴なってきた。船木誠勝、鈴木みのるというU系のスター選手二人は、このパンクラスという実験の中で、真剣勝負という波に飲まれ、一人は一度現役を引退し、一人は純プロレスに回帰した。自分たちが夢見た世界は、決して自分たちにとっての理想郷ではなかった。

そしてパンクラスという団体もまた、PRIDEの急激な台頭により、団体としての苦しみを味わい、また総合格闘技の普及により、〝真剣勝負の総合格闘技団体〟という価値観も相対化させられた。

しかし、いまの総合格闘技界はパンクラスによる実験なくして、おそらくありえなかったであろう。

「完全実力主義の団体を作りたい――」

16年前に若きプロレスラーたちが描いた青臭い夢からスタートしたことはあまりにも多いのだ。

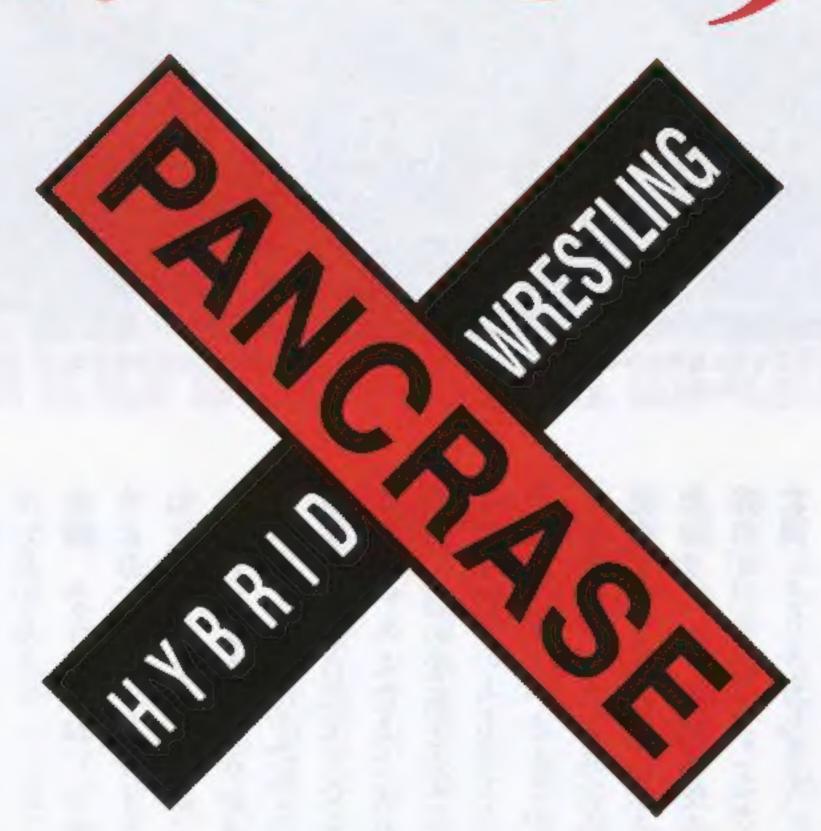
パンクラスを知ることは、プロレスから総合格闘技へという、劇的な変化の歴史を知ることである!

かつて〝アンチ・パンクラス雑誌〟と呼ばれた『kamipro』が贈るパンクラス大特集は、そんな大義名分を掲げたうえでスタートさせてチョンマゲ(ヤスカクおじさん調)。

PANCRASE
HYBRID
WRESTLING

カ、カッコいい……！
Satoru Kitaoka

パンクラスらしくないパンクラス最強の男は なぜパンクラシストに憧れたのか?

パンクラスを背負ってるんじゃない 僕がパンクラスなんです!

キモくて強くてカッコよすぎる男

北岡悟

いまやパンクラスの代表選手といえば、この男しかいない! 昨年の『戦極』初登場から無敗の快進撃を続け、今年1月4日『戦極の乱』で五味隆典を下して戦極ライト級王者になった北岡悟だ。紆余曲折を経てついにメジャーマットで花を咲かせ、ついでに強烈なキャラクターまで満開になってしまった北岡には、「パンクラス・イズム」の血がどのように流れているのか? その発端から、根掘り葉掘り聞いてみた!

聞き手/高崎計三 撮影/タイコウクニヨシ

――北岡さん、今日はパンクラスについて存分に語っていただきたいんですが。

北岡　なんでいまさらパンクラスの特集なんですか？

――北岡さんが頑張ったからですよ！　北岡悟をここまでにしたパンクラスってなんなんだろう？　ということで。

北岡　いろんな意味でね（笑）。

――最初は「船木vsルッテン」戦を観て衝撃を受けたんですよね？

北岡　まあまあですね。

――まあまあ？　定説と違いますが。

北岡　いまとなっては……というところですね。きっかけをたどるとあのへんかなあっていうぐらいというか。あのへんから格闘技を観だして。柔道でも関節技で勝ったりするようになりました。

――それが、「高校を卒業したら東京で格闘技を！」にまでなったんですか？

北岡　いや、大学に行くほど学力がなかったんですけど、親は大学に行ってほしくて、大学に行くんだったら柔道を続けたいと思ってたぐらいですね。親の手前、受けたんですけど、勉強してなかったから受かるわけもなく……。だから、浪人するぐらいだったら上京しようと思って。

――当時、好きだった選手は？

北岡　船木さんと鈴木さんと……日本人選手はみんな好きでしたよ。でも誰みたいになりたいじゃなくて、パンクラスに入りたかったんですよ。でも身長はいまと一緒ですけど、体重は軽かったし、現実味がなかったんですよね。

――いきなり入門テストを受けてもダメだろうから、しばらく修行しようと？

北岡　はい。柔道は続けてて、それだけで柔術の試合に出たんですよ。このルールで勝てるようになればたぶんいいだろうと思って、パラエストラに入ったって感じですね。

――当時、まだ柔術ってそんなに流行ってなかった頃ですよね。

北岡　そうですね。だけど、これやっとくと役に立つだろうと思ったんですよ。おぼろげながら、その選択は正しかったですよね（笑）。「ナイス・チョイス！」って感じで。それで入会して、みっちりやって。かわいがってもらいましたねぇ（しみじみ）。

――それだけ食らいついていったから？

北岡　うーん……個性もあったし……勘違い具合が凄かったからじゃないですか。

――もうすでに（笑）。最初から、「パンクラスに入りたい」って言って入ったんですか？

師匠の一人でもある鈴木みのると美濃輪育久をセコンドにつけ、試合に挑む若き日の北岡。新人とは思えないふてぶてしい面構えだ。

強さは問題なかったと思うんですよ。でも書類で落とされて凄く悲しかった

北岡　言ってましたよ。ほかにもいろいろ言ってたし。いろいろ生意気なことを……あんまり言いたくないような（笑）。

――じゃあ、そっとしときましょう（笑）。パラエストラを選んだのは、中井祐樹さんがいたから？

北岡　そうですね。中井先生の実績というより、オープンマインドな考え方ですね。雑誌なんかで読んでましたから。当時は総合のジムなんかいまの100分の1ぐらいしかなかったから、いろんなプロの選手が出稽古に来てたんですよ。だから本当にいろんな人とスパーリングしましたね。昼の柔術とかだったらパンクラスやグラバカの人も来てたし、修斗のトップの人……マッハさんとかもいたし。

――柔術をやるようになってあらためて見た、パンクラスの選手たちの技術はどう思いました？　柔術的なことへの対応の遅れが言われてましたが。

北岡　そりゃもちろん、いろいろ思いましたよ。でもそれは、高校で柔道やってる時点で気づいてましたからね。それでも、絶対強いと思ってました。

――ほかの格闘技と何が違ったんですか？

北岡　なんでしょうね。華やかさかな。「本当にこの人たちはこれで食ってるんだな」という感じがしましたから。

――パラエストラに2年いて、パンクラスに受かる自信が出てきた？

北岡　いや、違います。当時僕は、素行が悪かったんですよ。いろいろ注意された中で、「ダラダラここにいるよりはパンクラスに行きなさい」って感じになって。

――放流されるわけですね。

北岡　強さ的には問題なかったと思うんですよ。でも、書類で落とされちゃって、それは凄く悲しかったですね。それでしょうがないから、アマチュアの実績を上げるかと思ってアマ修斗に出たりしたところで、逆に向こうから「入門テストを受けませんか」って言われたんですよ。

――パンクラスから？

北岡　そうです。たぶん、グローブ着用になって階級制になる頃だったから、小さい人も入れたかったんじゃないですか。それで、4月にテストを受けて。東京・横浜一緒にやったんですよね。船木さんも鈴木さんも来てました。でも当時、山田学さんとパラエストラの柔術で知り合いだったから、僕は山田さんのコネで入れたっていう噂があったんですけど、違ったみたいです。のちのち鈴木さんに聞いたら「違うよ」と。発端は、山田さんが中井先生に「入れといたよ」って言ったかららしいんですけど、鈴木さんは「山さんにそんな権限はない」って言ってました（笑）。

――裏口じゃあなかったんですね。

北岡　あとスパーリングをやったんですけど、僕は強いわけじゃないですか、あきらかに。

――あきらかに（笑）。

北岡　だから流したわけじゃないけど、押

外国人選手からヒールホールドで一本勝ちし、喜びを爆発させる北岡。約3年半前の試合だが、この頃から極めの強さとキモ強さの片鱗は見せていたのだ。

さえたところで休んだりしてたんですよ。そのとき、須藤元気さんとかが「あいつ、休んでますよ」って言ったりしてたんですよね。そういうのもあって、僕はコネで入ったんだと思ってたんですよ。

――でも、入りたかったパンクラスの入門テストで、いくら強くても休まないですよね？　普通。

北岡　休んでたんじゃなくて、圧倒してたから、へんに攻めてもアレじゃないですか。

――その感じを察知されたんじゃないですか？

北岡　でも、それぐらいの気持ちがないとダメですよ。プロになろうというんだから。いま、あの時点の自分を見ると恐れ多いとは思いますけどね。テストのあと、鈴木さんが「あいつの面倒を見るのはイヤだ」って言ってたらしいですけど（笑）。

――合格発表は？

北岡　その場で発表されたんですよ。船木さんに一番最初に呼ばれたんですよね。受験番号は最後のほうだったんですけど、

Satoru Kitaoka

最初に呼ばれて。うれしかったですね～。でもうれしいっていうのをそんなに出せないから、「はあっ！（声にならない息）」って感じで。夢がかなった瞬間ですからね。12人ぐらい中4人が受かったんですよね。それから5月1日に入寮して、そこから練習生ですね（誇らしげに）。

――それ言うだけでうれしそうじゃないですか！

北岡　うれしいですね、思い出しただけで。たしか、桜庭vsホイス戦の日ですよね。

――あっ、そうですね。実際に入ってみて、練習はどうでした？

北岡　ボチボチでしたねえ。練習生は補強メニューが決まってたんですけど、ちゃんとそれをやってたのは最初だけでした。ダメでしたね。一部の先輩方もちゃんとやってなかったし。

――東京道場全体が緩んでた？

北岡　そうですね。それにならっちゃいました。それがダメでしたね。

――しかも、当時船木さんはヒクソン戦があって、引退しちゃうわけですよね。

北岡　そうなんですよ。それまでがどうかを知らないんですけど、横浜とは雰囲気は違ったと思います。でも僕はスパーだけはちゃんとやってましたけどね。だから実際、僕と山宮（恵一郎）さんと謙吾さんばっかりで練習してました。あと、近藤（有己）さんが来て。でもみんなと僕とはすごい体格差があるじゃないですか。

――確かに、みんな大きいですね。

北岡　だから調子よかったの最初だけなんですよ。疲れきってて最初のほうが強かった。最初のほうは、バンバン上の人から取ってましたからね。あ、あと髙橋（義生）さんと藤田和之さんもたまにいらっしゃいました。要するに、怪獣だらけなんですよ（笑）。

――そんなに取ってたんですか。

北岡　取られることはほとんどなくて、取ってばっかりでしたね。

――それで周りの目が変わったりは？

北岡　最初から、僕には怒ったりする空気じゃなかったんです。話によると、髙橋さんのカミナリが落ちてないのは僕だけらしくて。

――強いからいいんだ、って感じですか。

北岡　それもあるんですけど、へんな卑屈さを出してなかった。僕はやるべきことはやってますと胸を張ってたんで。おおいなる勘違いなんですけど。あと、中井先生の後光もデカかったです。

――なるほど（笑）。8月にはデビューの話があったとか。

北岡　そうですね。船木さんから社長室に呼ばれて、「決まったから」と。「無理です」って言いました。

――ダハハハ！　どんな大物選手ですか！　新人にとっては一番うれしい瞬間なんじゃないんですか？

北岡　イヤ、こりゃ無理だろう、と。どうやって勝つんだと思って。

――冷静というか大胆というか。コンディションのせいですか？

北岡　このたるんだ身体で上がれないと思ったし、練習もそういう気持ちでできてなかったし。まあ、甘かったです。ヒドイもんですよ。スキルも磨けてないし。その代わり、10月までにはなんとかしますって感じになったんですよ。それは社長に言ったんですけど。

――ある意味正しいですけど……（笑）。

北岡　要するに、プロになることが目標じゃなかったんで。そこからやっていけないだろっていう。まあ、そこからは練習態

度が変わりましたけどね。
——で、10月デビューが正式に決まるわけですね。
北岡　はい。決まってからはまたパラエストラにも行かせてもらって。
——そんな時期から出稽古が許されたんですか？
北岡　プロになったらいい、ってことだったんで、多少フライングですけど。「プロみたいなもんだからいいっすよね？」と。
——見込みプロ（笑）。
北岡　格闘技は個人責任なんだから、アリだと思いますけどね。
——パンクラスには入るけど、そこのルールに従うわけじゃない、と（笑）。
北岡　いいところは取り入れたいってことですよ。
——当時、北岡さんの中では「プロ格闘技＝パンクラス」ですか？
北岡　そうですね。PRIDEもまだそんなでもなかったし。
——その頃だと、修斗が四天王時代でグーンと人気が出てた頃ですよね。
北岡　でも、四天王までいかないと食えないってわかってたし。
——やっぱり、食えなきゃダメだろう、と。
北岡　格闘技一本で生活するためにプロになったんですから。コンビニのバイトも続かなかった男ですけどね（笑）。夏場、ジュース詰める最中に冷蔵庫の中で気持ちよくて寝ちゃってましたから。
——ガハハハ！　でもコンビニは続かなかったけどパンクラスの新弟子は続いたっていうのも凄いですね。
北岡　まあ、半年だけですからね。デビューが決まるまでは3カ月ですから。
——無理矢理、新弟子を卒業したようなもんですよね。
北岡　強かったからいいんですよ。
——体育会と実力主義のいいとこ取りをしてた、と。
北岡　いいとこ取りです、まさに。
——デビューしたら扱いも変わるんですか？
北岡　いや、一番下なのは一緒ですから。デビューから1カ月ぐらいでまた入門テストがあって、それでアライケンジが入ってきたんですよ。下が入ってからは変わりましたね。かなり楽になって、ほとんど自分のためだけにやれるようになって。ちゃんこ番と、掃除が少しぐらいで。僕の掃除はいいかげんでしたけど（笑）。

北岡が「人生が変わった試合」という07年４月のファブリシオ・"ピッドブル"・モンテイロ戦。見事な一本勝ちでPRIDEライト級GP2007に出場するはずだったが、大会が開かれることなくPRIDE自体が消滅してしまった。

格闘技一本で食えなきゃプロじゃない
修斗は四天王以外は食えないってわかってた

——その頃、パンクラス外の日本人が多く参戦するようになって、憧れていたパンクラスとは変わってしまった？
北岡　変わりましたね。だから自分のデビューも予想はできてたんですけど、かといって「このレベルでも出しちゃうのか、おまえらは！」と思いましたけど。
——そんな練習生いないですよ、ホントに！
北岡　でも、いまでもですけど、プロになるのが目標の人っていますからね。あと最近だと、大きな舞台に上がるまでが目標の人。あと僕的には、グローブになった時点でがっかりだったんですよね。掌打でやりたかったんですから。
——あ、そこにも憧れてたんですね！
北岡　そうですよ！　「グローブだったら修斗と変わらないじゃん！」と。「毎月試合できないでしょ！」とも思ってましたし。デビューの年はまだレガース着けてましたけど、翌年からはラウンド制にもなりましたし。もうMMAになるんだろうな、と思いましたね。菊田（早苗）さんの動きを見ても思いましたし。勝ってたし、「これはもう菊田さんの団体になっちゃう」と思って。うわ～……と。それだったら絶対憧れなかったでしょうしね（苦笑）。
——ガハハハ！　でも、練習の考え方で言ったらグラバカのほうが近かったんじゃないですか？
北岡　そうですね……。でも、須藤さんから言われたときも、スポセン（新宿スポーツセンター）で郷野（聡寛）さんに誘われたときも断ってますから。僕の目指したものとは違いましたね。
——理想の北岡悟像って、どこにあったんですかね。パンクラスに染まるでもなく、「ザ・MMA」みたいになるでもなく。
北岡　いいとこ取りしようとしたんじゃないですか？　でも、もともとなりたかったのは「パンクラシスト」ですけどね。グラバカの人たちは「パンクラシスト」ではなかったですから。……なんでそんなにこだわったのかは謎ですけどね。こだわったこと自体は正解だと思うけど。だからこそ、ついた色もあるし。いまは物事にこだわらない人が多いじゃないですか。
——途中で、「もうオレ、パンクラス所属の必要ないんじゃないか？」ってことはありませんでした？
北岡　ismになるときは思いましたけどね。事実上、横浜に吸収みたいなかたちで。「いままでやってきたこと全否定かよ！」とか思いましたから。凄い拒否反応が起きて、P'S LABとかグラバカとかパラエストラとかも一瞬よぎったんですけど、1時間ぐらいで「僕のやりたいことはここでしかできない！」と思えて。少なくともその時点では何も成してなかったですからね。上の人たちが持ってるものを学ぶまでは……というのもありましたし。
——鈴木さんとの練習は、気持ちの面でも得るものは大きかったですか？
北岡　そうですね。プロ根性という部分で。鈴木さんがその時点でやれてたかどうかはともかく、教えてくれることは凄く真っ当でしたから。「おまえ、やれてないじゃないかよ！」って言って反発するんじゃなく、吸収できるものは吸収したかったですね。だから僕は吸収率ナンバーワンじゃないですか。
——北岡さんに鈴木みのるイズムがそんなに入ってるとは思いませんでした。
北岡　早い段階から、「一番似てる」とかって一部の関係者に言われてましたけどね。

Satoru Kitaoka

技術も考え方も、聞いたら鈴木さんはうれしそうに答えてくれましたしね。コミュニケーションにもなったし。みんなはもったいない接し方をしてたと思うんですよね。いい部分を学ぶんじゃなくて、悪い部分ばかり受け取っちゃう。僕は逆に悪い部分はスカして、いい部分だけ学ぶという感じでした。

——そこでもいいとこ取り（笑）。でも、それができるだけ自分があったということですよね。

北岡 自分だけはあったというか（笑）。その後、青木（真也）と練習するようになったのは大きな変化ですかね。

——パンクラスでのプロ意識という点では、伊藤崇文選手も特徴的ですが。

北岡 伊藤さんも凄いですね。考えてやってるな、と思います。でも、結果を出さないとキツい部分もあるわけじゃないですか。そこが悔しく残念ではありますけど。でも姿勢とか、学ぶものはたくさんあります。近藤さんとかに関してもそれはあるんですけどね。近藤さんはPRIDEでは結局1勝しかできなかったですけど、負け続けたときもいろいろ試行錯誤してやってたこととかはそばで見ててよかったなと思います。それを見てたからこそ、僕が『戦極』でうまくいった部分はあったと思いますね。

——vs大舞台という意味で？

北岡 そうですね。近藤さんがシウバとやったあたりから、大舞台にでなきゃダメだという気持ちになりました。

——それは自分のため？ パンクラスのため？

北岡 両方じゃないですか。強いものへの挑戦ですよね。近藤さんは団体を事実上背負ってましたからね。そのぶん、近藤さんはきつかったと思うし、団体もきつくなった部分はあったんですけど、格闘技界で本当の意味で団体を背負ったのは近藤さんだけじゃないですか、近年では。だからこその輝きがあったし、だからこそ負けても負けてもPRIDE上がり続けられたんだと思うし。魅力があったんですよね。

PRIDEは消滅したが、『戦極』出場のチャンスをつかんだ北岡は、これまで溜めていたものをすべて吐き出すように爆発。ついに五味隆典をも一方的かつ完璧に下し、戦極ライト級王者となった。

——04年から07年あたりは、勝率はいいんだけどタイトルは獲れない、トップ中のトップにはいけないという時期ですよね。このあたりでは、プロとしてやるという意識はどう変わりました？

北岡 最初は自分がやりたいことを実現することを考えていたんですけど、この

自分のビデオを何回も何回も観るんですよ
ホントに狂ったように観るんですよ

頃は人に望まれることもかなえていかないと……というふうに変わりましたね。07年の迷いがあって、08年の最初に負けてっていうのがあって、そこに行き着いたって感じですけどね。石毛（大蔵）選手に負けた時点でしばらくタイトルにはからめないんだろうと思ったんだけど、外国人には勝ったりして。ストーリーを描かないといけないなっていうのもあったし。

——その中では、やっぱりDEEPでのピットブル戦が大きかったんですかね。

北岡 そうですね。人生変えちゃったっていう試合でした。

——何が違ったんですか？

北岡 この試合に勝ったことで、欲が生まれましたよね。勝ち方も、欲を生むようなかたちだったし。

——もっと上に行けると？

北岡 はい、本当のトップに立てるんじゃないかと思いました。プロとして成功するという基準が、もう一つ上がったんじゃないですかね。その頃の、勝ち方の流れがよかったのもあったし。

——でもピットブルに勝った翌日、PRIDEライト級GPが延期になったんですよね。

北岡 そう（笑）。電話がかかってきたんですよ。ただぶっちゃけね、このDEEPの前の、4月8日に最後のPRIDEでマーカス・アウレリオとやるって話があったんですよ！ その後は『HERO'S』に売り込んでもらったけどダメだったってこともあったし。水面下ではいろいろあったんですよ。

——大舞台にフラれることが続いて、焦りは出ませんでしたか。

北岡 ありましたよ。その頃、会社の状態がよくないことも気づいていたんで、その焦りもあったんですよ。なんとかしようと思ったんですよね。06年の大晦日に近藤さんが郷野さんに負けて、PRIDEにはもう呼ばれそうにないとなったとき、そういう場に出て勝てるのはオレしかいないだろうというのはあったし。

——ここはもう、オレだろう、と。

北岡 思ってたんですけど、力が足りなかったんですよ。いま思えば。

——それについて腐ったりは？

北岡 腐ってましたよ。態度もよくなかったんだと思います。でも、そりゃそうだと思いますよね、これだけあったら。

——それでも自分を信じて、ってわけにはいかないですよね。

北岡 いや僕、ずっと自分を信じてたわけでもないんですけど、これしかできることがなかったですから。これをやるしかなかったんです。ほかに選択肢がなかったんですよね。そんな前向きだったわけじゃないですよ。

——『戦極』に出るようになってからは？ 闘いもキャラクターもどんどん磨きがかかってきましたが。

北岡 ……（ボツリと）なんか恥ずかしいですよね。はしゃいでて。結局、いままでどおりのことをやってたつもりではいたんですけど、一個一個、それまで以上のものを出そうとはしてましたね。『戦極』以前のベストがピットブル戦だったから、イアン・シャファー戦ではそれに近いものかそれ以上を、次はまたそれ以上を出そう、と。あとは中途半端な試合はしないようにしよう、と。負けるにしてもぶっ飛ばされて負けるならいいやと思ってやってました。

——現実にそれが出せたから加速した感じですよね。

北岡　そうですね。あと映像とかもきれいに残るんで、ビデオを何回も何回も観るんですよ。ホントに、狂ったように。

——ガハハハ！

北岡　部屋にカメラつけといたら、驚きますよ。起きたら観て、寝る前にも観てって感じで。「こんなに観るの？」と思いますよ。それで、この部分のこの動きがいいとか、試合前にこうしてるのがよかったとかこのときはこういう心境だったとか、そういうのを意識して次の試合をやるから、もっとよくなるという感じですね。

——単に自分が好きで観てるわけじゃないぞ、と。

北岡　はい。自分のいい部分を研究する感じですね。結果、研究になってるだけかもしれないですけど。

——自分がお手本だ、と。

北岡　たとえばステップとかでも、「あ、オレはテコンドーの動きをこういうふうに取り入れてるんだな」と気づいたり。それを次に意識したら、ズバッと入ったり。

——そういうのがどんどん上がっていったんですね。

北岡　注目度が上がっていったのもあったし、モチベーションも上がるような状況に置かれてたんで、逆にこれからどうなるのかっていうのもあるんですけど。

——周りの反響も含めて、どんどん上がってますよね。

北岡　ちょっとめんどくさい部分もありますけどね。

——もうですか！　もうちょっと浸っときましょうよ！

北岡　ピットブル戦のあとに声かけられるようになって、『戦極』出てからは8月の試合のあとが凄かったですよ。10月に『戦極』のテレビが始まってからは街でも凄く声をかけられるようになって。

——取材も増えて、やっと、なりたい自分になれた感じですか？

北岡　いや、こうなりたかったかというと疑問なんですよね。取材とか、たくさん来るようにならないと、とは思ってましたけど、もともと好きだったかというとわからないというか。必要とされたいというのはありますけどね。

パンクラスファンで僕のことを好きじゃない人は実情を知らないんだろうなって

Satoru Kitaoka

きたおか・さとる■1980年2月4日、奈良県出身。パラエストラでの柔術修行を経て2000年にパンクラスでデビュー。寝技の強さを武器にその実力は認められていたが、なかなか王座に手が届かなかった。08年の「戦極」出場を機にその才能が爆発。戦極ライト級GPを制し、さらに五味隆典をも下して戦極ライト級王座に輝いた。168cm、70kg。

——五味隆典選手も倒してベルトも巻いたいまの段階での、あるべき北岡悟像というのは？

北岡　ここ最近、思えるようになったのは、いまの状況でも世界で最強だと思われるようになりたいなというのはありますけど。BJペンとやるとか青木真也とやるとかいうのではなく、いまの状態で「コイツが一番強いかな」って言ってもらえるような試合をやっていきたいですね。

——ここからが一番大変な闘いかもしれませんね。もっと上ってなんだろうっていう。

北岡　でも、単純にKID選手とか凄いと思うんですよ。彼がいるからイベントが起きるわけで。五味選手もそうだったし。僕がその領域かっていうと全然違いますからね。力不足だと思うし、上には上がいると思うんで。まだまだだと思ってますよ。圧倒的なものを目指すんだったら。憧れと言うとへんですけど、それに近いものはありますよ。DREAMフェザー級の体重とかだって、KID選手の言うとおりにしていいぐらいだと思いますよ。ま、僕がそこまでいきたいかと言ったらまたアレですけど（笑）。

——ところでいま、パンクラスは背負ってるんですか？

北岡　いや、それよく言われるんですけど、背負ってるんじゃなくて僕自身がパンクラスですから。パンクラスファンで僕のことを好きじゃないっていう人がいると思うんですけど、それは大きな誤解だと思うんですよね。矛盾してるんだよ、と。実情を知らないんだろうな、と。そういうふうに見える部分もあるのかなとは思いますけど、知らないんだろうな、と。

——限りなくイコールに近い、と。

北岡　そうですね。それを喜んでほしいと思うんですけど、喜べないという人の気持ちもわかるんで。ま、そのへんはまだまだ僕の努力不足かなとも、ある意味では思いますし、思わないとやってられないですね（笑）。

【09年3月10日　『kamipro』編集部にて収録】

自分の試合大好き!
北岡悟本人が語る

北岡悟MMA全試合レビュー

2008年に「戦極」に出場以来、破竹の秒殺街道を突き進み、"キモ強"として一気にブレイクをはたした北岡悟。しかし、このブレイクまでには激闘、苦闘が試合数が多いことで定評があるパンクラシストらしく、たくさんあるのだ。「自分の試合が大好き!」と公言する北岡に、そんな大好きな自分の試合をたっぷり語ってもらった。

構成/橋本宗洋

2000.10.31 パンクラス 後楽園ホール

×vs河崎義範

(10分時間切れ 判定 0-2)

シッチャカメッチャカでしたね。恥ずかしいですけど、そういうのがデビュー戦かな、と。自分の才能のなさを感じました(笑)。パンチのミット打ちを相当やって、試合でもパンチで前に出たんですけど右しか出なくて。ヒドイっす。でも、体格差のあるレスラー相手に一回タックルを取ったんですよね。もっとタックルでいけばよかったです。

2000.12.09 パンクラス 青森県武道館

○vs菊地一仁

(10分時間切れ 判定 3-0)

初勝利ですけど、あんまり……。ホッした感じでしたね。ボコボコ打ったマウントパンチが、全然効いてなさそうだったのを覚えています。柔術の技術で圧倒したっていう試合でしたね。打ち上げで菊地さんが「デビューできてよかった!」って窪田さんと泣いて抱き合っているの見て、僕は「志低ぅ……」って。性格悪っ!(笑)。

2001.3.31 パンクラス なみはやドーム

△vs窪田幸生

(2R終了 判定 0-1)

いま振り返ってみて、いろんな意味で負けなくてよかったと思っています(笑)。でも、当時の自分からすれば上出来だったんじゃないですか。窪田さん、この試合のあとで「やめる」って言ってたらしいですけどね。この前、本田(朝樹)さんに負けたときも「やめる」って言ってたみたいで……幸せに生きてると思います。まさに幸生(笑)。

2001.6.26 パンクラス 後楽園ホール

×vs星野勇二

(2R終了 判定 0-3)

星野さんは強かったですねえ。いまも続けていて、「CAGE FORCE」のチャンピオンになりましたよね。その実力は感じました。このときは差を感じて、やや絶望の影が見えました。その2年後に星野さんと真っ向からやり合って引き分けたのが凄く嬉しかったんですよ。マイルストーン的な意味のある相手だったなと、やや思いますね。

2001.8.25 パンクラス 梅田ステラホール

△vs宮川順也

(2R終了 判定 0-0)

星野戦以上に絶望を感じました。相手がデビュー戦でしたからね。しかも、入門テストで圧倒した相手だったんですよ。そういう選手に競った試合をされたってことで、控室の裏で泣き崩れましたね。もうワンワン泣いて。そしたら鈴木さんと高橋さんが「うるさい!」って……言ってますっていう伝令が大石から来ました(笑)。

2001.12.01 パンクラス 横浜文化体育館

△vs長岡弘樹

(2R終了 判定 1-0)

このときはボクシングの練習ばっかりやってたんですよね。キャリアの中で、最もボクシングっぽい試合でした。きっといま見たらドッチラケの内容なんでしょうけど、船木さんにはほめられたんですよ。新しい試みを評価してもらえたのかな、と。でも、まだまだでしたね。とてもプロと呼べるような試合はしてなかったです、この頃は。

2002.3.25 パンクラス 後楽園ホール

×vs大石幸史

(2R終了 判定 0-2-1)

ismとして最初の試合ですけど、ヒドイですね。ミカ・ミラーvs前田吉朗みたいな試合でした(笑)。引き分けていいだろうと思うんですけど、まあタックル決めてたのは大石なんで。ただ結果的に、大石とやれたこと自体がよかったと思いますね。勝敗がついたことで、大石に対する目標意識をもって道場で練習できるようになったので。

2002.5.11 パンクラス 梅田ステラホール

○vsアライケンジ

(2R終了 判定 2-0)

ひさびさの勝利でホッとした感じですね。しかも相手は後輩だったんで。アライは悔しがってましたけど、僕が負けたら、それまで頑張ってきたことが全否定ですからね。でも、なんで判定が2-0なんだって思いました。大石との試合も本戦引き分けで延長だったと思うし……っていまさら判定のことばっか言ってどうすんだよ(笑)。

2002.7.28 パンクラス 後楽園ホール(昼)

○vs野沢洋之

(2R終了 判定 3-0)

嫌だったんですよ、トーナメント。だってキツイじゃないですか(笑)。野沢戦は、ismになってからやってきたレスリングの練習の成果が出始めた感じですね。タックルが取れたんで、強くなっている自分を感じました。マウントもひさびさに取ったんですけど、そこから何をしたらいいか忘れちゃってましたね。ひさびさすぎて(笑)。

2002.7.28 パンクラス 後楽園ホール(夜)

○vsアライケンジ

(延長R 2分8秒 アンクルホールド)

これも本戦で勝ったと思ったんですけど、延長になって「えーっ!」て。あとで映像を見たら、凄い顔をしてるんですよ。「なんで延長!?」っていう顔。それを廣戸先生はレポートで「気合いの入ったいい顔をしてた」って書いてましたけど(笑)。そういう試合だったんですけど、そこでプロとして初めて一本勝ちをして。不思議なもんですねぇ。

2002.7.28 後楽園ホール(夜)

×vs門馬秀貴

(1R 0分5秒 KO)

プロ初の一本勝ちの直後に、プロ初のKO負け(笑)。なんかテンションおかしかったんですよ。試合の合間も興奮しっぱなしで。結果、正面からタックル入ってヒザもらって。でも、この試合でプロとしては初めて、僕が期待されてるって空気を感じたんです。期待感を浴びるように……粉を浴びた程度ですけどね(笑)。でも、凄い覚えています。

2002.10.29 パンクラス 後楽園ホール

○vs港太郎

(2R終了 判定 2-0-1)

極められなかったのが情けなかったですねぇ。凄く悔しくて。この前にアライがスイングした試合をしてて、結果アライだけが評価されて。「あぁ〜……」ってなった記憶がありますね。結局、すべてが足りなかったんですよ。間違ったかたちで満足してたんだと思います。

2003.1.26 パンクラス 後楽園ホール

○vs長岡弘樹

(2R終了 判定 3-0)

前回の試合もあったんでメチャクチャ気合い入ってましたね。正月返上で練習しましたし。ウェートもガンガンやって、ここから身体つきがかなり変わったんですよ。判定だったけど、納得のいく試合でした。「判定だろうがなんだろうが徹底的にヘコましてやる!」って開き直ってやったので。だけど、それもいま思えば勘違いだったなって(笑)。

2003.4.12 パンクラス 後楽園ホール

△vs和田拓也

(2R終了 判定 0-0)

修斗クラスAの選手と引き分けっていうのが大きかったです。自分もパンクラスのランカーなんで「それくらいじゃなきゃダメだろ」とも思いましたけど。内容に関しては、長岡戦の勢いもあって実力以上のものが出せたと思います。動きも雑だし見た目も気持ち悪かったんですけどね。まぁ、それはいまも変わらないですけど(笑)。

2003.6.22 パンクラス 梅田ステラホール

△vs星野勇二

(3R終了 判定 0-1)

2年前に負けた選手と引き分けってことで嬉しかったです。前回は絶対テイクダウンできない感じだったので、今

試合後、中井先生に「これで黒帯じゃないですか」って言ったら、もらえました（笑）。

2007.4.13　DEEP 29 IMPCT 後楽園ホール
◯vsファブリシオ"ピットブル"モンテイロ
（2R 2分37秒 肩固め）

一番良かったのは、入場前からキマッてたことじゃないですか（笑）。あとDEEPの雰囲気がよかったんですよ。ノリノリで入場して、ノリノリで勝って。試合後、僕のこと見向きもしなかった関係者に「PRIDE出ま〜す！」とか言って（笑）。俺はキマッてたほうがいいんだなって気づきましたね、この試合で。

2007.9.05　パンクラス　後楽園ホール
◯vsジェイソン・パラチオス
（3R終了 判定 2-1）

ここで学んだのは、うわべだけのノリノリじゃダメだな、と。PRIDE出場がなくなってムシャクシャした気持ちが出ちゃいました。1R、何回も極めにいったんだけど極まらなくて、疲れきって。後半はしがみついて無理やり勝った感じですね。試合前の気持ちの持っていき方はリングでも出ますね。このときはドロドロしてましたから（苦笑）。

2008.1.30　パンクラス　後楽園ホール
×vs井上克也
（3R終了 判定 1-2）

PRIDEがなくなってUFCに出ようとして、そのステップとして「CAGE FORCE」に出ようとしたけど相手がなかなか決まらず、それで「やれんのか！」の話も流れて。そういうチグハグな生き方が試合にも出ましたね。この頃は大事なものが何かを見失っていました。最低最悪の試合です。

2008.5.18　戦極 〜第2陣〜 有明コロシアム
◯vsイアン・シャファー
（1R 0分50秒 フロントチョーク）

「戦極」初参戦。会場は近藤さん、吉朗、アライがPRIDEで負けたパンクラシストの墓場、有明コロシアムでした（笑）。井上戦で負けた後なんで、勝ってホッとしましたね。ビデオを観てもらうとわかるんですけど、メチャクチャ喜んでるわけではない。大舞台のデビュー戦でもあったので、「ここからまた始めていこう」と。

2008.8.24　戦極〜第四陣〜 さいたまスーパーアリーナ
◯vsクレイ・フレンチ
（1R 0分31秒 アキレス腱固め）

[illegible]って、メチャクチャはしゃぎましたね。勝てたから[illegible]だけでなく、勝ち方が嬉しかったんです。さいた[illegible]いう大会場で、あんなドンピシャの極め方をして[illegible]んなことできちゃうんだ!!」って。自分で言うの[illegible]けど、ほかになかなかできる人いないじゃないで[illegible]

2008.11.1　戦極〜第六陣〜　さいたまスーパー[illegible]
◯vs光岡映二
（1R 1分16秒 ヒールホールド）

光岡選手はホドリゴ・ダムに勝って株を上げ[illegible]丸ごと呑みこんじゃいましたね。相当強い選手[illegible]たんですよ。井上選手よりも強いと思ってた[illegible]も、もうリング上ではしゃがないって[illegible]（笑）。優勝しなきゃ意味がないと思って[illegible]

2008.11.1　戦極〜第六陣〜　さいたまス[illegible]
◯vs横田一則
（3R終了 判定 3-0）

ホントはロープエスケープでTKO[illegible]（笑）。でも横田選手が決勝にきて[illegible]RABAKAが相手のほうがあきら[illegible]ある選手に、この内容で勝てたの[illegible]味選手抜きでGPを光らせるのが[illegible]できたのもよかったです。

2009.1.4　戦極の乱2009 さいた[illegible]
◯vs 五味隆典
[illegible]

[illegible]すから。

ちました（笑）。打撃を当てられるんだけど、ガガガッて倒して無理やり勝ったような試合でしたけどね。

2005.7.10　パンクラス　横浜文化体育館
◯vsトーマス・シュルツ
（1R 1分11秒 ヒールホールド）

けっこう神がかった勝ち方をしたんですよね。ここらへんから、センスみたいなのが出始めました。降りてきた感じ。試合のちょっと前に祖父が亡くなったんですけど、試合前だから実家には帰らなかったんですよ。そういうのもあって「降りてきてるのかな」って。ここまでうまく技がかかるのって、あんまりなかったですから。

2005.10.2　パンクラス　横浜文化体育館
◯vsカーロス・コンディット
（1R 3分57秒 ヒールホールド）

コンディ[illegible]現WECのチャンピオンですよね。この時点でも強かった[illegible]ます。パンクラスでも上のほうにいましたし。このときは、相手にわざと足を取らせて、そこからアンクルを極めたんですよ。「肉を斬らせて〜」みたいな感覚が降りてきて。実際、カカトで蹴られて口が裂けたんですよ。まさに肉を斬られました（笑）。

2006.1.26　パンクラス　後楽園ホール
△vs井上克也
（3R終了 判定 1-0）

いや〜……。故意ではないんですけど、サミングがあって。そこまではいい流れだったんですけどね[illegible]完全に噛み合わない[illegible]でした[illegible]れをわずらわしく感じちゃった[illegible]ネガティブな意識を持っていて[illegible]たのもデカか[illegible]PRIDE[illegible]

2006.3.[illegible]
◯vs田中達憲
（2R 0分53秒 フロントチョーク）

井上戦で[illegible]ですよね。[illegible]な部分を[illegible]ながらク[illegible]の試合は相手の実力と相性もあって勝ったんですけど、課題を[illegible]しないまま[illegible]ことが次の試合に響きましたね。

[illegible]
×vs石毛大蔵
[illegible]

[illegible]選手に負けて[illegible]成功[illegible]

[illegible]パンクラス[illegible]
◯vsポール・デイリー
（[illegible]54秒 フロントチョーク）

[illegible]きは「勝ちたい」[illegible]強い奴と[illegible]で[illegible]つもりだったんですけど、納得のい[illegible]までの「降りてきた」感じじゃなく、実[illegible]「俺は弱くない」って確認できました。

2006.10.25　パンクラス　後楽園ホール
◯vsホン・ジュピョ
（1R 0分24秒 アンクルホールド）

デイリー戦で右腕の手首をケガしてしまって、左[illegible]練習ばっかりしてたんですよ。それが見事に極ま[illegible]ね。タックルから引き込んでのアキレス腱固め。[illegible]掛けた技が、そのまま極まったという。そういうこ[illegible]の頃からできるようになってきた。昔では考えら[illegible]ですけど、そういう力が知らないうちについてまし[illegible]

2007.2.28　パンクラス　後楽園ホール
◯vsグスタボ・PC
[illegible]

[illegible]

回はやってやろうと思って。で、できたんですよ。和田戦のあと『コンテンダーズ』にも出て３連戦。一つも勝てなかったですけど、連戦を乗りきって強くなってるなっていうのを感じたので、不満はなかったですね。

2003.10.2[illegible]　パンクラス　後楽園ホール
◯vs関直喜
（3R終了 判定 3-0）

関選手は、この年のネオブラッド優勝者なんですよ。この試合は３連戦で鍛えられた成果をぶつけて勝った感じでしたね。初期の試合の中では納得してるっていうか。フルボッコにできて気持ちよか[illegible]。長岡戦もうだったんですけど、判定だけどボコボコに[illegible]たっていう。後輩いじめてるみたいな感じで、そういうの好きですね（笑）。

2004.2.15　パンクラス　梅田ステラホール
△vs保坂忠広
（2R終了 判定 0-0）

関選手には勝ったけど微妙な位置だったんで、そこから一段階上がるためにヘビー級とっていう。相手はMEGATONとしてパンクラス所属になった選手で、「GRABAKAはいけないでしょ」って思ったのもありましたね。負けたみたいに落ち込みました。真っ向勝負でなんとかするつもりが、ならなかったという。

2004.3.29　パンクラス　後楽園ホール
×vs石川英司
（3R終了 判定 0-3）

保坂戦の翌日くらいにオファーが来たんですよ。なんとか状況を変えたくて試合を受けた感じでした。対GRABAKAっていう思いもあって「なんとかしてやろう」と思ったんですけど、なんとかならずに普通にやられましたね。敗因は技術と気持ち。体格差ではないです。体格差が原因だと思っちゃったら、クリアできないじゃないですか。

2004.5.28　パンクラス　後楽園ホール
◯vs平山貴一
（2R 4分5秒 フロントチョーク）

前の2戦で大きい相手とやったのが、ここで活きてくるんですよね。実力がちゃんと上がっていたから勝てたっていう。実績のない相手との試合でもあったので「一本取らなきゃ」っていうのがありました。時間切れギリギリにはなっちゃいましたけど、「イジメて終わりじゃダメだ」って。それが、長岡戦とか関戦の頃との違いですね。

2004.7.25　パンクラス　後楽園ホール（昼）
◯vsカート・ペリグリーノ
（2R 0分34秒 フロントチョーク）

この勝利は大きかったです。初めて外国人と試合をするんで、気持ちも盛り上がってましたね。勘違いでしたけど（笑）、ペリグリーノは、いまもUFCに出てる選手なんですよね。これまでの経験が活きて連続一本勝ちができて、試合後には「NKホールに出たい」って[illegible]ろか、そんなに甘くなかったん[illegible]

2004.9.24　パンクラス　後楽園ホール
△vsヒース・シムズ
（3R終了 判定 1-0）

シムズってオリンピック・レスラーだったんです。でもタ[illegible]りたいことはあるんだけど力がそこまでおよんでなかった感じでしたね。このへんから、相手のレベルも上がってきました。トップ戦線というか。でも、そこで勝つには自分が思っていた以上に実力が必要でしたね。

2004.11.7　パンクラス　東京ベイNKホール
×vs井上克也
（3R終了 判定 0-3）

[illegible]ホールっていう会場で試合をしたのは大きかったです[illegible]（井上選手との）闘いの始まりですね。殴られて[illegible]腫れたし、ダウンもしてるんですよ。そのときに[illegible]の靭帯を部分断裂したし。[illegible]ヒドイ目に遭いまし[illegible]きながら帰った記憶があります。強か[illegible]な[illegible]の井上選手）は。

[illegible].3.6　パンクラス　横浜文化体育館
◯vs長谷川秀彦
（3R終了 [illegible]）

[illegible]そういう感覚[illegible]

WINDY智美
WINDY Tomomi

WINDYさんに関しては、なんとも言えないっすね[illegible]半分はパンクラスismの仲間なんですけど、半分は全日本キック、AJジムの選手ですし。僕が知る限りでは、凄く女らしい人です。試合では怖い？ それは格闘技に対して、ちゃんと取り組んでるからですよ。格闘技が凄く好きなんだろうなあっていうのは感じますよね。

鳥生将大
Masahiro Toryu

鳥生はね[illegible]練習でも強いし、伸びてるんですけど[illegible]追い込まれると弱いんですよね。不思議な奴です。プロとしての強みは[illegible]自分[illegible]笑[illegible]でも、まだまだだと思います。練習で[illegible]試合で出せてない。練習での実力を信じて、試合でその分を出して勝っていくしかないですね（笑）。

川村亮
Ryo Kawamura

[illegible]ですよ。期待されて[illegible]自分[illegible]も出てますよね。[illegible]それは[illegible]実力が[illegible]いまは伸びてます。[illegible]プロと[illegible]人間かと思います。

P's LAB

川原誠也
Seiya Kawahara

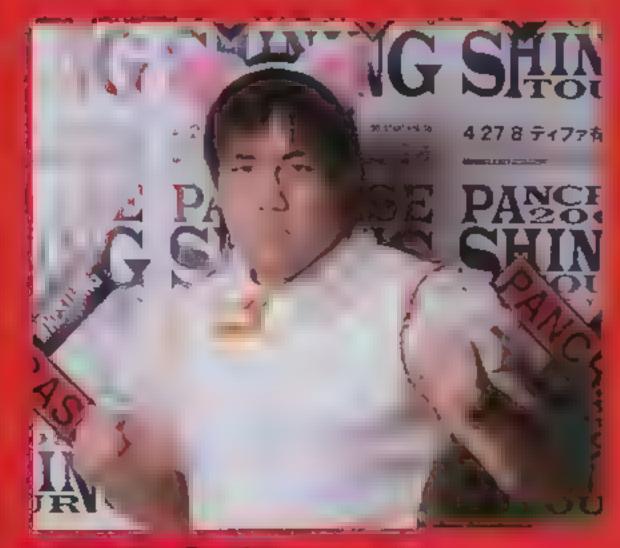
こいつはいいっすよ。P's LAB所属ですけど、こいつだけ、定期的にismの練習にも来るんですよ。内村も、過去には引退した志田（幹）も定期的には来てないですからね。一人だけ軽量級なのに気合い入ってますよ。同時に、繊細で素直なんですよね。僕とか川村の言うことをしっかり聞いて。倒す、仕留める力があるのも魅力的ですよね。

内村洋次郎
Yojiro Uchimura

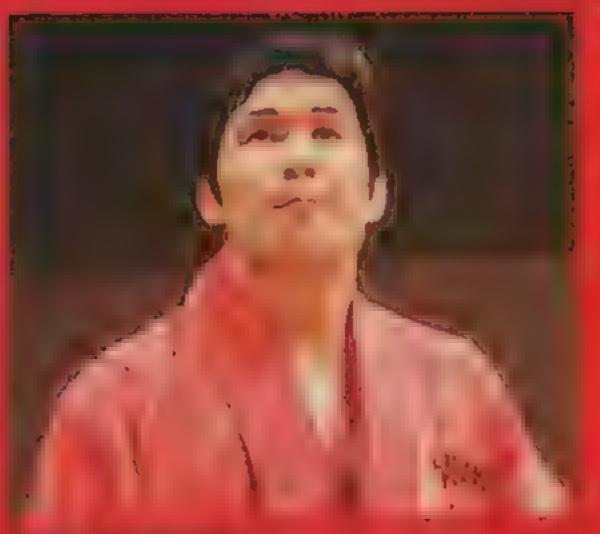
ZST王者になったんですけど、そこから大変になっちゃいましたね。最近は不運続きで試合もできてないし。アマチュアの頃はずっと勝てなくて、普通なら辞めるところを踏ん張ってプロになったんですよ。ルックスもいいし、いい動きするんですけど、まだまだ本物のトップにはなれない感じですね。そこを本人がどう捉えて、どう頑張るかでしょう。

五十里祐一
Yuichi Ikari

五十里さんとは、ルームシェアしてたことがあるんですよ。引退した植村"ジャック"龍介と3人で。二人ともネオブラッドで優勝してるんですけど、僕と出会って格闘技への漬かり具合が強まったんじゃないですかね。人生を狂わせてしまいました（笑）。泥臭いスタイルですけど、サラリーマンやりながらあれだけ強いのは立派ですよ。

パンクラスMISSION

佐藤光留
Hikaru Sato

格闘技者としての才能も凄くあるんですけどね。そういう人は努力しないというのが定説で（笑）。[illegible]の運転をする才[illegible]釣りとかパチンコとか趣味も多いんで、才能がいろんなところに散っちゃうんじゃないですかね。そういう意味でプロレスをやって振り幅を広げたのは、佐藤さんにとっていいことだったと思います。

冨宅飛駈
Takaku Fuke

冨宅さん[illegible]MISSION所属ですけど、[illegible]代にスパーリングをしたこともあります。[illegible]ですよ。印象としては、優しくておもしろい人でしたね。でも、言うべきことは[illegible]言ってくれる。そういう方が多いです、パンクラスは。そういう人たちが[illegible]でしょうね。イヤな[illegible]笑

鈴木みのる
Minoru Suzuki

[illegible]ですよ。それが、ありがたい[illegible]MMAを[illegible]格闘技者に対して真剣勝負を[illegible]しょうね。[illegible]

格闘MAD SCIENTIST

船木誠勝

真剣勝負という実験の日々

Masakatsu Funaki

「たとえ試合で負けても研究結果が得られればいいと思ってましたね」

[illegible]木[illegible]は、パンクラスのエースとして活躍しただけでなく、[illegible]勝[illegible]格闘技を競技として、興行として成り立たせるため、自分の身体[illegible]実[illegible]を続けてきた研究者でもあった。そんな船木は格闘技人生を通して、[illegible]ういった実験をしていたのか。そしてどんな結果が得られたのか。じっくりと振り返ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　写真協力／パンクラス

――先日、足関節技についての研究発表を船木さんにはしていただきましたけど、今回はパンクラス時代を含め、総合の技術研究全般をどのようにして行なってきたかをうかがいたいんですよ。

船木 技術という点で振り返れば、一番最初に技を教えてもらったのは、藤原（喜明）さんなんですよね。

――15歳で新日本プロレスに入門したときですね。

船木 新日本の頃は、技術を教えてもらえるのは、藤原さんしかいませんでしたから。だから藤原さんが（第一次）UWFに移籍して、いなくなってからは、当時、『週プロ』とか『週刊ビッグレスラー』で藤原さんの関節技講座っていうコーナーがあったんですよ。新日本の若手はそれを見ながら練習してましたから。

――雑誌見ながら通信講座みたいに（笑）。

船木 あとは佐山さんのシューティングの本が出たら、それを買ってきて、『これがサンボだ』が出たら、それを買ってきてっていう感じでしたね。昔は技を教えてもらえないし、出稽古もよしとされてなかったんで、そうやって学ぶしかなかったんですよ。

――じゃあ、プロとして実際に関節技の練習はしてるけど、知識としてはファンと一緒ぐらいの。

船木 そうです。技の研究は藤原さんが一番やってましたし。だから藤原さんがUWFから新日本に帰ってきたとき、前に使ってない技もUWFで身につけてて、藤原さんだけ進化してた感じで、自分たちはついていくのに精一杯でしたね。

――藤原さんこそが、初代・関節技研究所所長みたいな。

船木 そうです。藤原さんに教えてもら

わないと、何もわかりませんでしたから。

——でも、新日本も昔はセメントの練習があったって聞きましたけど。

船木 そればっかりですよ。でも、上の人で若手とセメントをやるのは、藤原さんだけだったんですよ。

——そうなんですか⁉

船木 藤原さんがセメントのコーチ役だったんで。セメントの練習＝藤原教室だったんですよ。だから、ほかの上の選手だと、巡業が終わってからの合同練習が半ばに差しかかったぐらいで、猪木さん、藤波（辰爾）さん、木村さ（健悟）んとかが、若手をつかまえて、ちょっと藤原教室の練習に参加するぐらいでしたね。

——藤原さんだけ若手と毎日セメントやるけど、ほかの選手はその輪にたまに入るだけだった、と。

船木 そうですね。ほかの選手は基礎練習やコンディティ回したり、コンディションを整える練習が多かったですね。

——じゃあ、藤原さんがいなければ、セメントの練習はなかったんですか？

船木 いや、藤原さんがその立場であり、藤原さんの役目なんですよ。だから、藤原さんがいないあいだは、（獣神サンダー・）ライガーや佐野（直喜）さんとか、残った若手だけでやってましたから。あ、途中でドン荒川さんがセメントのコーチになったんですけど、そしたら寝技じゃなくて、相撲に変わりました。

——ガハハハハ！　セメントはセメントでも寝技じゃなくて、ガチンコ相撲教室になりましたか（笑）。

船木 そういう意味では、藤原さんがいたからこそって感じはしますよね。

——第二次UWFになってからの練習はどうだったんですか？

パンクラス初期まで関節技は自分たちが世界で一番進んでると思ってました

船木　UWFになってからは、ようやく外の技術に手が出せる感じになったんですよ。自分はボクシングをやり始めて、鈴木なんかは自分の母校のレスリング部で一緒にトレーニングしたりとか。

――要は新生Uの頃から若手たちがいろんな技術をハイブリッドしていくようになってくわけですね。

船木　外でやったものを、午前中から午後にかけての合同練習で新弟子相手に試して、自分のものにしていくっていう感じですね。だから新弟子は嫌でも強くなるんですよ。あの頃は田村（潔司）、垣原（賢人）、冨宅（飛駈）とかなんですけども。みんなやっぱり、先輩が外から持ってきたものを味わえるという。

――船木さんたちが新弟子の頃と違って、いろんな技術を学べた、と。

船木　だけど、当時は関節技や絞め技が、ちょっと停滞気味だったんですよ。というか「もう、これ以上のものはないんだろう」っていう意識があったんです。

――自分たちが身につけたサブミッションこそが最先端であり、これ以上にはならないと思ってたわけですか。

船木　だから、自分たちがまだ身につけていない本格的な打撃とか、そういう練習をやりたいって気持ちがありました。そのときはまだ柔術とか、まったく知らないですから。

――比較対象がないから、プロレス界で一番の関節技の使い手＝世界一の関節技の使い手だと思ってたわけですね。

船木　そうなんですよ。UWFに外国人選手が来ましたけど、元レスリングの強豪選手とかでも、関節技を知らないから、けっこう簡単に極められるんですよ。あと柔道家も来ましたけど、道衣を着ないから、これもタックル取れちゃうし、関節技も極まるんですよね。そういうのがあって、UWFの技術が一番優れてるんだって、自分たちも信じてました。

――当時は裸でやるサブミッションのある競技ってないわけですからね。

船木　ないです。それでたまたまなんですけど、UWFにいた頃、TBSのニュース番組の特集で、自分が世界の格闘技を回るっていう企画があったんですよ。

――ああ、ありましたね。船木さんがトルコのオイルレスリングにチャレンジしたりしたんですよね。

船木　そうです、それで「グレーン」っていう道衣を着てやるフランス相撲とトルコのオイルレスリングと2カ所回ったんですけども。当初はリポートだけの予定だったのが、「やってみませんか？」って言われて。そう言われたら、やっぱり「嫌です」とは言えないんで。

――逃げるわけにいかない、と。

船木　で、やったんですよ。それもフランス相撲では、何回か投げられたんですけども、最後はカンヌキに極めて、スープレックスやったら取れちゃったんですね。それもやっぱり向こうにない技なんですよ、カンヌキで極めちゃうっていう発想がないんで。だいたい道衣を使って投げるっていうのしかないですから。

――向こうの人が知らない技で勝っちゃった、と。

船木　あとはオイルレスリングのときも、滑りはするんですけど、関節技がないんですよ。だから、バック取られてポイント取られても、そのまま腕を取り返して、ひっくり返してポイント取ったりして、極めてけっこう対応できちゃったんですよね。それでまたなんか自信をつけてしまって。結局、自分たちのやってる技術が一番効率いいんじゃないかって。まだその当時でさえ、そういったUWFの技術が通用してましたんで。だから藤原組になってからも、関節技の技術を磨くより、ムエタイのジムに行ったりするほうが重要だと思ってましたね。

――藤原組ぐらいまでは、「プロレスこそ最強」じゃないですけど、自分たちの技術がノールールになったら最強なんだっていうふうに思ってたわけですね。

船木　あとはパンクラスが始まって最初の2年ぐらいも、やっぱりパンクラスが世界で一番進んでるぐらいには思ってました。ハッキリ言って、当時の外国人選手より、技術ははるかに知ってましたから。だから外国人選手が日本にしばらく滞在して、自分たちの技術を学んで帰っていくってことがよくありましたね。マット・ヒュームなんて、丸々一カ月新弟子と一緒にいて、全部メモして帰ったりとか。

――外国人選手が短期の「パンクラス留学」をしていたわけですか。

船木　バス・ルッテンやフランク・シャムロックも一カ月ぐらい日本で練習してたことがありましたし。あと自分が個人的にウェイン・シャムロックの家に遊びに行ったとき、シャムロックのジムの若手に技をいろいろ教えてるのを、全部ビデオに撮ってましたね。

――まさにサブミッションレスリングの最先端だった、と。

船木　そう思ってたんですよ。でも『アルティメット（UFC）』でホイス・グレイシーを初めて観たとき、正直、「本当に俺たちが最先端なのか？」って、少し疑問が湧いてきたんですよ。

――シャムロックが一本負けしたわけですからね。

船木　なんか俺たちがやってることを、簡単に封じ込めるヤツが出てきたんじゃないかって感じましたね。シャムロック自身は「俺がミスをしただけだ」って、実力で負けたことを認めてなかったし、周りも「あんなのまぐれだ」みたいに言う人も多かったんですけど、シャムロックだけじゃなく、（ジェラルド・）ゴルドーまで負けたじゃないですか。これはちょっとおかしいって思ったんですよ。

――まぐれでシャムロックとゴルドーを

tsu Funaki

パンクラスでは団体を引っぱるメインイベンターであると同時に、プロレスファンに総合格闘技を啓蒙するスポークスマンでもあった船木。プロレスから格闘技へリング上も概念も移行させた。

連破できないだろう、と。
船木　で、向こうのビデオを手に入れて観てみたら、やっぱりちょっとおかしいんですね。なんか、俺が知ってる寝技とは違うんです。相手の力を利用してるというか、ムダな力を使ってないというか。すべてがホイスのいきたい方向に向かわせてるような試合をしているんで、これは何かあるんじゃないかって思いましたね。
――グレイシーの強さには何か秘密があるんじゃないか、と思ったわけですね。
船木　でも、どうやって柔術を知ったらいいか、その術がなかったんですけど、その頃、ロスにグレイシーとは別のマチャドっていう柔術の道場があって、そこに行けば同じ技術がわかるって、格闘技記者の人に教えてもらったんですよ。じゃあ、そこに行ってみようって話になって。ちょうどいいことに、マチャド派のほうはあんまりバーリ・トゥードをよく思ってないんで、グレイシー派と対立しているから、教えてもらえそうだったんですよ。でも技術は一緒ですからね。
――同じブラジリアン柔術ですからね。
船木　それで、シャムロックも呼んで、まずは体験しに行こうって言ったんですけど、シャムロックはムチャクチャ嫌がりましたね。「なんでやる必要があるんだ！」って言われて。「とにかく柔術を知らないとこれからの対策も立てられないから」って説得して、道衣を着て体験入門したんですよ。体験っていっても、すぐにスパーリングですから、3～4人に回されて、やられまくりましたね。
――道衣の使い方も知らないし、しかも柔術の技術も知らないしで。
船木　そうです。とにかく、こっちはタックルで倒して上になるんですけど、すぐにひっくり返されるんですよ。
――いわゆるスイープの技術ですね。
船木　これが、なんで返されるのかが凄く不思議だったんですよ。上になっては返されて極められ、返されて極められが30分ぐらいずっと続きましたね。そして、やられながら「動くとやられちゃうんじゃないか」って考えて、「じゃあ最後に一回道衣を脱いでやってみたい」って言って、最初は上になったんですけど、途中でまた返されたんです。返されたんですけど、そこからわざと動かないようにして、ずっと下から羽交い絞めにしたんですよ。そしたら案の定動けなくて。で、道衣もないんで、襟も極められないんですよ。で、最終的に10分ぐらいやったあとですかね、ついにTシャツで絞められましたよ（笑）。落ちそうになったんでギブアップして。でも、やってみて「やっぱり動かないと進まないもんなんだ」「動くからその力を利用されて極まるテクニックが柔術にはあるんだ」と思って、それで一応帰ってきたんですよ。

パンクラスでの船木は、真剣勝負ながら、試合結果よりも"実験"を優先させていたことがある。そのため旗揚げからタイトルに縁がなく、初めてベルトを巻いたのは旗揚げ後、3年経ってからだった。

Masakatsu

――柔術のメカニズムを探るところからスタートだったんですね。
船木　ええ。で、帰ってきてすぐ「柔道衣を買ってきて」って新弟子に言って。で、みんなで着ておさらいですよね。「なんかこんな感じだったよな」ってやると、おもしろいようにかかるんですよ。知らない人には。ホントにおもしろいように極まるんで。それもいままで力を使ってたものが、使わなくても極まっちゃうんですよ。相手が動いてくれるのを待って、その方向を利用すれば簡単に入る。でも、それを試合で使うには道衣なしで使えなきゃいけないから、その技術をリング上で研究し始めたんですよ。
――試合中に研究してましたか。
船木　だから最初からわざとガードポジションを取って、そこから腕を極めるのがグレイシーは得意だから、自分たちはそこからどうやって足を極めるかとか、そういう挑戦をしてましたね。
――リング上の試合がそのまま実験の場だった、と。
船木　相手も柔術を知らないわけですから、探りながらやってましたね。
――当時、船木さんはけっこう勝ったり負けたりしてましたよね？
船木　そうですね。その頃がちょうど研究のときですね。
――ということは、勝敗よりもその研究のほうが優先順位が上だったというか。
船木　そうですね。たとえ負けても「これをやったら負ける」っていう研究結果が得られるんだからいいじゃないかって。で、次の段階の課題は、バーリ・トゥードで闘ったとき、スタンドでもグラウンドでも殴りがある中で、いかに関節技を極めるのかっていうことだったんです。で、打撃と組み技の境をなくすために、当時はまだオープンフィンガーグローブがそんなに普及してなかったんですけど、ブルース・リーが『燃えよドラゴン』で着けてたものを参考にして、業者の人につかめるグローブ、ハイブリッドグローブっていうのを作ってもらったんですよ。
――名づけてハイブリッドグローブ！
船木　試合で使う機会はなかったんですけど、トレーニングはそれを使ってやっていて。でも、いまのグローブよりアンコが大きすぎて、腕で挟まれるとグローブが抜けない、関節技が使いづらくなっちゃったんですよ。だから、そこからグラウンドは殴りを中心にして、関節技は一回捨てようって思ってしまったんですよね。
――グローブ着けてたら、関節なんて使ってられない、と。
船木　もし使えるとしたら、たまたま入ったチョークか、あとはよっぽどいいポジション取ったときの腕十字ぐらいしかないんじゃないかなっていうような、極端な発

VTでは関節技が極まらない ひたすら殴るしかないって発想でした

Masakatsu Funaki

想になっちゃいましたね。

――バーリ・トゥードに自分たちの関節技は有効じゃないって、思い込んじゃったわけですね。

船木　ちょうどその頃、パンクラチオンマッチっていう、金的、目潰し、噛みつきと髪の毛を引っぱる以外はすべてOKで、時間切れは勝敗なしっていうルールで2年弱やったんですけど、その頃はほとんど関節技には触らなくなってました。

――そこまで極端でしたか。

船木　はい。殴って組みついて倒して殴ってっていう練習ばっかりです。だからボクシングのコーチも入れて、週に一回は必ずボクシングだけの日も作りましたし。そのときの結論は、バーリ・トゥードで勝つには、殴り倒すのが一番早いんじゃないかってことでしたから。そのまま自分はヒクソン戦までいっちゃうんですけど。

――その前に、高橋義生選手がUFCでイズマイウとやって、スタンドでのボクシングと、倒れないということだけで勝ちましたけど。あの作戦は船木さんが立てたんですよね？

船木　そうですね。そのときは、それが一番いい闘いなんだという結論になって。パンクラスの道場も広尾（東京）道場は、バーリ・トゥード専門の練習。つまり打撃ですよね。そして横浜はパンクラスの試合用にレスリングと関節技で、あまり打撃に触らないような感じに分けたんですよ。

――なるほど。要は「寝技では絶対に敵わない」というグレイシー幻想が大きすぎて、サブミッションを捨てて、打撃特訓に特化した、と。

船木　そうですね。やっぱり、柔術に触れている時間というのは、あきらかに向こうのほうが長いじゃないですか。だから、同じことをやってたら絶対に敵わないと思ってたんですよ。でも、打撃だったらいいところに入れば、それで倒れますから。「一発逆転があるなら打撃しかないだろう」みたいな発想でしたね。

――イチかバチかの打撃以外じゃないと、グレイシーにバーリ・トゥードで勝つのは不可能なんじゃないか、と思い込んじゃっていた。

船木　〝ミラクル〟が起こるとしたら、打撃しかないと思ってたんですよね。そのために足関も全部捨てました。それはやっぱり高田（延彦）さんがヒクソンに足関を仕掛けて、逆に上を取られて負けたのを観てしまったんで。「これいっちゃダメだ」「これいっちゃダメだ」って、どんどん可能性がなくなっていっちゃったんですよ。最終的には一発逆転狙いですよね。とにかく打撃を当てるしかないと思ってたんですけど、いま考えればそれは墓穴を掘ってるんですよね。向こうはそれだけを警戒して、前に出てきたところを倒せば済むわけですから。

――船木さんが打撃で向かってくるのを待ってたわけですよね。

船木　そういう意味では、向こうの思うツボにハマッてったんですよ。そこで一回自分の格闘技生活が終わってるんで。

――あれはバーリ・トゥード実験失敗で。

船木　はい、失敗です。ただ成功してる人もいるんですよ、桜庭和志っていう。

――桜庭選手はvsグレイシー戦術の成功例を最初に発見した人でしたね。

船木　桜庭の凄いところは、打撃もあるんですけども、基本はレスリングで試合を組み立ててるんで、どちらかというとグレイシーと同類なんですよね。で、同類になった場合、ホイスよりも桜庭のほうが打撃が得

引退前の自分の実験は失敗だった でも、いまでも研究し続けてますよ

意ですから、そこで相性がよかったんでしょうね、桜庭にとってホイスっていうのは。

——桜庭選手はテイクダウンされない自信があるし、なおかつ打撃がホイスより得意だという。

船木 ホイスになくて桜庭にあるもののほうが多かったんです。だからどうひっくり返ってもホイスが桜庭に勝つ要素はなかったと思うんですよ。1時間半やっても勝てないっていうのは。それ以上やれば、おそらくローキックが効いてきたりしてるうちに打撃で倒されるだろうっていう。それでたぶんタオルだったんだと思います。

——桜庭選手はレスリングが得意ということで発想が船木さんと違ってたわけですかね。

船木 はい、違うと思います。グラウンドにいかせないっていう、普通に立っていればいいということができたんですよ。そうなると打撃は自分のほうが得意だから、相手はつかみにくることが最初からわかっている。だから、つかみにくるのを想定した打撃を打ち、つかまれそうになったら、それをいち早く阻止して、グラウンドにいかせなければ、極められる心配もないという。あとはスタミナが切れていくのを待って、打撃を入れていけば、自然に消耗してくるだろうっていうことですよね。

——桜庭さんはグレイシーと闘う前から、エンセン井上選手とかを通じて柔術対策の練習ができていたというのもあるんでしょうね。

船木 そうですね、だからある程度知ってるんですよ。知ってるからこそ、炎のコマとか、モンゴリアンチョップとか、「これもできるんじゃないの?」っていう発想が生まれてきたんでしょうね。自分の場合は逆に「これをやられたらどうしよう」というのが多かったんですよ。

——寝技で柔術に対抗する術をまだ知らなかった。

船木 そうですね。だからヒクソン戦の前に、エンセン（井上）さんに一回道場に来てもらったんですけど、一言「下にならなければいいヨ」って言われて。「やっぱり寝技になったら負けなんだ」って思っちゃって（笑）。

ふなき・まさかつ■1969年3月13日、青森県出身。15歳で新日本プロレスでデビュー。第二次UWF、藤原組を経て、93年にパンクラスを旗揚げ。2000年5月にヒクソン・グレイシーに敗れ引退。一昨年の大晦日、桜庭和志戦で現役に復帰した。180cm、84kg。

——ネガティブシンキングに。

船木 でも、まあそうなんだろうなって思いました。その前に菊田（早苗）選手とスパーリングしたときも、マウント取られたりしてたんですよ。だから、寝技になったらどうしようっていう心配が凄くありました。そして、みんな口を揃えて「下にだけはなるな」「立って勝負、立って勝負」って、それだけだったんで。それ以外はちょっと考えられなかったですね。

——なるほど。

船木 そして、当時の自分は失敗が許されない立場になってしまってたんですよ。

——パンクラス内で実験しながら船木さんが負けるのはいいけど、グレイシーとの他流試合では、絶対に負けが許されなかった、と。まさに時代のアヤというか。

船木 そうですね。そういう意味ではいまの状況で、みんながみんな柔術を知ってて、ある程度ボクシングのトレーニングもちゃんとしたコーチつけてやってるっていう現状が、当時はちょっと考えられなかったですね。もちろんお金もないし、いまみたいに『YouTube』なんかもなかったですからね。だからホントに貴重な試合のビデオぐらいしかないですよ。その当時も夢枕獏さんがマニア的なビデオをブラジルから仕入れてくれて、ダビングしてパンクラスに送ってくれてましたね。グレイシーのヤツとか。

——獏さんのビデオコレクションが唯一の研究材料って、どんだけ情報が少ないんだって感じですよね（笑）。

船木 もう全然画質も悪いんですけど、それしかありませんでしたからね。

——だから、時代的には船木さんのバーリ・トゥードでの闘い方は、研究半ばで、スタイルが固まる前に終わってしまった感じですよね。

船木 終わりましたね。それがあるからかわかんないですけど、復帰してからもいまだに自分で研究してますね。いまの闘い方をポンッと教えてもらっても、かたちはわかるんですけど、極めのポイントというか、それは自分で探さないといけないんで。いろいろ試して、自分の本当のポイントを見つけ出さないと、やっぱり身につかないですよ。

——いま格闘家を目指す選手たちは、みんな答えを教えてもらって、それを学んでいく感じだと思うんですけど、それだけじゃダメだ、と。

船木 いろいろ覚えても、それだと使いきれないんですよね。自分の技になってないから。自分はいま桜庭の道場で一緒に練習してるんですけど、桜庭って自分の技術をなんでも教えるんですけど、桜庭自身は自分に合った動き、技術をいまだに研究してるんですよね。だから桜庭は強いですよ。だから俺も桜庭も39歳ですけど、いまだに新しいことを求めてますから。いつも研究研究の毎日ですよ。

——なるほど。船木さんの研究はまだ終わらないということですね。

船木 終わらないですね。これからもずっと研究していくと思います。

【09年3月9日／二子玉川の中華料理店にて収録】

PANCRAS
HYBRID
Minoru Suzuki

プロレスと格闘技、理想と現実の狭間で

鈴木みのる と パンクラスの16年

「初めて自分たちで作った国。ただ、それを守りたかった」

船木誠勝とともに93年にパンクラスを設立し、プロレス転向した今もなお「パンクラスMISSION」として、その名を背負い続ける鈴木みのる。今や「世界一性格の悪い男」として、プロレス界を席巻しまくる鈴木自身に、そんな"今"の目から見たパンクラスの15年間、その中での自分の姿をじっくり、こってり語ってもらった。初めて明かされる秘蔵エピソードも多数のロングインタビュー、スタート!

聞き手／高崎計三　撮影／乾晋也　試合写真／パンクラス

鈴木　今日は何の話？

——今の鈴木さんの目から見て、パンクラスの歴史を振り返っていただければと。

鈴木　あっ、マジメな話なんだー（と、やや姿勢を正す）

——そうですね、わりとマジメです（笑）。

鈴木　それ、オレじゃない方がいいんじゃないの？　他に誰かいるでしょ。

——いえいえ、他の方にも伺いますが、鈴木さんの目から見た見え方はまた違うと思いまして。

鈴木　ああ、そうだね。分かりました。

——旗揚げ前は経済的にもかなり厳しかったようで、それでも乗り切れたのは「理想の団体を作る」という気持ちから？

鈴木　きつかったのはきつかったですけどね。理想の団体……というかっこいい言葉で、オブラートに包んでたんでしょうね。でも、こんなことがしたいと思って動いたのは確かかな。

——その頃の船木・鈴木の関係というのは、船木さんが主導だったんですか？　それとも対等で？

鈴木　オレが頼ってた部分もあったし。思い返してみると、まだ無責任な自分がいるというか。結局、最終結論は「船木さん、どうしよ？」っていうのはあったかな。でもそこで動いて、「船木さん、こういうの考えたんで、やりましょう」とか、自分で動くようにもなった境目ですね。

——完璧に自分たちで動くという意味では初めてですよね。

鈴木　「大人のいない世界」かな。責任を取ってくれる大人のいない世界……の入口がその時間だな。それまでは結局は不満があって、「こんなんじゃねえ」とか「あんなんじゃヤだ」とか言っても、責任取る大人がいて、文句を言う小僧だったから。

——言いっぱなしでよかったわけですね。

鈴木　オレが一番年上ですからね、24～25ぐらいで。そこで初めて入ってきた大人が、尾崎、廣戸ですね。そこで初めて、今までと違うことを言ってくれる大人と会ったんですよ。彼らは業界人じゃないから、あたりまえのことをズバッと言ってくれる。「君らのやろうとしてることは素晴らしいと思うけど、お金にはならない」とかはっきり言う人だったから。

——商売的な成功は考えてたんですか？

鈴木　もちろん考えてたけど、そこも子どもなんだよね、発想が。たくさんの大人の援助があったからオレたちはそこにいられたんだけど、例えば旗揚げの会場をNKホールにしたのも、「どうせなら大きいところでやって、自分たちを試そう。これで納得いくだけのお客さんが来なかったら、オレたちは世の中に必要ない」と。勝手に周りの大人を巻き込んどいてそんなこと言って（笑）。でも、それだけの覚悟があったから人に伝わったのかなというか。

——今までと違うことをするというのが一番大きかったですか？

鈴木　あと、頭の中にあった風景を現実にしたい。こんなリングを存在させたい。それを、ここまで来たらやろうよと。それで、過去にお世話になった先輩のレスラーで「一緒にやろうよ」とか、「スポンサーを紹介しようか」って言ってくれた人もたくさんいたんだけど、最終的には自分たちのやることを本当に理解してくれる人でなければお断りします、と。純度100％じゃないと、やる意味がない。それこそ生きてる意味がないと思ったんで。

——旗揚げまでの期間で話題になったのが、いわゆる「ハイブリッド・ボディ」でした。でも鈴木さんは、最後の方になるまで

やろうとしなかったとか？

鈴木　そう……やっぱりライバル心ですね、船木さんに対する。目の前で突き抜けて憧れの存在になっていった船木さんという存在をひっくり返したい自分がいて。要するに、自分が団体のエース、アカレンジャーになりたいわけですよ。それで船木さんとは別の動きをするようになって、追いかけるんではなく、そういった意味でも対等になってやろうと。最初の横浜道場を決めたのとか、完全にオレの独断ですからね。あの時は床のペンキも自分で塗ったりして、嬉しかったなあ……。そういうのもあって、パンクラスに対する気持ちも船木さんに対する気持ちも、それ以前とはかなり変わりましたね。

――初めて自分たちで作り上げる喜びがあったんですね。

鈴木　ありましたよ。道場は自分たちの城、パンクラスは国ですね。国作りをしてましたね。作り方も分からないまま、若者の情熱で。

――そんなこんなを経て、いよいよ旗揚げ戦。成功だと思いました？

鈴木　うん、よかったんじゃないかなあ。時代もあったんだと思いますけどね。全試合で合計15分でしたけど（笑）。

――衝撃でしたよね。

鈴木　狙ってできるもんじゃないですよ、アレは！　時代の後押しというか。自分で言うのもなんだけど、必要とされたんだと思います。世の中に。

――勝敗の価値観というのは、それまでとは変わりました？

鈴木　……まだですね。まだ、プロレスの延長でした。それがガラッと変わるのは、何年か経ってからですよ。うーん、いま振り返ってみると、勝たなきゃ誰も見てくれないってのはだいぶ分かってきて、でも結局オレの中では勝ち負けの価値観は変わってないような。だから置いていかれるんですけどね、あとから入ってきた人たちに。それにこの時点では、自分たちがすっげえ強いと思ってたから。だからそこまで切羽詰まってなかったんですよ。

――旗揚げの時点で、やはり「船木vs鈴木」が最高のカードとしてあったと思うんですが、「こういう状態になったらやろう」みたいなことはあったんですか？

鈴木　それはないですよ。あの時点ではね。次はこう、次はこう、ってやってただけだから。で、人もだいぶ集まってきたからチャンピオンを決めようよ、その前に一回やろうよ、という感じでしたよね。

93年5月16日、都内ホテルで設立会見を行ったパンクラス。ウェイン・シャムロックも正式に所属選手として名を連ね、練習生の國奥も合わせ8名の選手が出席した。

ru Suzuki

自分たちの世界を崩したくなかったから、グレイシーにも目をつぶった

――船木戦で、それまでの気持ちがいったん完結しちゃったりは？

鈴木　自分自身に感動しちゃって、それどころじゃなかったですね。お客さんも入った両国でやれた、あー負けた……それだけじゃないですか？　でも、そこから気持ちを入れ替えてタイトル新設には向かっていけました。いまの格闘技の選手とはまったく発想が違いますよ。だって、何もなかったんだもん。

――あの時点で、あれが最後の対戦になると思ってました？

鈴木　いや、僕が初代チャンピオンになって、防衛戦の相手に指名しようと思ってたんです。……ま、あれも冒険でしたけどね。10月と、12月2連戦で、結局両国で実質3連戦ですから。

――少し戻りますが、93年にUFCが始まって、グレイシー柔術が出てきました。鈴木さんはどう見てたんですか？

鈴木　正直言って、たいしたことないと思ってたんですよ。ナメてるんで。UFCだって、普通にシャムロックが優勝すると思ってたんですよ。それが負けたって聞いて、それでホイス・グレイシーって名前を知ったんですよ。映像を見たら圧倒的に負けてる。でも……どうだったんだろ？

――例えば船木さんはマチャド柔術に自分から飛び込んだりしてましたが。

鈴木　自分たちが苦しんで作ったこの世界を、崩したくなかったんじゃないかな、オレは。ヨソで何か始まっても、オレは見ないようにしてたんじゃないですか。

――旗揚げ当初、毎月やるのはキツイっていうのはなかったですか？

鈴木　なかったですね。柳澤や高橋が大ケガしたりして休む中で、僕は運良くケガしなかっただけで。誰もがそういうところでやってたんですよ。でもやっぱり、発想がプロレスの延長だったんで、毎回やらなきゃ、試合に出なきゃって感じでしたね。痛かったら麻酔打ちゃいいっていう。

――確かにいまの発想とは違いますね。

鈴木　そうですね。でも僕には、いまこうしてプロレスをやる上ではすごく役に立ってますね。ただあの頃、変わらなきゃいけないと思ってたのは事実だけど。でもやっぱ、自分が好きなんだよなあ……。発言なんかは、船木さんにも尾崎さんにも廣戸さんにも、しょっちゅう怒られてましたよ。この発言のこの言葉尻はダメ！とか、すごくチェックを受けましたね。立ち振る舞いも含めて。

――そんな細かいチェックを、受け入れられるものだったんですか？

鈴木　受け入れなければ、上に行けないと思ってたんで。要するに上の人たちが、早くオレたちのところに来いよって言ってるんだと思ってましたね。いつまでもガキじゃねえんだよって。そういう意味で変われた時期ですね。

――旗揚げ後、船木さんとの関係に変化はありましたか？

鈴木　オレの中では、並んだなあっていうのはありましたね。チャンピオンになったり、モーリス・スミスとやったりしたあ

たりで。そこで慢心したというか。そこからさらに上に行ったのが船木さんで、オレは置いていかれたんですよね。で、オレが近藤に負けたあたりから、道場に行ってもオレの方が壁を作るようになっちゃった。道場に行かない日が続いたりとか、雑誌読んだら船木さんが「別にもう鈴木はライバルじゃないし」って言ってたりとか（笑）。

——……。

鈴木　結局、いつも船木さんなんですよ。引退して、会社を抜けるまではオレにとっての船木誠勝という存在感はものすごく大きかったですね。でも最終的に、船木さんがパンクラチオンマッチをやるってなった時に、完全にオレは蚊帳の外だったんで。ヒクソン戦までは、尾崎さん伝いじゃないと船木さんの動向も分からない感じでしたね。でも、晴れちゃうんですよ。バカだから（笑）。ヒクソン戦の後、尾崎さんとオレだけ控室に呼び込まれた時に、モヤモヤした気持ちが全部晴れて。

——その頃からルールも変わって、パンクラスがより格闘技的な世界になっていきました。それは、鈴木さんの思うパンクラスとは違っていた？

鈴木　……かもしれないですね。でも、それを飲み込んで、受け入れてやってたのかもしれないですね。

——もうその頃はグラバカがあって、ｉｓｍ vsグラバカが盛り上がりました。菊田さんたちが入ってきたことで焦りはあったんですか？

鈴木　あったでしょうね。自分たちが作ってきた世界が変わっちゃうんですから。でもこの頃、ある人に言われた言葉がものすごく印象に残った言葉があって。その後、キャッチレスリングやったりソラールとやったりプロレスに行くときにも自分の心の柱にしてる言葉なんですけど、「変わることを受け入れたものだけが生き残れる」って言われたことがあるんです。

——はい。

鈴木　動物でも植物でも、進化っていうのは環境に適応したものだけがそこに残ると。変われた種族だけが、違う環境の中で生き残れる。変われなかったらそこで絶滅してるんだっていう話をされて、「だからおまえも変わらなきゃダメ」って言われたんですよ。それを考えるようになって、生き残りましたね。オレじゃなくて、パンクラスが生き残るためでしたけど。

——ＵＦＣやグレイシーが出てきた時とは大きな違いですね。

鈴木　僕が少数派で、ちっちゃかったからですよ。僕だけが変化を受け入れてなかったから。……旗揚げの時に、誓ったことがあるんですよ。船木と僕と尾崎と3人で。できるかどうか分からないけど、50年先、１００年先まで残るものを作ろうと。自分たちのやる試合は未来に続く試合だし、尾崎のやる仕事は未来にバトンタッチする仕事だっていうのが最初にあったんで、何かあるとそれを思い出すんですよね。残すためには、って。

——その責任がある、と。

鈴木　でも、それとは逆かもしれないけど、燃え尽きてない部分があるから、プロレスという選択肢に行ったんだと思うんですよ。これ、嘘偽りない本当の話で。キャッチレスリングをやってた時は、出し物的な感じでやってましたけどね。鈴木みのるじゃパンクラスはもう食えません、いまのトップは菊田、近藤、郷野、美濃輪です、と。でも鈴木みのるからあとどれだけ搾り取れますか、っていうところでやってたものですね。その時は、それでもいいと

Minoru S

思ってたんで。

それは受け入れられたんですね。

鈴木　受け入れなきゃいけないと思ったんで。生きる道はパンクラスにしかないという発想の下、ですね。第一線には行けない、でもそこそこ名前はある、多少なりとも券は売れる、雑誌のページは増える……だったらやった方がいい、ってことを素直に言われたんで。

——でもやっぱり、そのままずっと出続けるのは難しかったわけですよね。

鈴木　そこでまた変わったんですよ、僕も。変わった者だけが生き残れるんです（笑）。……正直に言うと、やめるつもりでいたんで。やり残したことはあとなんだろうって、引退ロードを考えたんですよ、社長と一緒に。その頃に、橋本真也さんと何年ぶりかに対談するっていう企画がサムライＴＶであって、あれがきっかけになりましたね。「対戦したいですね」って話になって、その後、橋本さんに真剣にオファーしましたからね。パンクラスに出て僕と対戦してくれませんかって。

——あ、その時はあくまでパンクラスで。

鈴木　はい。でも、ちゃんとした理由で断られたからいいんですけどね。「オレはプロレスラーだからプロレスしかできない。おまえはパンクラスでやってきたんだから、そこでやったらおまえにも失礼だし、無様な姿を見せられない。おまえの求めているものはオレは提供できない。提供できるのは橋本真也っていう名前だけだ」って言われたんです。

——ものすごく真っ当な理由ですね。

鈴木　それで、「やめる前に何か心残りねえかな」って……田村（潔司）が頑張ってんな、田村ともう一回試合したいなということでＤＥＥＰの佐伯代表と話をしたけど、結局ダメで。あれもダメ、これもダメで、鈴木みのるって本当に価値ねえなと。死に方を求めてるのに、誰も望みを叶えてくれない。それで最終的に出てきたのが佐々木健介だった。そういう選択をして、乗ってくれるテレビ局がいて、本人も会社もＯＫして、進んでたんです。本当に、自分の中でも最後だと思ってたんで。誰とやったら自分が燃え尽きることができるかっていうんで、最初は佐々木健介はなかったんです。もう一度、船木誠勝と……、叶わない。ヒクソンと……、ホイスと……、全部ダメで。それで橋本真也だ、田村潔司だって名前を出したけど、それも叶わなくて。それで最終的に佐々木健介に辿り着いて、それが動き出して。でも、ひょんなことからそれもダメになったんですね。

——佐々木選手のケガで中止でしたね。

鈴木　こんなこともできねえのかよ、オレって何てダメな人生なんだって、本当に思ったんですよ。これじゃ死んでも死に切れねえなと思ってたところにライガーから電話がかかってきて、「オレがやる」って。すんごく嬉しくて、試合したら全部弾けちゃいましたね。

——確かに、あの時の鈴木選手は生き生きしてました。

鈴木　完全に辞めるつもりもあり、後輩に譲るつもりもありっていう感じでしたね。それであの時は10周年直前で、僕の中で一つの計画があったんですよ。これ、ほかには誰にも言ってないんですけど。リング上で、「パンクラスの10周年はオレが仕切る、誰にも文句は言わせねえ」って言ったんですよね。その次の大会で郷野が返答してきたんですけど。

——試合後のリング上で、「パンクラスはみんなバカだ」という批判をしましたね。

02年11月30日、横浜文化体育館で鈴木はライガーと対戦。鈴木が2分足らずで勝利したが、12月21日、郷野聡寛がこの試合を真っ向批判。物議を醸すことになった。

ライガー戦で死にきれなくて、違う世界を見ちゃった

鈴木　正直僕が言ったのは、返答待ちの言葉だったんですよ。オレを追い出してほしかったんです、あれで。やめるつもりでいろんな試合を考えてダメで、ライガー戦……本当に自分の中で最後になるだろうと思っていた試合の中で、僕は死ねなかったんですよね。違う世界を見ちゃったんですよ、ライガーを通して。それに気付いたのはあとだったんですけど、あの時点では絶対言わなきゃいけないと思ってたのはそこだったんです。

――そう言って、「反応しろ」、と。

鈴木　言った真意は、文句言ってほしかったんです。なんでおまえがそんなこと言うんだよって。おまえなんか出てけって、ほかの選手に言われたかった。誰か言ってくれないかなあと思ってたら、郷野が言ってくれたんですよね。言ったら、みんな郷野にくっついたんですよ。言葉として。それで自分が追い出される形が作れたんで、すごくホッとしたんです。実際、僕がプロレスに移るときに、郷野にだけはその話をしました。

――あ、直接話したんですね。

鈴木　最後、「新日本プロレスに出ることになった」ってみんなに挨拶した時に、郷野にだけは「ちょっと1個だけ。実は感謝してる」って。今後誰にも言わないって言ったけど、もういまだからいいでしょう。何年も経ってますしね。その時点で、もう身を引きたかったんですよね。誰かとどめを刺してくれっていう意味だったんだと思います。介錯待ちというか。でも、結局死にきれなかった自分がいて、プロレスに行くんですけど。それもけっこう悩みましたけどね。……いいんですよ、変われたものだけが生き残れるんだから。

――その後は生き残るどころか、って感じですけどね。

鈴木　ハハハ。生き返っちゃいましたね。

――その後、パンクラスの景色も変わりました。

鈴木　僕自身、正直あの時点で危機感はものすごくありましたよ。だって船木引退以降、一番儲かった興行が、僕とライガーの興行ですよ。プロなんだから客を入れなきゃいけない。客からお金をもらってるんだから、っていうのは一度も変わらない、自分の信念なんで。どんなにハイレベルな闘いで、ものすごく強くても、客が入らなかったらそれはプロじゃないっていうのが僕の中にはあるんで。そのへんも彼らには変えてほしかったですね。でもみんな、いろんな舞台に行ってものすごく活躍してますからね。

――そしてグラバカも離れて、また変わることになりますよね。川村選手や北岡選手が中心になって。

鈴木　予想外の（笑）。でもいまから思い返してみれば、一人ともほかとは違うなってのはありましたよね。北岡はやたら理屈っぽいしね（笑）。逐一、直接文句言ってくるし。めんどくせえなコイツと思うんだけど、落ち着いて見ると、昔の自分を見てるみたいなんですよ。で、オレには受け止めてくれる人がいなかった。

――自分は受け止めようと？

鈴木　オレが間違ってたらあいつに素直に謝ろうと思ったこともあるし、受け入れてあげなきゃいけないと思ったこともあるし。最初は、北岡が一番気に入らない後輩でした。でもismになって、道場で何時間も話したこともあるし、そういうことを繰り返すうちにものすごく信頼できる仲間になって。

――川村選手は？

鈴木　入ってきた時はいわゆるトンパチ、っていうんですけど、あれは作りですね。トンパチを演出してますね、あいつ。ただ、その部分と違った天性の才能は、入ってきた時からありました。だってまったく何も知らないのに、僕が押さえ込めなかったりするんですよ。

――理屈じゃないものがあったんですね。

鈴木　それで、デビューにあたってどの階級が合ってるかって話になって、本人を呼んで「で、おまえは何になりたいの?」って聞いたんですよ。そしたら、絶対的スターというか、そういう存在になりたいと。

――おお、デカイ夢ですね。

鈴木　でもおまえ、ミドル級あたりじゃ絶対になれないよと。大晦日にテレビつけても、メインはノゲイラ、ミルコだろ?　なんでだ?　ヘビー級だからだよって。絶対この世界はヘビー級だよと。で、あいつには間違いなく肉体的才能があるんですよ。今時珍しく大きくて、均整の取れた体型をしてて。

――そうですね、貴重な存在です。

鈴木　おまえ次第で上に行けるよ、厳しい道だけど、と。どっち選ぶかは自分で決めなって言ったら、どんどんどんどん体重を増やした。そういう意味で、川村に願いを込めてる部分はありますね。いまは練習も見てあげられないし、僕から教えてあげられることもないですからね。でも、あいつらはよく聞いてきますよ。僕が知ってるのは最先端の技術じゃないけど、でも最先端の人間が知らないことを知ってたりする身近な人間なのかもしれないですね。

いまのパンクラスは、動乱の時代の中
一生懸命「生き抜いている」状態

――パンクラスは去年、15周年でした。

鈴木　とりあえず生き残ってます。いや、「生き抜いてる」ですね。生き残ろうとしがみついてるんじゃなくて、ビッグカンパニーがいきなり潰れるような動乱の時代を一生懸命に生き抜いてる状態で、16年。いま、オレがこの団体にしてあげられることなんかないですもん。自分たちが作った時はパンクラスという国を作り、道場という城を造り……から積み上げてきましたけど、代も変わって中の人たちも変わって、周りもただの原っぱだったのが他にもたくさん同じようなのができてって中でやってますからね。いまの彼らで、逆にその中を生き抜いていってほしいって感じですよ。僕にはプロレスがあるし……っていうか、僕の中でプロレスラーじゃなかったことは結局、一度もなかったような気がしますね。

――そういうことですよね。

鈴木　ハハハハ。カッコつけててね。格闘家にはないカッコつけというか、負けてもカッコつけようとするし(笑)。

――でも、今も「パンクラスMISSION」なわけで、パンクラスの名前はついて回ってますよね。

鈴木　名前だけですよ。いまは大した意味はないです。前は経営的なこととか、競技的なところまで関わってましたけどね。いま、ismに残ってる選手たちは僕がプロレスで活躍するのを楽しんでくれてるんで。よかったなと思いますよ。でも、「新日本にいたらどれだけスターになってたか」なんて言われるのをさんざん聞いてた船木さんがまだ格闘技界にいて、オレがプロレスでやってるんだから不思議なもんですよね。船木さんともしばらく話してないけど、ひさしぶりにバカ話でも……そんなヒマもないか(笑)。

――それぞれに忙しいですよね。

鈴木　船木さんも「おまえなんかと話してるヒマねえよ!」って言いますよ(笑)。僕は僕で楽しくやってる。そんな状態で迎えたのが、この前のミノワマン戦ですよ。

――2月10日の試合ですね。

鈴木　ismの人間の中にも、複雑に思ってるやつはいるみたいですよ。まだパンクラスの人間のはずなのに、何で同窓会みたいなものに出てるんだって。自分たちが守ってる自信があるから。でもそこは、仕事なんで。あれにもものすごく複雑な事情があったし、あのイベントに出てきた連中も、ああ、みんな元気でやってるんだなあってぐらいで。

――「50年、100年続くものを作ろう」と誓ったということでしたが、いまのパンクラスはそうなりそうですか?

鈴木　わかんないです。それは彼ら次第です、すべて。それを誓い合った人間は、全員手を引いた……というか、代を変えて、彼らに託したんですよ。会社が変わったのも一つの形だし、完全に新しい形態になったんで、これを生かすも殺すも彼ら次第ですね。潰れても仕方ないし、生き残ったらうれしいし。「絶対残せよ!」というものでもないし。託すっていうのは、多分そういうことじゃないんで。まあでも、おおいなる野望を持ってやってほしい。

【09年3月5日/横浜市・PsLAB横浜にて収録】

Minoru Suzuki

すずき・みのる■1968年6月17日、神奈川県横浜市出身。88年に新日本プロレスでデビュー、翌年UWFに移籍。藤原組を経て、93年に船木誠勝らとパンクラス旗揚げ。03年からは再びプロレスで活躍中。

〝外敵〟が語るパンクラス

郷野聡寛

Akihiro Gono

選手にとってパンクラスの魅力、そして、問題点はなんだったのか？それを考えるうえでうってつけの人材が、おなじみ郷野聡寛だ。修斗やさまざまな団体で試合をしたうえでパンクラスで活躍。その後もPRIDE、UFCと主戦場を移してきた郷野なら、内からも外からもパンクラスを語れるはず。というわけで、地方体育館からラスベガスまでを知る郷野に〝毒舌キャラ〟で鳴らしたパンクラス時代の思い出を存分に語ってもらった。

聞き手／橋本宗洋　写真協力／パンクラス

パンクラスは俺の格闘技人生の「青春」でした

——今回は「外敵から見たパンクラス」ということで、郷野さんにいろいろお聞きしたいと思ってます。

郷野　いや〜、でも俺、今年は人の悪口を言わないって決めたからなぁ（笑）。

——パンクラスを語る、イコール悪口ってどういうことですか（笑）。

郷野　やっぱりね、離れてるわけだから嫌な部分がなかったっていったらウソになりますよ。

——嫌なことがなかったら退団もしないですもんね。そう言いつつ、まず2001年、入団当初のことを振り返っていただければと思うんですけども。

郷野　懐かしいですねぇ。もう8年前かぁ……。

——当時、すでにパンクラスに参戦してた菊田（早苗）さんからはいろいろ聞いてたんですか？

郷野　もちろん聞いてましたよ。

——どんなイメージがありました？

郷野　……忘れちゃったなぁ。8年も前だし、そのあと試合でだいぶ殴られちゃってるから。脳細胞の数が減ってますからねぇ。こないだもジョン・フィッチにだいぶ打たれたし（笑）。

——じゃあ、まあゆっくりと思い出していただいて（笑）。

郷野　そうですねぇ。凄く選手思いの団体だって聞いてましたね。試合がやりたいって言ったらすぐに組んでくれるし、体格の合う相手もいっぱいいる、と。あと、会場に行くと高橋（義生＝現・和生）さんなんかが凄く良くしてくれたんですよ。

——フレンドリーな雰囲気で。

郷野　高橋さんって怖いイメージしかなかったんですけど、そういう人にやさしくされて。不良に落としたエンピツ拾ってもらったみたいなね（笑）。

——高感度アップしまくりで（笑）。

郷野　「いい人揃いじゃんか！」って（笑）。

——そうなったら心が動きますよね。菊田さんがプロ一本で生活できている状況も見てるわけですし。

郷野　格闘技だけで食べていけてるってことへのうらやましさは絶対にありましたよ。職業欄に「会社員」って書けるし（笑）。

——あ、パンクラスの所属選手だとそうなるわけですね（笑）。

郷野　そのときの俺は「アルバイト」とか「無職」になっちゃうわけですからね。20代半ばにさしかかって、社会的な体裁みたいなことも気になってましたからね。「会社員」の3文字は魅力的だし、うらやましかったですよ。「やってることは同じなのに身分が違うのか」って。

——パンクラス参戦にあたっては、尾崎社長なりスタッフなりとどんなお話をされたんですか？

郷野　いや、会ってなかったんじゃないかなぁ。菊田さんを通して、まあ口約束ですよね。「いつ、誰と試合」っていう。

——金銭的な部分はどうでした？

郷野　たしか、修斗で一番高かったファイトマネーと同じ額を、一発目で出してくれたのかな。「これが始まりなのか。じゃあ、あとは上がってくだけだな」って思いまし

たね。そういう面でもやる気は出ましたよ。

——そのときから、バイトなしで食っていけるようになった感じですか。

郷野　そうですね。パンクラスに参戦してから。

——まさにプロとして一人立ちしたというか。実際に試合をしてみて、パンクラスにはどんな印象がありました？

郷野　前もインタビューで言ったんですけど、先輩・後輩の関係じゃないっていうのが修斗とは違いましたね。修斗は、選手を引退した人が運営に回ってましたから。どうしても、先輩として上からものを言われちゃうんですよね。逆に下からはものを言いづらい。

——パンクラスでは、選手は選手、スタッフはスタッフと明確に区別されてて。

郷野　やっぱり選手を立ててくれるというか。選手が年下でも、スタッフは敬語で接してくれますしね。「選手あってのパンクラスだから」って。これがプロ扱いされるってことなのかなって思いましたね。

——パンクラスでの郷野さんは、毒舌キャラを確立していきましたよね。修斗時代とはうって変わって。

郷野　言葉で角を立たせるというか（笑）。嫌われ役でいこうっていうね。もともとグラバカは異分子集団だったじゃないですか。そんな中で、俺がナンバー2のポジションで参戦してきて。

——より異分子としての存在感を際立たせようと。

郷野　菊田さんにも「憎まれキャラでいっちゃってよ。そのほうが盛り上がるから」って言われてましたしね。

——ただ、それまではキャラうんぬんなんて関係ない世界にいたわけじゃないですか。違和感はなかったですか？

郷野　違和感とか、嫌われることへの怖さとかは全然なかったですよ。盛り上げるためにやってるって自覚があったし、憎まれれば憎まれるほど、「いま俺、いい仕事してるな」って充実感もありましたから。そういうふうに考えてやってくと、返ってくるものも大きいなって感じましたね。

——たとえばどんな部分ですか？

郷野　船木（誠勝）さんが、解説で俺のこと認めるようなこと言ってくれたり。それまで船木さんなんて雲の上の存在でしたからね。そういう人に顔と名前を覚えてもらって、認めてもらえたのは凄く嬉しかったですよ。ギャラもね、これまでにないペースで上がっていきましたし。交渉していく中で「勝ったらこれだけ上がるんだ」「あ、また上がった」っていう。当時の俺からしたら、かなり大きい額でしたよ。

——結果を出してるのはもちろんですけど、団体を盛り上げてることを正当に評価してもらったわけですね。

郷野　で、盛り上げるだけ盛り上げて、近藤（有己）にすべてを差し出したかたちなんですけど（笑）。

——対抗戦のクライマックスで惨敗してしまったという。

郷野　でも近藤戦は助演男優賞じゃないけど、俺が盛り上げたんだって自負はありましたね。

——10月の大会で山宮（恵一郎）選手に勝って「パンクラスの元チャンピオンってこんなもんか!?」って毒づいて。で、その場で近藤戦が決定してっていう流れは抜群でしたよね。試合直後の控室で尾崎社長からオファーがあったという。

郷野　ムチャな話ですよねぇ（笑）。

——事前に「勝ったら次は近藤戦で」みたいな話はあったんですか？

郷野　いや、全然ないです。

——じゃあ、本当に突然のオファーで。

郷野　俺はちょっと休みたくて、うしろ向きに迷ってたんですよ。そしたら菊田さんが「こんなチャンスないから、やったほうがいいよ」って。

——山宮戦が10月31日で、近藤戦が12月1日ですよね。そういうスケジュールの試合を受けたことも、郷野さんのプロ意識が高まってた証拠なのかなっていう。

郷野　いや、プロ意識があったら、ちゃんと準備しなきゃダメなんですよ。ただ、昔、近藤と一回だけ練習したことがあって、寝技だったら俺のほうが強かったんですよ。それで「近藤なら勝てるな」っていうのがあったんですけど……甘かったですよね（笑）。試合間隔をしっかり取らなかったのも甘かったし、総合と寝技だけの区別がついてないのも甘かった。ま、うまく尾崎社長に利用されちゃったかなと（笑）。

ファンに憎まれれば憎まれるほど いい仕事してる充実感がありましたね

——ただ、近藤戦があった横浜文体大会はお客さんも入ったし、パンクラスファンの興奮ぶりがハンパじゃなかったですよ。

郷野　盛り上がってるなって手応えはありましたね。あの試合の前って、取材の数も凄かったんですよ。だって、『ぴあ』にまで載りましたもん（笑）。

——バイト格闘家時代では考えられない扱いですね（笑）。

郷野　『ぴあ』で1ページですからねぇ（笑）。そういうことがあると、俺も単純なんでパンクラスのことが大好きになっちゃって。「パンクラスのために頑張りたいな」っていう。

——ヒールだけど、団体愛があった、と。

iro Gono

郷野が全幅の信頼を寄せるGRABAKAのボス・菊田早苗。彼の存在があったからこそ郷野もパンクラス参戦をはたし、さまざまなアドバイスがあったうえで才能を開花させたのである。

近藤に負けて「これでパンクラスが修斗より下に見られることはない」って

郷野　俺、修斗では勝ったり負けたりだったじゃないですか。そういう選手が連勝して近藤にまで勝っちゃったら、パンクラスの価値が相対的に下がるんじゃないかって危惧もありましたから。

――自分の大一番で、勝ったときの危惧まであったんですか⁉

郷野　あの試合はボロクソに負けて大ケガして、凄いへこんだんですけど、「これでパンクラスが修斗より下に見られることはないな」とも思ったんですよね。

――凄い感覚ですね、それは……。

郷野　そういうとこあるんですよね、俺は。よけいなことっていうか、全体を見ちゃう。その場所が盛り上がってこそ自分も活きるって感覚。だから負けて悔しいけど「よかった面もあるよな」って。

――あの時点では参戦から半年ちょっとじゃないですか。それでも完全にパンクラスと相思相愛ですよね。しかもあの試合で、郷野さんは長期欠場に追い込まれてるんですから。

郷野　「逆に勝ってたら、俺はいいけどパンクラスはどうなるんだ」っていう思いがありましたね。

――パンクラス史上最大の憎まれ役が、そこまで団体を愛してたとは誰も気づかなかったでしょうね。

郷野　へへへ（笑）。まあ、団体を思う気持ちは相当ありましたよ。そういう気持ちになったのは、パンクラスが初めてでしたねぇ。

――UFCに対しては、そういう気持ちってあります？

郷野　そんなの、俺がいようがいまいがUFCにはなんの影響もないですよ（笑）。

――団体に対してとは別に、試合をしていく中でパンクラスの選手に対してはどんなイメージを持つようになりました？

郷野　正直、日本人相手だと楽だなとは思ってたんじゃないですかね、当時。まあ、俺が初めて注目を浴びた時期なんで、いい気になってたのは間違いないです（笑）。

――当時、菊田さんが美濃輪（育久）選手を評して「ミラクルがある怖さ」って言ってたんですよ。

郷野にとってパンクラス参戦後、初の大一番といえた2001年12月の近藤有己戦。パウンドでボコボコにされ、病院送りになったが、そこには秘められた思いがあった……。

Akihi

郷野　それは単純に、やってることが違うってことでしょうね。グラバカとは違う練習をしてるっていう。自分の経験とか記憶では計り知れない感じっていうか。自分たちは総合格闘技のセオリーをやってるわけじゃないですか。テイクダウンしてパスしてマウント取ってっていう。でも向こうは、いきなり足関取ってきたりとかね。

――はいはい。

郷野　合理的とは思えない力技をやってきたり。いま思えば、そこだけだったんですけどね。

――技術の差があるから簡単に勝てる場合もあるし、逆に怖い部分もあるし。

郷野　でも怖いですよ、どっちかっていったら。

――「俺たちが知ってることを向こうは知らない」っていう感覚よりも「自分たちがやってないことをやってくる」怖さがあるというか。

郷野　みんなそうだったと思いますよ。「ここに投げれば打たれない」じゃなくて「ここに投げたら打たれる」って意識しちゃう感じですよね。

――じゃあ、傍から思うほど「見下し感」があったわけじゃないんですね。

郷野　それで自分の能力に制限かけちゃうってところがありましたよ。俺が山宮さんとやったときは、佐々木（有生）と石井（大輔）くんの試合もあったんですよ。

――5vs5の対抗戦でしたよね。

郷野　あのときは後楽園に向かう車の中で、二人して「怖いよなぁ」って言い合ってましたもん。「山宮さんかぁ。ヤだなぁ……」、「俺も石井さんっすよぉ……」って。

――へぇ～。

郷野　それくらい恐怖心は感じてましたよね。山宮さんはボクシングとレスリングが強いし、石井くんも打撃強いし。俺らとは質の違う強さがありましたからね。

――それと、近藤選手がかなり大きな存在だったと思うんですよ。郷野選手も完敗して、その後もかなり意識した発言が多かったですし。

郷野　あの負けはデカかったですねぇ。負けた直後は「何回やっても勝てないんじゃないか」ってくらいの心の折れっぷりでしたから。もうコイツとはやりたくないっていう。

――近藤選手って、郷野さんから見るとどういう質の強さなんですか？

郷野　いま思えば、（グラウンドから）立ち上がる力とスタミナだけだったと思うんですけどね。やられた当時は、客観的に見られなかったです。それくらい近藤っていう存在がでっかく見えちゃって。

――お話を聞いてると、プロとして一本立ちできたし、ライバルもいるしで、パンクラス時代って凄く充実してた感じですよね。

郷野　そうですね。いま思えば、一番充実してたし、楽しかったんじゃないかな。

――なんて言うんですかね。青春？

郷野　あぁ。格闘技人生における青春はパンクラスだったなって気はしますよね。同じ目的を持った仲間と、一緒に汗流して、一緒に会場行って、勝ったらみんなで喜んで、負けたらみんなで悔しがって。一番、純粋に格闘技を楽しんでた時期じゃないですかね。小さな集団が大きな団体に立ち向かっていくヒロイズムもあったし。

――まだジムもなかったですしね。

自分がいたころのパンクラスといまのパンクラスは別物にしか見えない

Akihiro Gono

パンクラス時代の郷野といえば毒舌「寝起きでも近藤に勝てる」などリング内外でパンクラス本隊の選手を挑発しまくったのだが、そこには知られざる"パンクラス愛"が……

ごうの・あきひろ■1974年10月7日、東京都出身。さまざまなアマチュア大会で"天才"の名をほしいままにし、修斗、そしてパンクラスで活躍。PRIDEを経て、その後UFCで世界を相手に奮闘。176cm、77kg。

郷野　ジムができたのは2002年ですからね。パンクラス時代の途中ですよ。何も持ってない集団が、一つ一つ積み上げていく楽しさがありましたよね。公私ともに充実してましたよ。

――あ、「私」もですか。

郷野　もうね、狙った女の子はすべて(笑)。我が世の春だったなぁ……。

――遠い目をしてますけども(笑)。女の子はともかく、パンクラス時代に感じた充実感って、それ以降とは違うわけですか。

郷野　まあ上に行けば行くほどね、大人の世界ですから(笑)。パンクラス時代って、子どものまんまで一心不乱に挑める楽しさがありましたよね。

――ただ、青春時代っていつか終わりがくるわけで。

郷野　そうですねぇ……。いや、だから人の悪口を言わないって決めたんで(笑)。

――あれだけパンクラスを盛り上げたグラバカがフリーになるわけですから、いろいろありますよね。

郷野　簡単に言うと、グラバカとパンクラスの方向性の違いですよね。

――パンクラス以上にグラバカが成長していったという。

郷野　そうでしょうね。こっちもいろんなものが見えてきますから。そうなったときに、やっぱりトップの度量というか……。ん〜、難しいっすね、このへんは。まあ、トップ同士の話し合いですからね。俺らはそこから流れてくる話を聞いてただけなんで。そういう中でも、「これはパンクラスを離れる充分な理由になるな」ってものがありましたけどね。

――パンクラスを離れて、新しい世界を目指そう、と。

郷野　寂しさはありましたけどね。もう一回パンクラスを盛り上げて、近藤と再戦するんだって気持ちもありましたから。その目標が急になくなって、心にポッカリ穴が開いた感じはしましたよ。……あ、そうだ！　俺のパンクラスの最後の試合って桜木(裕司)戦なんですよ。

――キックルールでKO負けした試合ですよね。

郷野　そう。それでニューヨークに傷心旅行行ったりして、離脱どころの話じゃなかったんだ(笑)。みんなの流れに乗ってただけというか。

――なるほど(笑)。で、それ以後はPRIDE、そしてUFCと活動の場を移していくわけですけども。いま、離れた場所からはパンクラスがどんなふうに見えますか？

郷野　これは……難しいなぁ(笑)。みんな大変なんだろうなぁっていう(笑)。

――いろいろ大変でしょうね

郷野　自分がいい時間をすごさせてもらったパンクラスと、いまのパンクラスは別物にしか見えないんですよね。そうなると特別な感情とか思い入れもなくなっちゃいますしね。

野球部OBなのに、自分が卒業した学校が野球部なくしちゃったみたいな感じなんですかね。

郷野　そういう意味では、数多くの名選手を輩出してるんですけどね。名門校でしたよ、パンクラスは。

――名門校復活には、どうしたらいいんですかねぇ。

郷野　そこまではわかんないっすねぇ。いかんせん脳細胞が死んでるんで(笑)。

【09年3月3日、『kamipro』編集部にて収録】

パンクラス審判部長が
初めて語るハチャメチャ人生

廣戸聡一一代記

「僕は戦国武将・山本勘助の末裔なんです」

パンクラス旗揚げから現在まで、ずっとメインレフェリーとして多くの試合を裁いていると同時に公認トレーナーとして選手たちの体のメンテナンスも請け負っている廣戸聡一氏。だが、その来歴、特にパンクラス以前のことは意外と知られていない。この機会に聞いてみたら、意外かつハチャメチャなエピソードのオンパレード！　廣戸氏のイメージがガラリと変わるに違いないインタビューになってしまった！

聞き手　高崎計三

船木くんと出会った「ある流派」では猪木さんの浴びせ蹴りを受けてました

——廣戸さんって、パンクラスの旗揚げからレフェリーをされてますよね?

廣戸　旗揚げメンバーでいま残ってるのは僕だけですよ!　辞めるに辞められなくなっちゃった。「みんな汚ねーよ!」みたいなさあ(笑)。

——置いていかれた、と(笑)。

廣戸　まあ旗揚げから15年以上経って紆余曲折あったんですけど、唯一、初志を引き継がなきゃいけなくなったっていうのが、苦しくもあり、誇らしくも楽しくもあるんですけどね。でもみんな、僕がパンクラス内部の人間だと思ってるけど、違うからね。僕は廣戸道場としてパンクラスから(業務を)委託されて関わってるだけで、その部分だけのつながりですから。

——そうなんですね。僕も誤解してました(笑)。そもそも関わることになったのは、船木誠勝さんとの出会いからですよね。

廣戸　そうですね。そうなると倍の年数ですよ(笑)。僕があるところで格闘技の仕事をしていて、15歳の船木くんの教育係になって、「格闘技っていうのはこういうもんだよ」ということを教え、あるときはスパーリングをして、「倒れるっていうのはこういうことだよ」「痛いっていうのはこういうことだよ」と教えて、その当時は楽しかったですよね。それから何年かブランクがあったんですけど、僕の患者さんが船木くんの当時所属していたプロレス団体と関わっていたことから、めぐりめぐって用賀の焼肉屋で再会して食事したことから、また関わるようになって。

——ちょっと待ってください!　じつは今日は、いまサラッと流された「あるところで格闘技の仕事」という部分も詳しくお聞きしたいんですよ。公式プロフィールでもそのことはまったく触れられていないようなので。

廣戸　僕は破門になった男だからね。でも後日、東京ドームで当時の師匠とお会いしたときに、「おおっ、キミも立派に卒業したよな!」って言われて。僕は退学させられたと思ってるんだけどね(笑)。僕のほうからは具体名は出せないですけど。まあ、いまは当時の師匠も、「もう名前を出してもいいよ」と言われると思うんですけどね。でも正直言っちゃうと、そこにいた頃から僕は、いまの「4スタンス」とか自分の理論を使ってやってたから。そういうのもあって、あんまり出してなかったんですけどね。

——まあでも、今回はいろいろ教えてください(笑)。

廣戸　レオン・スピンクス戦の前に猪木さんが道場に特訓に来たときがあったでしょ?　そのとき『東スポ』にねえ、僕が猪木さんの浴びせ蹴りを受けてる写真があるはずですよ。

——猪木さんの浴びせ蹴りの受け手役でしたか!

廣戸　こ〜んなデカい足をね。しかも、全然離れたほうに来る足に当たりにいってましたよ(笑)。「オレ、やられ方うまいな〜」とか思ってましたから(笑)。

——そんな大役を(笑)。そもそも入門したのはいつなんですか?

廣戸　それがねえ、また情けない話なんですよ(笑)。話すと僕の人生を振り返ることになっちゃうけど。

——そんなまた、聞きたくなるじゃないですか!

廣戸　僕はもともと野球少年だったんだけど、剣道とかは昔からやってて、剣術っていうのを教えてもらった最後の世代なんですよ。近所の町道場でおじいちゃんの先生が庭で裸足で教えてたんだけど、「つばぜり合いになったら胴を足で突き飛ばして打て」とか、「足をからめて投げろ」とか教えてくれるわけですよ。

——まさに実戦剣道ですね!

廣戸　そうそう。それで、小学3年生のときに新潟の長岡市で、僕のいた三鷹市と街同士の親善友好試合みたいなのがあったんですよ。そこでそういう技を使っちゃって、つまみ出されて二度と長岡には呼んでもらえなかったっていう(笑)。

——のちにルールの番人となる人が、剣道のルールを逸脱した行為をしてましたか!(笑)。

廣戸　僕の前のヤツがボコられて泣いちゃってて、勝ち抜き戦だったから「よし、オレがやってやっからな」って言って。胴をボコーン!って突いて、倒れて起き上がろうとしたところをボコボコにして。

——どんだけ反則王なんですか!　それバダ・ハリ級ですよ!

廣戸　それで親善友好試合の雰囲気じゃなくなって、本来払わなくていいはずだった遠征費まで払わされちゃった(笑)。

——小学3年生とは思えないエピソードですね。

廣戸　それからは野球をやってたんだけど、ちょっと身体を壊しちゃって、15〜16歳ぐらいから「身体を治す」ってことに興味を持つようになったんですよ。それでそういう方面の勉強ばっかり、一生懸命やって、専門学校に入ったんですけど、プラプラプラプラしてたわけ。そしたら凄い怖い先生が「おまえはこのままじゃどうしようもないから、オレのところに来てインターンをやれ」って言うから行ったんですよ。だけど、一番下っ端なのに朝のギリギリの時間にタクシーで乗りつけたりして、メチャクチャで。

——怖いもの知らずな感じで。

廣戸　でも実務はちゃんとやってたんだよ。そしたら卒業間近な時期にまた呼ばれて、「オレはもう、おまえのことではほとほと疲れた。オレにはおまえはもう無

86年、猪木がレオン・スピンクスとの異種格闘技戦を前に骨法特訓を行ない身につけたあびせ蹴り。その実験台が廣戸レフェリーだったとは!

これまでパンクラスのメインレフェリーとして数多くの名勝負を裁いてきた廣戸レフェリー。しかし、レフェリー以外の顔がじつに興味深い人物でもあったのだ

廣戸隆一

理！」と。

ギブアップ宣言（笑）。

廣戸　「ラッキー！」とか思ってたら、「だからオレの先生のところに行け！」って言うのね。「おまえ、明日から2〜3日ヒマか？」って。「観光バスで行くから、朝7時に着替えだけ持って新宿駅前に来い」と。どっか連れてってくれるのかなと思ったら、謎のむさ苦しいバスがいて、合宿に連れていかれたんですよ！

――いきなり合宿ですか！

廣戸　そう！　そこで初めて当時の師匠と会って、先生から「今度お世話になる廣戸です」とか言われて。「ええっ、オレ、ここにお世話になるのかよ⁉」って（笑）。ほとんど身売りみたいな状態でしたよ。

――行き先はどこだったんですか？

廣戸　河口湖だったかな？　もう、とにかく帰ろうにも帰れないような場所ですよ。

――ちなみにそれまでに、その流派のことは知ってたんですか？

廣戸　全然！　それまでボクシングとか柔道とかはやったことがあったけど……あっ、柔道といえばね。

柔道でも何かあるんですか？

廣戸　高校のときに、柔道部でもないのに「試合に出ろ！」とか言われてたの。断ってたら顧問が、「オレと試合して勝ったらやらなくていい」って言うから試合して、勝ったのね。内股すかしからのバックドロップで。

――リアル『1・2の三四郎』じゃないですか！

廣戸　それで「卑怯者！」とか言われて（笑）。もう1回やろうって言うからまた同じ技で勝ったら言われなくなったんだけど。そんなこともやってたから、合宿に行ったときも「ああ、格闘技かあ」ってぐらいで、しばらくしたらまた先生のところに戻してもらえるだろうと思ってたの。

――そのまま入っちゃったわけですか。

廣戸　だけど、ひどい弟子だったよ。1週間まともに練習したら、次の1週間は道場にも来ないっていう。僕だったら許さないけどね（笑）。

――ここでも素行が悪かったわけですね。廣戸さんってマジメな人なのかと勝手に思ってたんですが……。

廣戸　ぜ〜んぜんマジメじゃないよ！　マジメだったらさあ、まったく違う人生になってたと思うよ！　それでね、その流派にいたときも、オレがいないと周りの仲間とか兄弟弟子とかが怒られるわけ。「廣戸はどこに行ったんだ！」って。でもケータイもない時代だから連絡とれないと、果てしなくいないわけよ。それで周りの仲間や兄弟弟子が「おまえ、いいかげんにしてくれ」って泣きついてきて。まあそれで、少しはマジメにやるんだけどね。

――まあ普通は、泣きつかれたらやりますよね。

廣戸　でもちょっとやったらまた味を占めて、「これだけやっとけば大丈夫か」って感じで、またサボっちゃう。それである時師匠に呼ばれたの。「今回は何をやっただろう？　よし、とにかく謝っとけ」と。

――思いあたる節がありすぎるわけですね（笑）。

廣戸　それで目の前に行くなり「すみませんでした！」って頭を下げたら、「よし。おまえがそういう気持ちだったら、プロになれ」って。「ええ〜っ！」みたいな。

――まさかの展開、っていうか自爆じゃないですか（笑）。

廣戸　「しまった〜！」ってね。それから治療のほうはある程度免除されて、1日の

87年当時、ともに骨法を習い「骨法コンビ」と呼ばれていた船木と山田恵一（ライガー）　この同時期から船木と廣戸レフェリーは交流があったのである。

大半を格闘技に費やすことになって。でもそれからは、酒もたばこもやめて、一生懸命練習しましたよ。朝10時から夜12時まで練習でしたね。

――14時間！　休憩は？

廣戸　夕方の6時から30分だけがメシの時間で。練習が終わって家に帰って、風呂に入ってゆっくり食事して、それからもう一回、夜中に稽古してましたもん。ロードワークとか、上下合わせて20枚ぐらい着込んで、10キロの鉄アレイを持って腹を殴りながら夜中の井の頭公園を走ってましたからね。

――なんですか、それは！

廣戸　だからやたらと警官に止められてましたね。そのうち慣れて、止められなくなったけど。だって、マシュマロマンみたいに着ぶくれしてるんですからね。それが腹を殴りながら、「う～っ！」とか唸りながら鼻血流して走ってくるんですよ。

――なんでそんなに着込んだんですか？

廣戸　僕、あんまり汗をかかなかったんですよ。だから走る前にたくさん水分を取って、そうやって老廃物を出してたんです。だから靴の中に汗が溜まって、足跡ができてましたから。

――それはもうホラー映画ですよ！

廣戸　身体にも悪いしね。そのうち血尿とか出始めて、それでやめました。

――稽古自体も厳しかったんでしょう？

廣戸　そりゃもう。拳にヒビが入ってても、じん帯が切れてても休めないですからね。それで整体治療も担当してて、治療すると自分に激痛が走るんですよ！　「絶対オレのほうが身体悪いよ！」と思いながら。

――そんな日々の中で船木さんと出会うわけですか。

廣戸　そうですね。猪木さんの担当だったから、そのまんま。特殊な蹴りもできましたからね。僕は、本当はつかんでの近距離のパンチとかが得意なんだけど、体操教室に通ってたこともあって小3ぐらいでバク転とか全部できたから。でも大変だったんだよ、アレ。

――いきなりボヤきますね（笑）。

廣戸　だって浴びせ蹴りなんてリスキーだし、疲れるし。でも、もう代名詞的な技になっちゃったから出さないといけないし。それに、倒さないといけなくて。スパーリングやってると、終盤に「倒しなさい」って指示が出るんですよ。まあ、いい経験になりましたけどね。

――在籍中はずっと船木さんと？

廣戸　あと（獣神サンダー・）ライガーさんとかね。ほかにもいろんな人を担当しましたよ。武藤敬司さんも来ましたし。

――あっ、そうなんですか？

廣戸　一日2000発蹴られたの。そしたら翌日、「足が痛いので行きません」って言って、それっきり。蹴られたオレの身にもなれよって（笑）。

――そんなことが！

廣戸　そういうことをしながらも、僕は早朝野球をやったりジープで山に行ったりもしてたんですよ。

――どこまで精力的なんですか！

廣戸　土曜は夜の練習をナシにしてて、深夜1時頃帰ってきてメシ食ってると、友だちが遊びに来るんですよ。3時ぐらいにだいたい集合して、4時半ぐらいに明るくなってくるから、「そろそろ行くか」って言って野球やって。1ゲームやって9時ぐらいに帰ってきて、みんなは僕の家でシャワー浴びて朝メシ食って、それからやったばかりの試合のビデオ観るんだけど、僕だけは着替えて、「道場行ってきま～す」っ

て。ジープで行くときも、夜中に川や山を走って、朝帰ってくるの。

——寝てないじゃないですか！　平気だったんですか？

廣戸　うん（笑）。でも「寝なくて平気」は、1週間練習して1週間休むっていうチャラい時代も同じだから。

——でも、その頃は住み込みじゃなかったんですか？

廣戸　それがさ（笑）。当時、内弟子はみんな住み込みで、師匠の家の近くのアパートにいたんだけど、「僕は引っ越しませんよ、先生！　僕はフリーの時間がなかったら死んでしまいます」って言って。「どうしてもって言うなら辞めます」って言ったら、「じゃあ、いいや」って（笑）。

——強引に認めさせたんですね。

廣戸　僕はずっとそんな調子で、退会届も何回出したことか。

——本当にとんでもない門下生ですね！（笑）。ところで15歳の船木さんはやっぱり違いましたか？

廣戸　純粋で頭がクリエイティブでしたね。だから、頭で思ったことを身体ができたんですよ。言われたことを頭の中で映像化できた。それで演技の世界で活躍できたし、試合のときも一発でも自分の世界に入れたんですよね。

——二人での練習はいつまで？

廣戸　僕がその流派を辞めたとき、船木くんがちょうど海外遠征に行ってたんだよね。だから、あとで「ひでえ！」って言われましたもん。「帰ってきたらいないんだもん」って。「悪いなあ」とは思いましたけどね。

——じゃあ、鈴木みのるさんとの出会いはもっとあとなんですね。

廣戸　そう、パンクラス旗揚げのときですよ。船木くんから「自分が信頼してるヤツがいて、そいつと格闘技団体を作りたいんだ」って言われて会ったのが最初ですよ。

——なるほど。話をちょっと戻しますが、「その流派」を辞めたのは……。

廣戸　辞めたいきさつはいろいろあるんですが、とにかく「破門」ということを言い渡されて辞めまして、もう自由になった、と。車乗り回して、「ビバ！チャラい人生」ですよ（笑）。でも3日ぐらいやってたら飽きちゃって、夜中に家に戻ったら黒い服着た20人ぐらいの集団が待ってるわけ。

——あからさまに怪しい（笑）。

廣戸　「すわ、刺客か!?」と身構えたんだけど、よくよく見たら道場生たちがベソかいてて、「なんで辞めたんスか！」って言うわけ。でもこっちは辞めた身だから、内部批判するのは男らしくないじゃん。だから「言わないよ」って言ったの。そしたら翌日、またやってきて。「『言わない』って言ったでしょ」っつったら、「いや、僕たちも辞めてきました！」って。

——大量後追い離脱（笑）。

廣戸　「もう対等だから教えてください！」って。彼らとはいまも付き合いはありますけどね。まあそれからは、自分の考えていた身体理論の研究に没頭できるなと思ったんだけど、でもそれまで格闘技の世界で命のやり取りみたいな中でやってたから、急につまんなくなったんだよね。

——平和が物足りない、と。

廣戸　それで船舶の免許取ったり、射撃やったりとかいろいろしたんだけどね。20歳ぐらいの頃にもテント一つ持って北海道の雪の中を放浪したりしてるから、「オレ、死ぬかも！」っていう状況が好きなんだろうね。自分にどのぐらいの生命力があるか試してみたかったんですよ。

夜中に10kgの鉄アレイで腹を殴りながら公園を走ってました

——「生死の境」中毒ですか（笑）。

廣戸　あと、アフリカのジャングルを切り開きながら進むカーレースの日本代でベスト4までいったりとか。まあ、そんなんでエンジョイはしてたんですけど、ひょんなことからパンクラスに関わることになっちゃって。いままで一回だけパンクラスの興行を休んだのは、そのレースと重なったときだけですよ。

——そこからは整体を主収入に？

廣戸　もう、辞めた直後から患者さんは診てましたからね。でも、門下生だった頃も、朝行く前に実家で患者さんを二人診てたんですよ。だから実質はそこから始まってた感じですね。まあそれもあって、住み込みはイヤだったっていうのもあったんですけどね。

——最初から開業してたんですか。

廣戸　最初は実家を改装して、看板も出さずにやってたの。「廣戸さんの息子さんのとこ」みたいな感じで（笑）。そしたら専門学校のOB組織みたいなところから電話がかかってきて、「キミのところは値段設定がメチャクチャらしいね」って。

——高いってことですか？

廣戸　いや、逆だよ！　僕は勉強のつもりもあったから、安くていいと思ってやってたんだけど、それじゃ困るっていうわけ。決まってるんだ、と。

——価格破壊されちゃ困る、と。

廣戸　そう。だから、「じゃあ辞める！」って言って、そことは関係なくやらせてもらうようになったんだよね。その頃には看板を出して。

——どうして「道場」なんですか？

廣戸　自分の人生をいろいろ顧みて、「僕が世の中に対して成すべきことは何か？」って考えたときに、「『治す』ってことが天命なんだろうな」と。でね、僕、戦国武将の山本勘助の末裔なんですよ。

——なんですか、いきなり（笑）。

廣戸　一昨年ぐらいに出た本にも、末裔として紹介されてるんですよ。だから基本的に「ヤマカン人生」なんです（笑）。こんなもんかな、みたいな。

——末裔なのにテキトーな（笑）。

廣戸　でもそれがあるから、僕がセコンドを引き受けたり、患者さんの身体を診るときに、その相手は「お屋形さま」になるんでしょうね。どのぐらい全力でサポートするかが自分の本懐なんだろう、と。だから自分の血というものを考えて、もう道を迷わないようにしようと。結局、これが自分の道だということなんです。

——なるほど。

廣戸　あとは、あまりに自分のこれまでの半生がヒドい！（笑）。僕、いまの道場のスタッフを尊敬してますから。みんなマジメでね。僕にはできない！　そういうことも含めて、自分を迷わせないためにつけたんです。最初は「名前はないです」って言ってたんですけど、それじゃ名刺が作れないことにも気づいて。

現実的な理由もあった、と（笑）。結局、ほとんどパンクラス時代にはたどり着いてませんが、もうお腹いっぱいです！　ありがとうございました！

【09年3月6日　都内・廣戸道場にて収録】

ひろと・そういち■1961年、東京都出身。スポーツ整体師、スポーツトレーナー、パンクラス公認トレーナー&公認レフェリー。スポーツ整体「廣戸道場」を主宰、施術家としての仕事の他に、プロ・アマ・ジャンルを問わず各一流アスリートたちの総合アドバイザーとして肉体管理を担う。

2000年5月26日。

この日はパンクラスの歴史の中でも、一、二を争う重要な一日である　もう15年半もの月日を積み重ねることになったその歴史を、「それ以前」「それ以後」にはっきり分けるほど重要な。

この日、東京ドームで『コロシアム2000(以下、C2K)』という格闘技イベントが開催された。主催はテレビ東京と東京FM。特別協賛にサミー。そして企画制作が「コロシアム2000実行委員会(テレビ東京　アサツー　ディ・ケイ／スパイク／インデックス)」となっている。

行われた試合は、全7試合。第1試合から順に、「近藤有己vsサウロ・ヒベイロ」「須藤元気vsアンドレ・ペデネイラス」(以上2試合はC2K特別ルール15分1R)「魔裟斗vsメルチョー・メノー」(キックルール3分5R)「鈴木国博vsルシアーノ・バジレ」(極真空手特別ルール本戦3分・延長2分2回)「金原弘光vsマリオ・スペーヒー」「田村潔司vsジェレミー・ホーン」(以上2試合はKOKルール5分2R・延長1R)「船木誠勝vsヒクソン・グレイシー」(C2K特別ルール15分無制限R)となっている。

この大会が立ち上がるには、二つの土台があった。一つはテレビ東京のスポーツ番組『スポーツTODAY』の中に存在した「バトル・ウィークリー」というプロレス・格闘技情報コーナー。そして、それが発展するような形で単独番組となった『格闘コロシアム(以下・格コロ)』だ。

『格コロ』は99年4月～9月の半年間、毎週金曜日の午後10時半から30分番組として放送された。前クールに10時からの1時間番組で放送されていた『NUMBER12　熱血サッカー宣言』という番組が平均視聴率3～4%と不調だったため、その枠を二つに割って新しいことをやろうと企画された

パンクラスの運命を変えた一夜限りの格闘イベント

コロシアム2

何だったのか?

「コロシアム2000」は「船木誠勝vsヒ[illegible]」という大一番をメインに
2000年5月26日に東[illegible]ベントである。
ほかのイベントとは違う個性を持ちな[illegible]わったこともあって
これまではあまり語られるこ[illegible]が、じつはさまざまな顔を持ち
のちの格闘技界にも[illegible]る。
このイベントはいった[illegible]知る関係者が語る

文／高崎計三　試合写真／[illegible]

ものだった。

この番組でディレクターとして指揮を執ったのが、入社6年目の秋間眞良氏だった。94年の入社以来スポーツ局に籍を置いてサッカー、テニスなどを担当してきた秋間氏は、3期上の先輩・関巧氏（現・株式会社ブロンコス代表）が手懸けていた「バトル・ウィークリー」にも志願して参加。その流れがあったために『格コロ』を任されることになるのだが、自身も振り返って「ラッキーでした。まだテレビの世界を熟知していないペーペーが金曜10時台なんていい枠を持たせてもらえることは普通ないですから」と語る。

テレビ東京でも格闘技イベントを開催したい……こんな話が持ち上がったのは、『格コロ』がスタートして間もなくの頃だったという。

「その頃、サミーさんが大きなイベントをやりたいという話がうごめいてはいました。同時にテレビ東京内でも、世間を驚かせるようなことをやりたいということで、格闘技イベントの構想が浮上していたんです。それで、当時営業局の上司が『格闘技なら秋間だ』ということで、私に相談を持ちかけてきまして」（秋間氏・以下同）

ここで少し、当時の格闘技とテレビの状況を押さえておこう。93年からフジテレビで始まったK-1は順調に人気を獲得し、97年からは日本テレビでK-1ジャパンシリーズも開始。フジテレビはPRIDEも99年から中継を開始したが、人気定着にはまだ時間を要した。そのほかの局は格闘技への定期的な参入はまだ行なっていない……おおよそ、そんな時期のことだった。

そういった状況の中で「いま、格闘技イベントをやるとしたらどんなカードがいいか」と問われた秋間氏が提案したのが、「船木誠勝vsヒクソン・グレイシー」だった。

「その数年前からグレイシー柔術が台頭して、高田延彦などのプロレスラーがヒクソン・グレイシーに次々に敗れていた時期でしたから、プロレスこそ最強であることを再び証明するために、誰かにヒクソンを倒してもらいたい。それができるのは船木誠勝だと、熱い夢を語りまして。このカードなら、ドームで10日間やっても満員にできますよ、なんて言い切ってましたね」

パンクラスのスポンサーだったサミーは、船木の活躍する大舞台を用意したいと思っていた。パンクラスの尾崎允実社長も、同じ思いだった。そして、K-1やPRIDEに匹敵するような格闘技イベントを立ち上げたいテレビ東京……期せずして3者の思惑が一致することになり、このカードを中心に据えてプロジェクトがスタートすることになった。

リングス勢の参戦決定は、大きな衝撃だった。前田は「船木vsヒクソンがコケたら、格闘技界全体が沈んでしまう。業界のことを考えて決めた」とコメントした

問題は、ヒクソンの担ぎ出しだった。ヒクソンを試合に出そうとすれば、高額のギャラだけでなくさまざまな条件が必要になる。秋間氏も番組の取材を兼ねてロスの自宅を二度訪ねており、関係者を通じての交渉も根気よく続けられた。

「一番難しかったのはルール問題ですね。それからヒクソンは、自分が出る意味のあるイベントか、闘うにふさわしい相手かということを慎重に吟味しますから、結論が出るまでは半年以上を要しました」

ヒクソンのOKを取りつけ、「船木vsヒクソン」が決定した時点で大会は本格的に動き出した。99年12月には大会開催とこのカードを発表する記者会見が開かれているが、この時点でほかのカードはまったくの白紙だったという。この点は、「高田vsヒクソン」から開催が決まったPRIDEとよく似ている。

前述の対戦カードを見てもらえばわかるが、この大会ではパンクラスの選手を中心とした総合ルール（C2Kルール）の試合のほかに、リングス、新極真空手、キックが混在している。いわば「格闘技見本市」のようなかたちだが、これにも三つのベースがあった。一つは『格コロ』が佐藤ルミナ、魔裟斗、謙吾の3人を「イメージファイター」に起用していたこと、二つめはやはり東京ドームという大箱に集客するため、より多くのファンを取り込むためにいろんなジャンルを並べたいという意向、そして3つめは……。

「夢の舞台にしたいということがありました。私たちの頭の中には、『週刊プロレス』さんが開催した『夢の懸け橋』のイメージがあったんです。団体同士ではいろいろ軋轢があっても、中立のテレビ局が声をかければ実現できるのではないかという目論見もありまして」

確かに当時、パンクラスのイメージが強かったこのイベントにリングスが参加するというニュースは驚きを持って迎えられた。

パンクラス、リングス、新極真……魔裟斗も出場の画期的イベント

本当は団体の垣根を越えたマッチメイク、それから「空手vs総合」のような試合もできれば……という希望もあったが、団体間の関係を考えると、とうてい無理だった

「話はさせていただいたんですが、時間もなかったですし、資金も限られてましたからね。所属選手を持たない立場の我々としては、どのカードも一つ一つが大変でした。社内の人間も格闘技界の事情はわかっていないので、交通整理役になっていた私はかなり苦労しました（笑）」

そこに降って湧いたのが、パンクラス・尾崎社長によるルール変更要求だった。頭突きとヒジ打ちを認めるよう、涙ながらに訴えた会見は話題となったが、秋間氏にとっては大問題以外の何ものでもなかった。

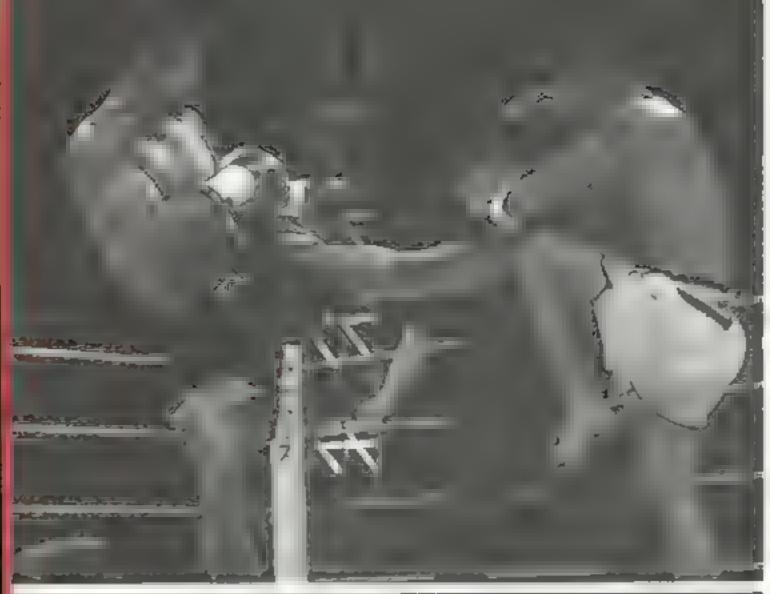
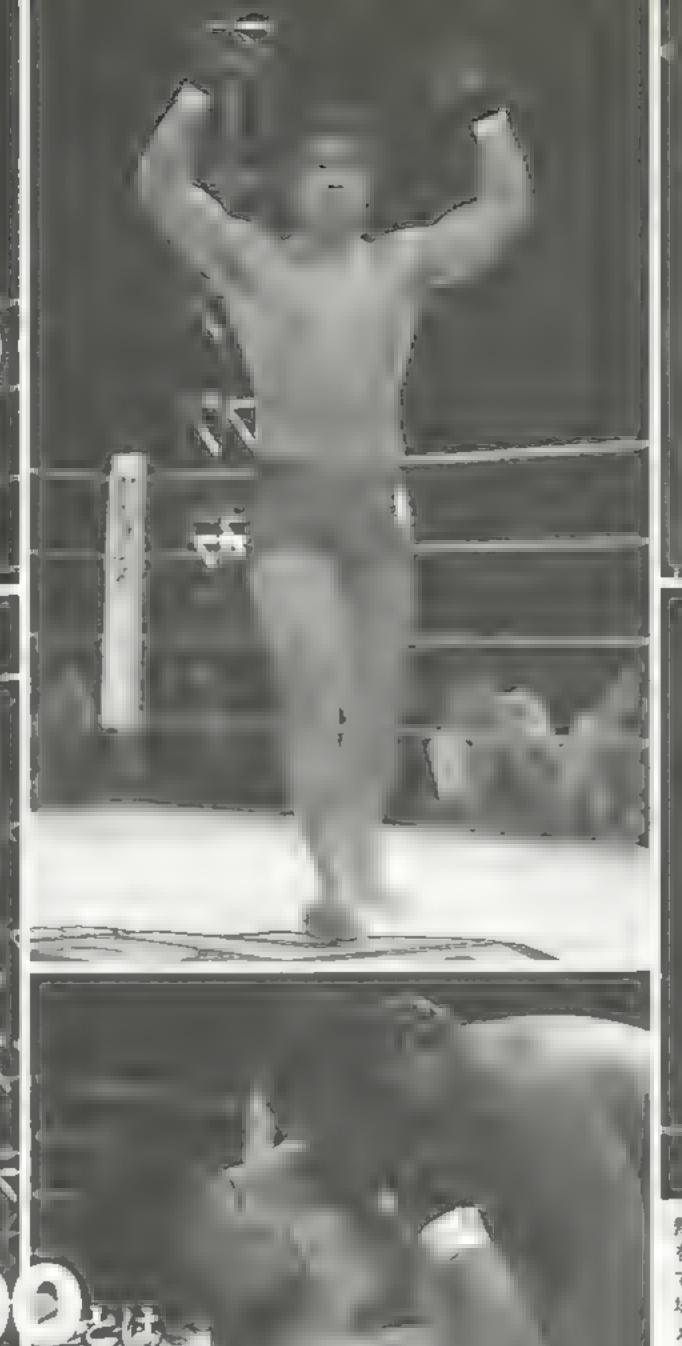
「尾崎社長の親心だろうというのはわかりましたが、正直、あの会見には泣きそうになりました（笑）。確かに挑戦者である船木陣営はヒクソンサイドが提示したルールを飲まざるをえなかったのですから……」

恒例の山ごもりをはじめ、ヒクソンからも何かと細かい要求が出た。だがこれに関しては、「ハリウッド・スターだったら普通ですからね」と秋間氏。なんとか決定カードが動くこともなく、当日を迎えられた。

大会は当日の午後10時から1時間、レギュラー番組を休止しての特番として中継された。「いま考えたら、これがどれだけ大変なことだったかがわかります。全部、スポンサーであるサミーさんの存在のおかげですよ」と振り返る秋間氏は、大会中は番組ディレクターとして、中継車の中にこもりっきりだった。進行も試合内容も非常によく、中継車の中で涙しながら指揮を執っていたという。

そんなイベントの最後の最後に、"事件"は起こった。ヒクソンに敗れた船木が退場する花道の奥で、突然引退を宣言したのだ。

「試合後はリング上を映すのがセオリーな

コロシアム2000とは何だったのか?

熱戦が続いた大会。第1試合では近藤がヒクソンの愛弟子・サウロを衝撃KO! これで近藤幻想はまた一気に膨れあがった。第2試合では須藤元気がルミナに勝利したペデネイラスとドロー。K-1出場前の魔裟斗は「イケメン対決」でメノーにKO勝利。『格コロ』イメージファイターの一人だった魔裟斗の起用はこの時点では冒険だったが、魔裟斗は見事に期待に応えた。新極真はワンマッチと緑健児の代表就任披露演武で「空手とは何か」を見せつけた。リングス・ルールの2試合では、スペーヒーが初来日。粘り強い寝技で金原を圧倒して判定勝利。また田村はホーンと接戦の末、判定で辛勝。大会後、このホーンを巡って前田と尾崎社長がトラブルに…。

ので、船木さんを追ってはいませんでした。ただ、僕自身ちょっと様子がへんだなということに気づいて、スタッフに『要注意だ』という指示を出したんです。僕もいたたまれなくて、船木さんの控室に飛んでいきました」

この「船木引退」が、冒頭で述べたようにパンクラスの歴史の大きな境目になった。最後に衝撃的な場面を生んで大会は幕を閉じたが、主催者の仕事はここで終わらない。二つの結果……「収支」と「視聴率」のジャッジメントが待っている。

これは対照的だった。まず収支の面では客入りが芳しくなかったこともあり、厳しいものとなった。だが番組視聴率は12・6%(瞬間最高は17・5%)を記録。ふだん平均3~5%程度で、局内でも「鬼門」と呼ばれていた時間帯でだ。

「この数字は、当時としては偉業でした。おかげでこの年の社内表彰で、高視聴率賞、平成12年度上半期賞、年間賞の3冠をいただき、『ゴールデンアワーの視聴率向上と局のイメージアップに貢献した』という評価をいただきました。ですが、事業イベントとしては失敗でしたね。これは時代が早すぎた。私はいまも社内で、『いまやったら絶対入る』と言い続けているんです。ただ、いまも社内には格闘技イベントに反感を持っている人はいますね」

大会パンフレットの最後のページでは翌年の第2回大会開催もほのめかされていたが、結局スポンサーの賛同も得られず、また優先交渉権を得ていたヒクソンの対戦相手もおいそれとは見つからないという判断からこの年限りで終わることになった。だが、いまでも社内では評価の声もあり、秋間氏自身が営業畑に移ったいまもプロレス・格闘技に関わる基盤になっている。

来年はちょうど10周年。秋間氏は当時撮り溜めた映像も使って、もう一度あの大会についての番組を放送したいという希望を持っている。そして最後に、こう言った。

「あのタイミングでなかったらやれなかった。やってよかったですよ」

ヒクソン戦終了後、コメントブースであらためて「引退」を表明した船木誠勝。あまりにも若すぎる引退に多くのファン、そして関係者が驚いた。

パンクラス番(!?)マスコミが語る

パンクラスの16年を統括

言いたい放題座談会

プロレスから総合格闘技へ——。
1993年の旗揚げから、総合格闘技確立への実験を続けてきた団体パンクラス。
今年で旗揚げ16年目を迎えたが、そのパンクラスが格闘技界に残したものとはなんだったのか、
また今後のパンクラスはどうするべきなのか。
パンクラスと縁が深い(!?)マスコミが集まって好き勝手に語り合ってみました。

たよね。あとは船木、鈴木、が新日本でもUWFでも藤原組でも自分たちがやりたいようにやらせてくれなかったから、飛び出して次みたいな感じできてて。つまりパンクラスで自分たちの理想郷ができたってところがよかった。

橋本 だから、旗揚げ戦の入場式の感慨はありましたよ。ようやく彼らのやりたいことができるんだっていうね。

――堀江さんはどこへんから冷めて来たんですか？

ガンツ 冷めるも何も、とくに熱烈なファンだったわけじゃないんだけど（笑）。

――いや、船木vsバス・ルッテン戦で「船木辞めるな！」って叫んだイメージがあるんですけど。

ガンツ 俺が燃えたのは旗揚げ戦よりむしろ、旗揚げる大会目に神戸で鈴木vsモーリス・スミスをキックルールでやったとき。あれは神戸まで行っちゃった。

――変態ですね（笑）。

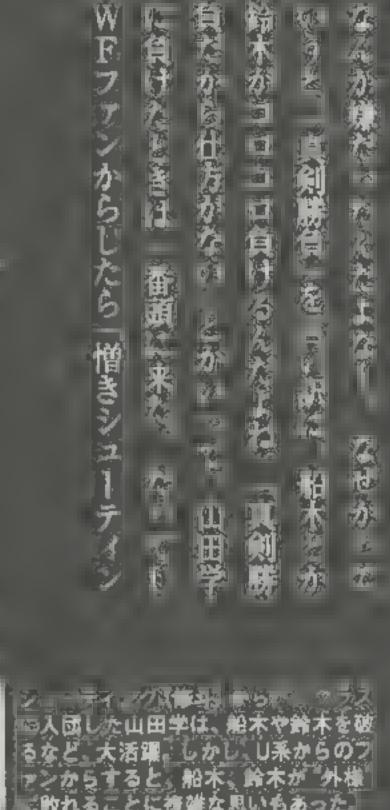
ガンツ 俺はプロレスラーの他流試合が好きなんだよね。だから高橋義生がトーワ杯に出たりとか、全日本キックのリングでやった船木vsモーリス・スミスなんかは大熱狂ですよ。

――じゃあ、運動体とし

てのパンクラスに惹かれたわけじゃないと。

ガンツ うん。パンクラスの試合自体はなんか嫌だったんだよね。なぜかというと、「真剣勝負」を言い訳に、船木とか鈴木がコロコロ負けるんだよね。「真剣勝負だから仕方がない」とかいって、山田学に負けたときは一番頭に来た（笑）。UWFファンからしたら「憎きシューティン

シューティング（修斗）からパンクラスへ入団した山田学は、船木や鈴木を破るなど、大活躍。しかし、U系からのファンからすると、船木、鈴木が"外様"に敗れることに複雑な思いもあった。

初期のパンクラスでは「真剣勝負」が エースが負けることとの免罪符になっていた

グ」から来た選手ですよ！

――憎きシューティング（笑）。

ガンツ 憎きシューティングに負けて、平気な顔してるあなたたちが信じられないっていう感じがあったな。

――橋本さんは？

橋本 俺もUとシューティングだったらUに勝ってほしいっていうのはあったけど、でもそれも含めておもしろいっていうか。アンハッピーエンドの映画みたいなおもしろさだよね。

ガンツ ただアンハッピーエンドのクセに平気な顔してるんだよね。

橋本 それはね、いま振り返ればそう思うね、たしかに。だから、ガチンコってことが一番の価値になっちゃってるつまらなさだよね。ガチンコなんて前提のはずなのに（笑）。

高崎 理想郷を手に入れた、それ自体が素晴らしいことなんだっていう。

橋本 だから、真剣勝負をやることがゴールだと思っちゃったんだよね、旗揚げ時点では。でも、ホントはそれはスタート地点でしかなかった。

高崎 初期はとくに、船木とか鈴木が負けることの免罪符になってた部分があった。だから関係者は、エースの船木や鈴木が負けたっていうと「いや、それがパンクラスですから」って言ってたんだよね。

橋本 最初の頃は「常勝チャンピオンはありえない」ってことを見せるのが刺激的だったけど、それはっかりじゃしょうがないよね。正直な話、初代王座決定トーナメントが両国国技館2DAYSであったけど、その決勝戦がウェイン・シャムロックvs山田学じゃ、興行として締まらなかったし。

――船木、鈴木が負けることで、興味を失っていったファンもけっこういるでしょうね。

橋本 だから、ガチンコだからしょうがないとか、エースも負けるのがガチンコなんだ、みたいなことを待つ期間っていうのは正直長かったよね。

ガンツ パンクラスっていうのは、とにかく初めての試みだから、毎大会ごとに、いろんな問題が出てきたんでしょうね。興行形態はUWF、つまりプロレスのフォーマットだから、全選手が毎大会、毎月出ますよね。その中で中身は総合格闘技だからね。

橋本 あと30分1本勝負だと、実力が拮抗するもの同士だとグラップリングしちゃうのでっていう問題も旗上げ2戦目ぐらいで出てきて。

高崎 だから最初は「秒殺」で騒がれて、「秒殺で凄いらしいぜ」って観に行ったら、30分膠着する試合を見せられちゃうこともある、みたいな（笑）。

――話をちょっと進めると、パンクラスとリングスの抗争っていうのが長く続いたじゃないですか。最初は「船木と鈴木が前田と絶縁」ってことでしたけど、そのとき堀江さんはどう思ったんですか？

ガンツ 俺、すっかり船木、鈴木、ふざけんな（笑）。でも、パンクラスが旗揚げしたときのリングスって、ホントに低迷してたから、しょうがないけどね。前田日明が

PANCRASE

HYBRID WRESTLING

PANCRASE BEST BOUT 50

1993-2009年

kamiproが独断と偏見で選ぶ パンクラス50の名勝負

[illegible]
[illegible]
[illegible]
はたして、あの試合はランクインしているのか?

構成＝高崎計三、橋本宗洋、中村拓己（GBR）、堀江ガンツ　写真提供＝パンクラス

1 船木誠勝 vs 鈴木みのる

94.10.15 両国国技館

船木と鈴木の"理想型"がついに実現！ 二人の人生が2分間に凝縮！

旗揚げ時から熱望されていた「至高のカード」が、ちょうど1年を経過して実現した。会場は、初進出となる両国国技館。2カ月後に同会場2連戦でのトーナメントによる王座新設を見据え、ここまでの二人のすべてを"清算"するような意味合いで実現したカードだった。90年4月にUWFの博多大会で対戦し、前田日明に「オナニー」と称された以来のこの対戦。試合は、超満員に膨れあがった観客の異様な期待感の中、わずか2分足らずで決着した。だがそれに不満を唱えるムードには全くならず、むしろ「これぞパンクラス!」という感じで誰もが納得したあたり、この頃のパンクラスの勢いを象徴していた。団体の切り札的カードだったが、この後は若手や外国人の台頭などもあって、結局これっきりに。それだけに貴重でもある。

2 船木誠勝 vs バス・ルッテン

96.9.7 東京ベイN.K.ホール

明日また生きるぞ! 船木壮絶に散る!!

パンクラス3周年の総決算として組まれた大一番。旗揚げ戦で強烈なインパクトを残したルッテンに、押しも押されもせぬエース・船木が初の王座挑戦……二人は旗揚げ5戦目、94年1月に対戦している(船木が秒殺)が、その頃とはルッテンの勢いがまるで違った。打撃一辺倒から寝技にも対応して鈴木からタイトルも奪取し、まさに怪物に育っていたのだ。そのルッテンと、船木は真っ向から渡り合った。序盤、グラウンドで優勢になった船木だったが、ルッテンは凌ぎきると掌底で猛攻。船木はダウンを重ね、顔面をボコボコに腫らしながらも立ち上がる。客席からは悲鳴のような歓声が渦巻く中、結局船木はヒザ蹴りでKOされた。だが、立ち上がってマイクを持った船木は「明日から、また生きるぞ!」と絶叫。この言葉は船木の代名詞ともなったのだった。

3 近藤有己 vs 菊田早苗

02.11.30 両国国技館

パンクラスvsグラバカ頂上対決 近藤の怪物的強さが爆発!

ドローに終わった、この年5月の一戦目を受けてのism対GRABAKA頂上対決にしてライトヘビー級タイトルマッチ。近藤はスタンドで組みつかれてもテイクダウンを許さずコツコツと打撃を当て、菊田にダメージを与えていく。グラウンドに引き込まれても上をキープし、試合は完全に近藤のペース。そして3R開始直後。突進してきた菊田の右目に、"ブルート"と名づけられた左フックがヒット! 劇的KOで近藤がタイトルを奪取した。フィニッシュはもちろんだが、地味な展開の中で徹底的に相手を追い込む近藤ならではの強さも光った一戦。試合後、近藤は「皆さんが期待する闘いにどんどん出ていきます」とPRIDE参戦を示唆。"待望論"がピークに達したところで『男祭り』出場が決定する。近藤の底知れぬ強さは、いま思えばこのときがピークだったのか……。

4 美濃輪育久 vs 秋山賢治

00.7.29 後楽園ホール

これぞウルトラヘブン!
「美濃輪の超人パワー」が全開

総合志向の強い空手団体・禅道会のエース秋山を美濃輪が迎撃。1Rから矢継ぎ早にサブミッションを仕掛けていく美濃輪だが、秋山は冷静に脱出してパンチを当てていく。徐々に疲労が見えた美濃輪だが、3Rに渾身のフロントチョークで一発逆転! 美濃輪らしさが存分に出た試合であり、いまでもこの一戦を美濃輪のベストバウトに挙げる者は多い。試合後、観客と繰り広げた「oi! oi!」の大合唱は、のちの「SRF8回」の原型。試合中も試合後もやるだけやった美濃輪は、バックステージに戻った瞬間、酸欠でぶっ倒れたのたった。

5 近藤有己 vs 郷野聡寛

00.12.1 横浜文化体育館

[illegible]

6 川村亮 vs 山宮恵一郎

07.10.1 後楽園ホール

外敵となった先輩を破り
川村が新エースに!

パンクラス復帰後、近藤、金原に勝った山宮がタイトルマッチへ。一方の川村は前年12月に山宮に敗れていた。一戦目と同じく、この試合も1Rから打撃戦に。攻め切れなかった前回とは違い、川村は徐々にペースを握るとKO寸前に追い込む場面も。紆余曲折を経ながらパンクラスにこだわった山宮と、リベンジに燃えた川村の気持ちが透けて見えるエモーショナルな一戦だった。戴冠をはたした川村は「現在進行形のパンクラスを見せていきます」と涙の挨拶。パンクラスの苦しい状況を打開すべく、事実上のエース襲名を宣言した。

7 菊田早苗 vs 美濃輪育久

01.9.30 横浜文化体育館

[illegible]

8 近藤有己 vs フランク・シャムロック

96.9.7 東京ベイN.K.ホール

[illegible]
パンクラスに新時代到来

9 船木誠勝 vs 高橋義生

93.12.8 博多スターレーン

身内同士の超ガチンコ対決
パンクラス初期の激闘

旗揚げイヤー最終戦の舞台は、UWF時代から「西の聖地」と呼ばれた博多。そしてメインは、新団体で船木、鈴木越えを虎視眈々と狙う高橋にとって待望の船木戦が組まれた。これ以上ない舞台に、高橋は序盤からガンガン攻め込んでいく。一カ月前のベーゼムス戦でアバラを負傷し、10日前にはにモーリス・スミスとも闘っている船木は超ハード連戦もものともせずに応戦、左右の掌打からヒザ蹴り連打でダウンを奪い、レフェリーストップ勝ち。結局高橋にとっては、これがパンクラス時代唯一の船木戦となった。今後、実現の可能性は……!?

10 バス・ルッテン vs 謙吾

93.9.14 日本武道館

スーパールーキー謙吾登場!
デビュー戦がベストバウトに

11 美濃輪育久 vs パウロ・フィリオ

01.3.31 なみはやドーム

美濃輪が柔術の大物と激突
パイルドライバー炸裂!!

ネオブラッドを制すなど株を急上昇させていた美濃輪がブラジルの強豪と対戦。判定で敗れたものの、どんな体勢からでも関節技を仕掛けていく美濃輪のアクレッシブな闘いぶりが光った。コーナーでタックルを受けた場面では、なんとパイルドライバーで切り返してみせたのだから、さすが美濃輪! 観客の喝采を浴びたのだった。試合後にはリング上で「俺はプロレスラーだ!」と絶叫。この頃から、現在に至る"美濃輪色"が確立していく。

18 北岡悟 vs カーロス・コンディット

05.10.2 横浜文化体育館

のちにROTRで活躍し、WECウェルター級王者となるコンディットを迎え撃った北岡。現在の両者の立場、そして北岡が階級を変えたことなどを考えると、いまでは実現が困難な超豪華なマッチメイクだったと言える。試合は1R決着だったものの、コンディットの顔面カカト落としやパウンドをもらい続けながらも、北岡が執念でタップを奪うという壮絶な試合に。勝利した北岡が顔面を大きく腫らしていたのが印象的だった。

15 鈴木みのる vs 菊田早苗

99.12.18 横浜文化体育館

12 川村亮 vs 金原弘光

07.3.18 後楽園ホール

前年の9月にアカーシオ戦で大逆転劇を見せた川村が再び伝説を残した。川村は試合開始直後から金原と真っ向勝負の激しい打撃戦を展開。互いのパンチが顔面を捉え、バランスを崩すスリリングな攻防の末、川村が渾身の右ストレートで金原をKO! 壮絶な結末に後楽園ホールは熱狂の渦に巻き込まれた。試合後、川村はこの年のシリーズ名であるRISING TOURにかけ「みなさんと一緒にRISINGしていきます!」と宣言。

19 船木誠勝 vs エベンゼール・ブラガ

99.4.18 東京ベイN.K.ホール

16 須藤元気 vs グレイグ・オックスレー

00.10.31 後楽園ホール

最近のファンには意外かもしれないが、須藤元気がデビューしたのはパンクラス。しかもGRABAKA所属だった。試合は序盤から元気がテイクダウン、十字、三角と圧倒。最後はインサイドガードから立ち上がってジャイアントスイングで回し、そこからアキレス腱で一本。通称"竜巻旋風足首固め"で観客の度肝を抜いた。入場はもちろんファンタジックな闘い方も含め、元気のスター性は"メジャー以前"から際立っていたのである。

13 船木誠勝 vs ケン・シャムロック

93.9.21 東京ベイN.K.ホール

20 郷野聡寛 vs KEI山宮

01.10.30 後楽園ホール

パンクラスvsGRABAKA、5vs5マッチの大将戦。郷野は前半はスタンドで、後半はグラウンドで山宮を圧倒。「フルラウンド遊んで判定勝ちってのをやってみたかった」という余裕の勝利を収める。リング上では「パンクラスの元チャンピオンってこんなもんか!?」とマイクで挑発。対抗ムードをさらにヒートアップさせ、その流れが近藤戦へと続くことに。一方で郷野は山宮の実力も認めており、のちに自らGRABAKA入りを誘うこととなる。

17 髙阪剛 vs ロン・ウォーターマン

04.11.7 東京ベイN.K.ホール

14 近藤有己 vs ジョシュ・バーネット

03.8.31 両国国技館

伝統の無差別級タイトルをかけて行なわれた一戦。下馬評ではジョシュの圧倒的有利が予想されていたが、近藤が不動心ぶりを発揮! 体格差のあるジョシュに押し込まれる展開が続くものの、巧みな身体さばきと的確な打撃で2R途中まではジョシュと互角に渡り合う。しかし約30kg近い体重差が徐々に試合に影響し、3Rにはジョシュのジャーマンスープレックスが炸裂。最後はジョシュがチョークスリーパーで一本勝ちを収めた。

21 バス・ルッテン vs フランク・シャムロック
96.5.16 日本武道館

王者ルッテン負傷のために96年1月、鈴木との決定戦に勝って暫定王者となったフランク。そのルッテンとフランクによる統一王座決定戦は、そのまま外国人最強決定戦となった。動きの止まらない試合は『週プロ』で「ド派手パンクラス」と称され、観客は大興奮。試合はルッテンが勝利で、統一王者となった。

22 美濃輪育久 vs 豊永稔
99.8.1 後楽園ホール

[illegible]

23 前田吉朗 vs 山本篤
06.3.19 梅田ステラホール

王座決定トーナメント準決勝で実現した一戦。タックルをうまく使いながら鋭い打撃をまとめる山本に、的確なカウンターを返す前田という展開が続いたが、2Rに前田が左ストレートに、前蹴りからの飛びヒザ蹴りという鮮やかなコンビネーションで山本を完全KO。この時期は前田を中心に軽量級が爆発した時代でもあった。

24 美濃輪育久 vs セーム・シュルト
99.9.18 東京ベイN.K.ホール

[illegible]

25 川村亮 vs ダニエル・アカーシオ
06.9.16 ディファ有明

ネオブラッドトーナメント王者となったばかりの川村がPRIDEでも活躍していたアカーシオに挑んだ試練の一番。試合は1Rからアカーシオが猛攻を仕掛け、一方的に攻め込まれた川村だったが、2Rに渾身の右ストレートで大逆転KO勝利! 会場のファンは大爆発し、"激闘王"川村の歴史が幕を開けた試合だった。

26 鈴木みのる vs 獣神サンダー・ライガー
02.11.30 横浜文化体育館

[illegible]

27 鈴木みのる vs モーリス・スミス（キックルール）
93.11.8 神戸ワールド記念ホール

パンクラス旗揚げ時、鈴木がどうしてもやらなければならないと決めていた相手がスミスだった。99年11月、藤原組のドーム大会でKOされた悔しさを晴らすためにスミスに挑戦状を叩きつけ、ついに対戦にまでこぎ着けた。が、結果はやはり鈴木の惨敗。半年後に3度目の対戦でついにリベンジに成功することになる。

28 前田吉朗 vs DJ.taiki
06.8.27 横浜文化体育館

[illegible]

29 鈴木みのる vs ケン・シャムロック
95.5.13 東京ベイN.K.ホール

旗揚げ以来、船木とともにパンクラスを引っ張ってきた鈴木が、初代王者シャムロックを下して悲願のベルトを獲得した試合。鈴木は大一番でしか着用していなかった白のトランクスとレガースで登場し、見事戴冠に成功した。試合後はリング上で仲間たちに胴上げされ、控室では中村あゆみ、モーリス・スミスらにも祝福された。

30 山宮恵一郎 vs TAKAみちのく
97.4.27 東京ベイN.K.ホール

[illegible]

31 フランク・シャムロック vs アラン・ゴエス
95.5.13 東京ベイN.K.ホール

UFCと同年にスタートしたこともあって、初期パンクラスにとって「ブラジリアン柔術との距離」は大きな課題だった。その柔術家が初めてパンクラスに参戦したのがこの試合。のちにはPRIDEにも参戦するアラン・ゴエスはそれまでの外国人選手とは異質な光を放った。試合はフランクと一歩も引かずドロー。

32 伊藤崇文 vs 柳澤龍志
95.7.23 後楽園ホール

[illegible]

33 船木誠勝 vs キース・ベーゼムス
93.11.8 神戸ワールド記念ホール

初期パンクラスでも、かなり物議を醸した問題の試合。ベーゼムスは試合前から「パンチを使う」と反則予告をしていたが、船木は実際にパンチを出してきたベーゼムスをものともせず関節地獄に引きずり込み、アームロック葬。怒り心頭の船木はベーゼムスのギブアップ後も技を解除せずに"制裁"し、パンクラスを守った。

34 鈴木みのる vs モーリス・スミス
[illegible]

[illegible]

35 昇侍 vs アルトゥール・ウマハノフ
08.1.30 後楽園ホール

パンクラスやケージフォースでは破壊的な強さを見せていた元ロシア軍特殊部隊スペツナズのウマハノフ。対する昇侍は3秒という秒殺KO記録を作るなど、着実に結果を出し続けてこの試合にたどり着いた叩き上げ。昇侍はノーガードで不気味なウマハノフに臆することなく打撃戦を仕掛け、2Rに狙い済ました左ハイキックでKO。

36 川原誠也 vs 井上学

08.12.7 ディファ有明

デビューから無敗の快進撃を続けていた"パンクラスの超新星"川原のために組まれたと言ってもいいタイトルマッチ。しかし井上は川原の猛攻をじっと耐え続け、2R終了間際に起死回生のタックル→バックチョークで奇跡の一本勝ち。師匠でもあるビル・ロビンソンの前で快心の勝利をつかんだ井上は思わず男泣き。

37 三崎和雄 vs ヒカルド・アルメイダ

03.8.31 [illegible]

[illegible]翻弄し、三崎を判定で下[illegible]二人の交流が始まり、三崎がPRIDEウェルター級GP決[illegible]

38 渡辺大介 vs 菊田早苗

01.12.1 横浜文化体育館

パンクラスとGRABAKAの3vs3対抗戦。先鋒で登場した菊田は渡辺大介と対戦するが、ゴング直後の飛びヒザ蹴りであわやKO負けの大ピンチを迎えてしまう。強引に抑え込んで肩固めで一本勝ちしたものの、憎らしいまでに強かった菊田の冷や汗っぷりにパンクラスファンは溜飲を下げたのだった

39 渡辺大介 vs 郷野聡寛

03.10.31 後楽園ホール

[illegible]KO勝利を収めた。さら[illegible]かあってもismにいたら[illegible]恵一郎を引き抜きたい」とリング上から堂々と引き抜きを宣言!これを受けた山宮は後日GRABAKA[illegible]

40 船木誠勝 vs 近藤有己

97.4.27 東京ベイN.K.ホール

新人時代から大活躍を見せていた近藤が、デビュー翌年にタイトルマッチという大抜擢。しかもこの一戦で、船木を破ってチャンピオンになったのだからその才能は凄まじい。だが、チャンピオンになれてもエースにはなれないのがプロの難しさ。近藤はこの後、団体と観客を引っ張れない自分に悩むこととなる。

41 菊田早苗 vs フレイジソン・パイシャオン

04.8.22 梅田ステラホール

ハレット・ヨンタ、アレ[illegible]といった世界的な柔術家を下[illegible]進んでいた[illegible]度の世界選手権王者と[illegible]が相手[illegible]

42 山宮恵一郎 vs グスタボ・シム

04.11.26 後楽園ホール

郷野の引き抜き宣言を受け、GRABAKAの所属として強豪シムと対戦した山宮。しかし結果はシムが打撃・寝技で山宮を圧倒、最後はヒールホールドで山宮を切って落とした。しかしシムの移籍、そしてシムとの一戦を経験した山宮は大きく成長し、次戦のニルソン・デ・カストロ戦ではあと一歩のところまで追い詰めた。

43 ヒカルド・アルメイダ vs ネイサン・マーコー

03.11.30 両国国技館

[illegible]アルメイダ、マーコートともに、UFCを主戦場と[illegible]

44 近藤有己 vs 金原弘光

05.10.2 横浜文化体育館

当初は菊田早苗との3度目の対戦が決定していた近藤だったが、菊田の負傷によりこのカードが消滅。そして組まれたのが金原弘光との日本人対決だった。試合は近藤のパンチに金原がカウンターを取るという展開が続いたが、最終ラウンドにテイクダウン&ポジショニングで勝った近藤が勝利を決定付けた。

45 渡辺大介 vs 入江秀忠

03.1.26 後楽園ホール

[illegible]ダタムで稲垣克臣を下し[illegible]つけた入江[illegible]だが、渡辺大介のパンチであえなく撃沈!

46 美濃輪育久 vs ヒカルド・アルメイダ

03.1.27 03.2.16 グランキューブ大阪

パンクラスで連勝を重ねていたヘンゾ門下の強豪に美濃輪が挑んだ一戦。美濃輪は最後まで粘り抜いたものの、オモプラッタをはじめとするしつこいグラウンド・テクニックに翻弄され持ち味を出せないまま敗北。試合後に「オモプラッタの返し方がわからない」、「スクワットからやり直します」という言葉を残してパンクラスを離脱。

47 山田学 vs ケン・シャムロック

94.12.17 両国国技館

パ[illegible]初の王座決[illegible]の再戦が期待された鈴木、船木をそれぞれ準決勝で退けた山田[illegible]シャムロックが王座決定[illegible]ないカードではあったものの、この年に修斗から入団して快進撃を続けていた山田の決勝進出は新鮮で[illegible]ムロックの戴冠も納得の結果となった

48 近藤有己 vs 百瀬善規

02.7.28 後楽園ホール

幻の大会「プレミアム・チャレンジ」で敗北を喫した百瀬とのリベンジマッチに挑んだ近藤。タックルをガブッた状態、つまり不十分な体勢からコツコツとパンチを当てていくと、なんと百瀬はそのまま力尽きてKO! 常識を超えた強さの質に加えポカをするところなど、百瀬との連戦は近藤らしさ抜群だった。

49 郷野聡寛 vs 桜木裕司

2005.3.6 横浜文化体育館

全日本キックのリングで全日本ヘビー級王座を奪取した郷野はパンクラスのメインで桜木相手にキックルールの試合[illegible]久江とデートする」とブチ上げたり、余裕をかま[illegible]カッコ悪い敗戦となってしまったのだった

50 菊田早苗 vs アイスマン

04.11.7 東京ベイN.K.ホール

近藤に敗れスランプ状態の菊田が再起をかけて闘った相手は、新日本プロレスのガイジン選手アイスマン(猪木道場USA)だった! いろんな意味で、どうしても一本勝ちが必要だった当時の菊田らしい一戦ではある。とはいえ、いざアキレス腱固めで勝利してみると、そのあっけなさに「イマイチでした……」と菊田。当然である。

2002年に勃発した「修斗・パンクラス問題」とは何か？

kamipro Moveで好評(?)連載中の「kamipro事件簿」が誌面に進出！　パンクラスの歴史を飾ったさまざまな事件の中から、02年に勃発した「パンクラス・修斗問題」を取り上げる。マスコミも絡んで複雑化し、両者が一切の交流を断つことになったこの事件はどうやって起こり、どう展開し、その後どうなったのか？　当時、格闘技界を揺るがした大トラブルを総括してみよう！

文／高崎計三

「パンクラスのリングに上がったら、修斗にはもう上がれない」

マット界には長く、このような決めごとがあった。いわゆる「不文律」の類ではない。明文化されたルールである。

「(株)ワールドパンクラスクリエイト主催プロフェッショナル興行(エキシビション試合を含む)への修斗プロフェッショナル選手ライセンス保持者、及び同ライセンス申請予備者の出場を禁止する」

という決定が、02年4月30日に修斗コミッションおよび日本修斗協会の合同会議で確認されている(施行は同年6月1日より)。

事の発端は、この年の5月11日に行なわれた『パンクラス大阪・梅田ステラホール大会』。この大会で、当時修斗ミドル級1位だった三島☆ド根性ノ助が出場すると発表されたことだった。

正確には、本名の三島陸智としてで、本戦への登竜門でアマチュア扱いである『パンクラスゲート』の試合に出場というかたちである。これは当初、この枠で出場が予定されていた花澤大介(現・花澤大介13)が負傷のため欠場となり、責任を感じた三島が代理出場を申し出たというもの。パンクラスは三島の申し出に「プロの試合を用意する」旨を伝えたが、三島は「自分の目標は修斗のチャンピオン」ということで、あくまでアマチュアで出場するということで落ち着いたという。

この事実をネットを通じて知った修斗関係者は、三島に事実確認をするとともに出場のとりやめを要請したが、三島は「パンクラスに迷惑をかけたくない」ということで出場の意志が固く、最終的にその気持ちを汲んで「若林事務局長預かり」とし、結論

“プロレス道場”での青春の日々——

クラシスト同窓会

マン with 柳澤龍志、窪田幸生

船木、鈴木はもちろん現在の北岡、川村にいたるまで、コンスタントに名選手、個性派ファイターを輩出してきたパンクラス。
その道場ではどんなドラマが繰り広げられていたのか……それを探るべく、柳澤龍志、窪田幸生、ミノワマンの3人による同窓会トークも開催!
いわば“超人前夜”、若き日の美濃輪育久の姿がここにある

ることになった、と。
ミノワマン　僕は、窪田さんが受かった入門テストも行くつもりだったんですけど、諸岡さんから「一回見送れ」って話があって。それで雑誌見たら、窪田さんが合格してるんですよ。写真が載ってて。
――「あのときの！」という。
ミノワマン　先を越されたっていうか「俺もここにいなきゃいけないのに」って焦りましたね。
窪田　で、そのあと名古屋で大会があったときに、二人でスパーリングをやらされたんですよ。船木さんに言われて。
柳澤　ああ、あったね。あれは結局、美濃輪を入門させるかどうかのテストだったんだよね。
ミノワマン　あのスパーリングのあとで、諸岡さんから「ネオブラッドでデビューが決まったから」って言われたんですよ。
窪田　僕はそういう事情がわからないんで、スパーリングしながら「ああ、この人は絶対にパンクラスに上がってくるな」って思いましたね。敵っていう認識でしたけど。
ミノワマン　僕はやっぱり焦ってましたね。「どんどん先を行かれてしまう」って。同じ時間だけ練習してても、やっぱり向こうはパンクラスで練習してるんで。技術的にも体力的にも、パンクラスの道場じゃないと身につかないものがあると思うんですよ。
――そのスパーリングがあって、ネオブラッドがあって、97年の夏からミノワさんも新弟子になるわけですけども。柳澤さん、当時のお二人の印象っていかがでした？
柳澤　二人とも優秀でしたよ、凄く。当時のパンクラスって完全にプロレス団体としての道場形態だったんで、新弟子生活はかなり厳しかったと思うんですよ。夜逃げするヤツもいましたし。
窪田　ああ、いましたね。自分たちの下がなかなか定着しないんで、僕らずっと雑用もやらなきゃいけなかったんですよ。

やなぎさわ・りゅうじ■1972年6月22日、青森県出身。藤原組でデビューし、パンクラスで主力選手として活躍。退団後もK-1、新日本プロレスと幅広く参戦。所属する坂口道場では総合コーチも務める。190cm、100kg。

スト同寮

鶴ジム時代の美濃輪さんと名古屋でスパーリングしたんですよ（窪田）

ミノワマン　「夜逃げ」って本当にあるんだ！」って感じでしたね。僕としては早く雑用から解放されて、練習に集中したかったんですけど。それで一回、夜逃げした子を呼び戻したこともありましたし。
――捕まえてきたんですか？
ミノワマン　いや、家に電話して「また頑張ろうよ」って説得して。で、戻ってはきたんですけど、その3日後にまた辞めちゃいましたね。結局、続かない人はどうやっても続かないんだなって。
窪田　好きかどうかでしょうね、結局。僕らは格闘技が好きだったんで、こうしていまでも現役でいるわけですし。
柳澤　そういう状況なんで、窪田と美濃輪は新弟子生活が長かったんですよ。そういう中で本当によくやってたと思いますね。仕事がちゃんとできるし、気がきくし。あと、ものを頼みやすいっていうのも優秀な新弟子の条件なんですけど、その点でも二人はよかったですよ。
――新弟子なのにものを頼みにくい人もいたんですか（笑）。
柳澤　いますよ、やっぱり。こう、頼みにくいオーラっていうんですかね。たとえば近藤（有己）とか（笑）。
――新弟子時代から〝不動心〟（笑）。
柳澤　窪田と美濃輪は、雑用でも練習の相手でも頼みやすい新弟子でしたね。完璧にこなしてくれましたし。
窪田　ただ、ちゃんこはマズいって言われましたね（笑）。
柳澤　窪田は雑用は完璧なんですけど、ち

くぼた・こうせい■1977年8月11日、高知県出身。第7回入門テストに合格後、97年のネオブラッド・トーナメントでデビュー。現在は坂口道場に所属し、コーチを務めながらDEEP、パンクラスなどに参戦。173cm、83kg。

美濃輪は起用な新弟子でしたよ。ちゃんこもおいしかったし（柳澤）

やんこはマズかった（笑）。そもそも、おいしく作ろうとしてないんだよ。それでだいぶ、稲垣（克臣）に怒られてたよな。

窪田　そうですね。稲垣さんは味にうるさい人なんで。

柳澤　味にうるさいし、人使いも荒いんだよね。よくウェートの補助をやらされてたのって……。

窪田　僕です（笑）。

柳澤　それで「首押し」うまくなったもんな（笑）。稲垣は味にうるさくて人使いが荒くて……あとシャワーが長かった（笑）。

――いわゆる"鬼軍曹"的な存在。

ミノワマン　でも、一番いろんなことを教わったのも稲垣さんでしたね。

窪田　僕にとっては鈴木（みのる）さんがお父さんで、稲垣さんがお母さんみたいな感じでしたね。僕が鈴木さんに怒られると、あとで「あれはな……」ってフォローしてくれるっていうか、鈴木さんの意図を説明してくれるっていうか。

柳澤　とくに窪田は怒られやすかったからね。逆に美濃輪は、なんでも器用にやってたよね。ちゃんこもおいしかったし。

――ミノワさんが器用っていうのも、なかなか想像つかないですけど（笑）。ちゃんこも得意だったんですか？

ミノワマン　得意っていうか、マニュアルどおりにやってただけですけどね。慣れてきたら、具材とか味つけとか自分なりに変えたり。一回、ポン酢ちゃんこを作ったんですけど。

――ポン酢につけて食べるんじゃなくて、最初からポン酢味ですか（笑）。

ミノワマン　そしたら山田（学）さんが一口目で「ダメだこりゃ～！」って（笑）。

――それはダメでしょう（笑）。

ミノワマン　だからもう、得意な味つけのしか作らなかったですね。

窪田　前日のちゃんこと同じ味は作っちゃダメなんで、そこも大変でしたね。

柳澤　まあ、ちゃんこ自体が飽きるからね。あれ、毎日食ってたら3カ月で飽きるよ。俺、途中から食わなくなったもん。

窪田　あ、そういえば食べてなかったですね（笑）。

――ちなみに、ミノワさんは何味のちゃんこが得意だったんですか？

ミノワマン　僕はみそちゃんこですね。いまだに、自分で食事を作るときはそればっかりです。

――新弟子時代がその後の生活も決めてしまうという。

窪田　僕は洗濯ですね。2年間くらい鈴木さんの付き人をやってたんですけど、凄く細かいっていうか、こだわりがある人なんですよ。洗濯物を干すときの角度とか、たたみ方とか。それでいまも、僕は洗濯ものをたたむのが凄くきっちりしてますね。

柳澤　そういうことを、若いうちに叩きこまれるのっていい経験だよね。

ミノワマン　そうですね、礼儀とか。

窪田　結局、怒られるのってそこですよね。「スパーリングのあと、先輩より先にリングから降りちゃいけない」とか。

ミノワマン　あと、後輩のことで怒られることも多かったですよね。「誰が教えたんだ！」って。

ああ、教えた先輩が悪い、と。

窪田　それで下向いて怒られながら、お互いのことチラチラ見てましたよね（笑）。

――「そっちじゃないの？」っていう（笑）。そういう雑用もこなしながら、練習自体も当然、厳しいわけで。

ミノワマン　イメージとしては、溺れかけた自分をもう一回沈めて、ギリギリで戻すっていう感じですね。で、また沈められて、自力で浮かび上がったらまた沈めてっていう繰り返しで。気力を引き出す練習で

窪田さんが入門テストに受かったときは「先を越されたって焦りましたね」（ミノワ）

みのわまん■1976年1月12日、岐阜県出身。誠ジムからプロデビュー後、パンクラス入団。2003年にフリーとなりPRIDE、「HERO'S」、DREAMで活躍。2006年大晦日の田村潔司戦より本名の美濃輪育久から改名。175cm、91.5kg。

パンクラスの宴会で凄かったのは「横綱」と全裸でスパーですね（ミノワ）

したね。
窪田　また、昔の横浜道場って、冬は氷点下、夏は40度を超えるようなところだったんですよ。
――そこにいるだけでしんどいですよね。
窪田　スパーリングしてると、下になってるだけで背中が熱くて。そこを極められまくって、「立てよ！」（鈴木のモノマネで）って言われて……。
ミノワマン　あぁ～。
窪田　ネオブラッドの前になると、僕らが一日交替で集中的にスパーリングやらされるんですよ。あれがもう、泣きましたね。「ヒィー！」って言ってましたから。
ミノワマン　あれは吐きましたよね……。
柳澤　いま思えばね、あれで精神力を鍛えられるんだけど。
――同じ苦しみを味わっているだけに、二人で休みの日に飲みに行ったりはしなかったんですか？
ミノワマン　いや、休みは日曜日なんですけど、午後からはアマチュアの練習の手伝いがあるんですよ。だから自由になるのは土曜の夜と日曜の昼すぎまでなんで、遊びに行ってる余裕はなかったですね。コンビニに行くのが一番の楽しみで。
窪田　新弟子時代は飲みに行かなかったですねえ。行くようになったのはもっとあとですね。謙吾……謙吾さんとかと。
柳澤　「謙吾さん」（笑）。
ミノワマン　（下を向いて肩を震わせる）
――え？　どうしたんですか？
柳澤　いや、謙吾は後輩なんですけど……。
窪田　歳は向こうのほうが上なんで、フリーになってから「これからはさんづけで」って言われて（笑）。
――普通は入門時の上下関係が続くもんですけどね（笑）。
ミノワマン　「フリーになったんだから関係ない」って（笑）。
――微妙な上下関係ですね（笑）。そういえば窪田さんとミノワさんも、お互い「さんづけ」ですよね。
ミノワマン　はい。僕は先輩として。
窪田　僕は美濃輪さんが年上なのと、誠ジム時代から知ってるんで。
ミノワマン　リング屋さんとして興行に行ってたんで、顔見知りではあったんですよ。それで。
――そこの距離感もおもしろいですけどね。お酒の話に戻すと、どんな感じだったんですか？　パンクラスってストイックなイメージもありますけど。
柳澤　いや、そこもやっぱりプロレス団体ですよね、完全に。とくに選手が全員揃う忘年会は凄かったです。
ミノワマン　あの……「横綱」っていうのがあるんですよ。
窪田　横綱！（笑）。
柳澤　あったねぇ～。
ミノワマン　宴会って、料理が大皿で出てくるじゃないですか。その中身を全部どかして、そこにお酒を注ぐんですよね。で、一気で。
――優勝力士の祝勝会みたいに（笑）。
窪田　「ヨッコヅナ！　ヨッコヅナ！」ってコールしながら（笑）。
柳澤　また、美濃輪って本当は飲めないですからね。
ミノワマン　あれはキッかったですねぇ……。
窪田　僕は11月に入門したんで、道場に慣れる間もなく最初の忘年会を迎えちゃって。
――それは衝撃的ですよね（笑）。
窪田　しかも、両隣が船木さんと高橋（義生＝現・和生）さんで。いきなり爪楊枝を3本くらいオデコに刺されて。で、伊藤（崇文）さんと梅木（良則）さんに「頑張れよ！」って殴られて、ビールの栓で額をガッと切られて。最後は刺した爪楊枝に火をつけられましたね。
――凄まじい洗礼ですねぇ。
ミノワマン　あと、スパーリングもあったんですよ。広尾で飲んで、そのまま東京道場に戻って。
窪田　裸でやるんですよ。
――裸といっても、格闘技的な「道衣なし」って意味じゃないですよね（笑）。
柳澤　全裸ですね。全裸で三角絞めとか。あれはキツイでしょうねぇ。僕はやらずに済みましたけど（笑）。
ミノワマン　横浜道場でやる宴会も凄かったですね。道場の中でやるんで。
――騒ぎ放題、暴れ放題ですか。
ミノワマン　もう服脱いで、酒浴びてドロドロになってましたね。それでプロレス始めるんで、よけいに酒がまわって。で、トイレに逃げ込むんですけど、逃げる場所がそこしかないんで、「美濃輪どこ行った～っ！」って鈴木さんの声が聞こえてきて。
――連れ戻される、と（笑）。あらゆる経験を一緒にしてるからこそ、結束力も強くなりますよね。
窪田　それはありますね。とくに美濃輪さんは、入門テストから一緒でしたし。
ミノワマン　いまでも、こうして一緒に集まって練習してますからね。気心が知れてる部分は大きいですね。
柳澤　いま、総合格闘技のジムは間口が広くなってプロにもなりやすいですよね。それはいいことなんですけど、ああいうプロしかいない環境っていうのもよかったかなって。僕は絶対、そういう場所じゃないとプロになれなかったと思うし。いまでも、たまには昔みたいな厳しい環境で練習するのも悪くないなって思うんですよね。……たまにでいいですけど（笑）。

【09年3月10日／坂口道場にて収録】

パンクラシスト同窓会

パンクラス旗揚げ時のプロレス誌報道の真実

ターザン山本

元・週刊プロレス編集長　現・葛飾区在住

旗揚げ当初から、当時多大なる影響力を誇っていた『週刊プロレス』に大きく掲載されていたパンクラス。小さな団体を軌道に乗せるには大きな役割をはたしたと思われるが、そんな『週プロ』とパンクラスの蜜月時代が築かれたのは、どんな理由があったのか。"プロレス下流地帯"の住人、山本隆さんことターザン山本が語ってくれた。

聞き手／堀江ガンツ

尾崎さんが社長を引き受ける条件は「ターザン山本と仲直りすること」だった！

——今日はプロレス下流地帯の住人である山本さんが〃上流〃にいた頃の話をしてもらいたいんですよ（笑）。

ターザン　下流地帯って嫌な言葉だねえ。普通、川っていうのは上流より下流のほうが豊かなんだから、その言い方はおかしいんだよ！

——（無視して）で、上流の頃といえば『週刊プロレス』の編集長時代ですけど、『週プロ』ってパンクラスを旗揚げから凄く押してたじゃないですか。あれは何が一番の理由だったんですか？

ターザン　そんなもん癒着ですよぉ！

——癒着！（笑）。

ターザン　でもそれは、いい意味での癒着だけどね。癒着は最大のパワーを生むから。言い換えると、共犯関係を結んだんですよぉ！

——では、その共犯関係を結んだきっかけはなんだったんですか？

ターザン　最初のきっかけはパンクラスの前の藤原組ですよ。僕は藤原組長と仲がよかったから。藤原さんを最初に売り出したのは僕だから。まだUWFに行く前の新日本プロレス時代から、藤原さんのボロアパート（失礼）に行ったりとか、そういう付き合いがあるわけ。

——自宅に招かれるほどの仲でしたか。

ターザン　でも、藤原さんが新しいマンションに引っ越したときに、取材のついでに泊まったら、「二度と来てくれるな」って奥さんに言われたけどね。

——なんでですか？

ターザン　僕が泊まったら布団が凄く汚れたんですよぉ！

——汚いですねえ（笑）。当時は山本さん、風呂に入らなくて有名だったんですよね。

ターザン　まあ、そんな話はいいんだけどね。そんな関係があったから、僕は『週プロ』で藤原組を応援してたんですよ。ただ、途中で若手の船木や鈴木が組長の藤原さんと考えの違いができて、団体を離脱したでしょ？　それで、船木と鈴木が尾崎社長に頼んで、尾崎社長の男気でパンクラスができたんだけど、僕は船木や鈴木に嫌われていたんですよ。

——藤原組の忘年会で鈴木みのるに胸ぐらつかまれたんですよね（笑）。

ターザン　僕は藤原さんと仲が良かったから、どうしても彼らからするとアンチになってしまうんですよ。でも、尾崎社長は『週プロ』を外して団体は成り立たないと考えたんだよね。当時の『週プロ』の媒体力は凄かったから。それで船木と鈴木に対して「団体をやるなら『週プロ』とうまくやっていくしかない。ターザン山本と仲直りしろ　和解しなければこの話は受けないよ」みたいなことを言ったみたいなんですよ。

——パンクラスの社長を引き受ける条件が「ターザン山本と仲直りすること」ですか（笑）。

ターザン　尾崎社長はやっぱりビジネスマンだからさ、僕に対する感情は抜きにして、『週プロ』に載らないのは話にならないと考えたんだよ。それで僕が尾崎社長と船木、鈴木がいる焼肉屋に呼ばれて「よろしくお願いしますね」という手打ち式をやったから「じゃあ、応援しましょう」となったんですよ。

常に刑事コロンボばりの笑顔を絶やさずマスコミとうまく付き合っていたパンクラス尾崎社長。マスコミの中でパンクラスシンパが多かったのは、尾崎社長の手腕と無関係ではないだろう。

——焼肉が功を奏したわけですか（笑）。

ターザン　手打ちをしたからには、僕としては腕の見せどころだから。これはもうもう無条件でパンクラスを圧倒的に持ち上げていくことを決めたわけよ。

——パンクラスを持ち上げて、自分の力を見せつけてやろう、と。

ターザン　あと、これは『週プロ』を新しくイメージづけするには絶好のチャンスだと思ってね。当時のパンクラス、船木や鈴木には青年の志というか、旧プロレスと決別して、新時代のプロレスを目指すという意欲がバンバン出てたんだよね。それって、一番ファン受けするじゃない。

——じゃあ、山本さんにとってもこれは新しい飯の種だ、ぐらいの。

ターザン　もう最高のネタが飛び込んできた、みたいな。

——こいつらに幻想を与えてやって、デコレーションしてやろうっていう。

ターザン　つまりUWFを持ち上げたときと一緒だよね。で、前田日明のリングス、高田&宮戸のUインターと比べて、一番イノセントに見えたわけよ。それで「よっしゃ、これでいこう！」ってなったわけ。

——山本さんが経営的観点から「よっしゃ」とパンクラスを押すのはわかるんですけど、『週プロ』内部の、たとえば宍倉ジチョーとかヤスカクさん（安田拡了氏）とかも異常なのめり込みでパンクラスをプッシュしてたのは、なんだったんですか？

ターザン　やっぱり彼らの仲には旧体制

のプロレスに対する失望感があったわけよ。で、パンクラスはまだ色に染まってなかったから、記者としての自分たちの理想をパンクラスに託した部分があるわけですよ。そこに生きがいを感じたというか。

—パンクラスを作ることに、自分たちも参加できる、みたいな。

ターザン そうそう。それにパンクラスの人たちも素直だし、ジチョーやヤスカクを頼るというか、好意的に接するわけですよ。それに対して、リングスなんかだと、記者連中がアドバイスや意見を言うどころじゃないわけ。前田の無言の圧力は理屈抜きに怖いから。ジチョーも安西もビビッて怖がってたからね。

—そうなんですか。

ターザン で、Uインターも宮戸にはなんというかさあ、マスコミへの対抗心があったじゃない。「よけいなこと書くな」みたいな。でも、パンクラスだけは違ったから、そこへなだれ込むように良心的タイプの記者たちがワーッと行ったわけよ。

—パンクラスという怖くないところに逃げたんですか(笑)。

ターザン そうそう。ここは対等でコミュニケーションが取れるな、みたいな感じで、パンクラスが気の弱いマスコミの駆け込み寺みたいになったわけですよ!

—じゃあ、パンクラスはプロレスマスコミに優しくしたから、みんなが持ち上げていた、と。

ターザン そうそうそう。怖くないな、みたいな。

前田や宮戸のような無言の圧力のない パンクラスはマスコミの駆け込み寺ですよ!

—そんな理由ですか(笑)。じゃあ、尾崎さんはそういうマスコミ操作がうまかったってことでしょうね。

ターザン 尾崎さんは団体の社長になった以上、やっぱり利用するところは利用する、活用するところは活用する。経営者として当然のことだけどね。

—まんまと『週プロ』を自分たちの広報部員にしちゃったって感じなんですね。策士ですねえ。

ターザン うん。それをやらないほうがおかしいんだよ、みんな。パンクラスより先にそれをやったのが、第二次UWFの神社長だから。

共犯

—そうなんですか。

ターザン 神社長の場合は、旗揚げ前に僕に年間スケジュールをすべて見せて、手の内をさらしてくれたわけですよ。特ダネを全部ね。でも、それを見せられると、逆に書けなくなるよね。団体のために最高のタイミングで出してやろうって思う。それで第二次UWFも全面的に押すことにして「後楽園ホールの旗揚げ戦のチケットが15分で売り切れ」という表紙を作ったわけ。

—それは売れるってわかってたからですか?

ターザン うん。たかが1600枚、その気になれば手売りでほとんど売れるんだから、売れ残るわけないよ。完売するのはあたりまえなんだけど、それを15分で売り切れたことにして僕が伝説にしたんですよ。UWFのためにそういうことを考えたっていうことは、神社長も『週プロ』を利用したってことだよね。

—なるほど。同じことを尾崎社長は『週プロ』に対してやっていたってことですね。

ターザン うん。それで僕が「パンクラスを応援しよう」って言ったらジチョーも安西も心の中では拍手ですよ。それで尾崎社長とジチョーが親しくなって、船木、鈴木も乗っかって。彼らは前田に対する憎しみがあったからさ、「じゃあパンクラスにいこう。船木、鈴木だ!」って一気に心がそっちに振れたわけですよ。

—リングスとUインターは怖くて憎いからパンクラスだったんですね(笑)。

ターザン リングスとUインターは面倒くさいよ、いじれないよ。マスコミが自分たちで勝手にデザインしちゃいけない。でもパンクラスは協調関係になれる、ここですよ。一時期、記者が女子プロをプッシュしてたのも、女子プロは担当記者たちでアイデア出して、アドバイスができたからですよ。

—記事を書くだけじゃなくて、ある種、団体のプランナーやアドバイザー的なことをするのも当時の『週プロ』記者たちには快感だったわけですか。

ターザン そうですよ。

—自分たちで考えて、自分たちの言ったことをやってくれて、それを書いて。

ターザン だから大仁田が(『週プロ』でFMWを担当していた)小島(和宏)とか鈴木(健)をうまく使ったのも一緒だよね。大仁田も確信犯でしょ。記者たちは何かと相談されることによって感情移入して、それでよく書くわけですよ。そして取り込むほう、取り込まれるほうという蜜月関

一方、刺激的な発言で誌面作りには格好の材料を作ってくれるが、マスコミと常に緊張関係を保っていたため距離があったリングス前田日明代表。その姿勢はいまも変わらない。

『週プロ』記者がパンクラスを押したのは“反・前田”が先にあったんですよ！

係ができるわけ。全女のときもロッシー(小川)がいて、ジチョーと親しい。マッチメイクはロッシーがやってたんだけど、そこにジチョーがアドバイスする。ロッシーはそれを聞く、そしたら誌面に大きく載る。もう癒着もいいとこだよ！

　完全に癒着雑誌ですね（笑）。

ターザン　それでお互いが盛り上がるんだから、いいかたちの癒着だけどね。

――じゃあパンクラスに話を戻すと、旗揚げしてからしばらくして「船木と鈴木が前田に絶縁状」っていう表紙があったじゃないですか。

ターザン　あの表紙はジチョーですよ。ジチョーが前田とダメなんで、ジチョーの気持ちをパンクラスに代弁させたわけ。ジチョーや安西は自分で前田に絶縁状出せないでしょ？　あれは彼らの気持ちなんですよ！

――じゃあ、ホントは「船木と鈴木が」じゃなくて「宍倉と安西が前田に絶縁状」なんですか（笑）。

ターザン　そうですよお！

――スケールの小さい話ですね（笑）。

ターザン　違うよ。凄い人間的な話だよ、これは！

　「もう怖いのヤだ！」っていう。

ターザン　そうそうそう、「もう二度と嫌だ」みたいなね。

――そんなに被害を受けてるんですか？

ターザン　受けてますよ！　怖がるわけですよ。あんな気の優しい人たちが怖がってしまうんだよ。だから、パンクラスを押したっていうのは、先に「反前田」があるわけですよ。だから、あんなに情熱的になれるんですよ！

　意外な真実ですね。

ターザン　いや、あたりまえの真実だよ、

かつて同じ釜のメシを食ったUWFの象徴である前田日明に絶縁状という刺激的な表紙。これには船木、鈴木だけでなく『週プロ』記者たちの思いも込められていたのだという。

僕からしたら。全部見えてたもん。

――パンクラスを応援したいんじゃなくて、前田を応援したくない（笑）。

ターザン　前田が嫌で、前田が嫌いだから、前田に一矢報いたい。そのためにパンクラスを押そうということですよ！　打倒・前田の手段なんですよぉぉぉ！

――逆に言うと、前田日明の存在ってやっぱり巨大なものがあるんですね。

ターザン　前田の放つプレッシャーは凄いわけですよ。有無を言わさずにプロレスマスコミに対して睨みを利かせてたわけ。あれは力道山以来の睨みの利かせ方ですよお！

――あとは長州力ぐらいですか？

ターザン　いや、長州は気い弱いじゃない、あんなもん！　見栄張ってるだけで、あんなもん化けの皮を剥いだらもう……どんなに気い弱いか。

――そうなんですか？　でも、何かようやくいろんなことがクリアになってきましたよ。当時の『週プロ』でリングスの記事が小さいわけですね。

ターザン　うん、反前田だから。それでジチョーが台割作ってるんだから。

ベストセラーとなった「船木誠勝のハイブリッド肉体改造法」（ベースボール・マガジン社刊）。パンクラスと「週刊プロレス」は、相互作用で盛り上げていったのだ

――そんなんで前田日明はよく「夢の懸橋」（ベースボール・マガジン社が主催した主要プロレス13団体が参加した東京ドーム大会）に出てきましたね。

ターザン　あれは当時のリングス社長だった黒田さんがいたからですよ。あの人は美空ひばりのプロモーションをやってた人で、常識人なわけよ。それで会社の利益を考えて『週プロ』とやったほうがいい、と。それともう一つ、当時クリス・ドールマンが前田に対してしきりに「俺の引退試合を東京ドームでやってくれ」ってけしかけてたのよ。

――そうなんですか！

ターザン　そうですよ！　でも、当時のリングスは単独で東京ドーム興行をやる力はないし、それで前田は困ってたわけですよ。

　ガイジンのボスであるドールマンの願いは叶えたいけど、現実問題としてそれは無理だ、と。

ターザン　ところが、そのとき『週プロ』がドームでやる、と。「じゃあ、ここでドールマンの引退試合をやってしまえ」ってなったわけ。だから真っ先に名乗りを上げたんですよ。

――『週プロ』の金でドールマンの願いが叶うならやっちまおう、と。そんな理由でしたか（笑）。

ターザン　もしドールマンがそんなこと言ってなかったら、前田は出てないよ。あの人は絶対に妥協しないもん。

――いやあ、意外な事実ですねえ。また話が脱線しちゃいましたけど、その後もパンクラスとは蜜月が続いたんですか？

ターザン　続いたねえ。そのあと、ベースボール・マガジン社でパンクラスのビデオを作ったんですよ。『極論パンクラス』っていうね。

――ありましたね。

ターザン　それがまた売れたわけ。そうすると『週プロ』で毎週パンクラスを取り上げると、そのビデオの宣伝になるし、ビデオが売れれば儲るしで、蜜月はまだまだ続きましたよ。

――パンクラスをプッシュしてたのは、自社で出したビデオの宣伝でもあったんですか（笑）。

ターザン　そうですよ！　『週プロ』を毎週宣伝媒体で使えるんだから、ビデオも売

共犯　週刊プロレス

パンクラス初期は、若い選手たちが理想を求めた闘いであり、ある種、観客を突き放した試合でもあったが、それでもファンは熱心にその闘いを凝視した

『週プロ』とパンクラスはよく言えば「共犯関係」、悪く言えば「癒着」ですよ！

れるよねえ。それで決定的だったのは、ヤスカクが作った船木の肉体改造本(『ハイブリッド肉体改造法』)ですよ。あれ10万部売れたもんね。

――そんなに売れたんですか！

ターザン　だからヤスカクは印税だけで500万円ぐらい入ってるよ。

――500万！　凄いですねえ！

ターザン　だから彼はパンクラスで宝くじを当てたようなもんだよ。そして共著ってことで、船木にも同じだけ入ってるからね

――そりゃ蜜月になりますね

ターザン　なるでしょ？　だから、よく言うと共犯関係、悪く言うと癒着ですよ。

――ちなみに山本さん自身は、パンクラスをおもしろいと思ってたんですか？

ターザン　試合は正直言っておもしろくないよ(アッサリ)。

――またアッサリ言いますね(笑)。

ターザン　だって、パンクラスはお客さんがシーンとしてたでしょ？　あれはお客さんもホントはおもしろくないけど、「おもしろくない」とは言っちゃいけないというムードを作ってたんだよね。だからパンクラスは活字で理論付けして、パンクラスというイメージを理論武装することで成り立ってたんだよね。

　なるほど。地上波のテレビ放送もなかったから、ある意味、最後の「活字プロレス団体」だったわけですね。

ターザン　みんなイメージと理論で自分自身をマインドコントロールして、パンクラス党員みたいになっていたんですよ。だってホントにおもしろかったら、真剣勝負でもK－1やPRIDEみたいに会場が盛り上がるはずなんだから。

――だから、理論が必要ないテレビで格闘技を観る時代になって、パンクラスの勢いが落ちていったっていうのはわかりますね。逆にテレビとライブの迫力に力を入れていたK－1やPRIDEが巨大化していくのは、理屈じゃないっていう。

ターザン　K－1とPRIDEはスケールが違うじゃない。お金のかけかた、設備投資、興行のダイナミズムがまったく違う。パンクラスは非常にこじんまりしたスモールワールド。小さな小さな世界の美しさですよ。そしてそのパンクラスを同人誌的に扱ってたのがジチョーやヤスカクですよ！　パンクラスやファンと一緒に「同人誌っていいなあ」ってやってたのが、当時の『週プロ』だったんですよおおお！

【09年2月27日　都内葛飾区立石・『安達太良屋』にて収録】

たーざん・やまもと■本名・山本隆。1946年4月26日、山口県岩国市出身。元「週刊プロレス」編集長。その後、いろいろなことがあったが、詳しくはウィキペディア等を参照することをおすすめします。

パンクラスは、船木誠勝の"文芸作品"だった!!

前田信者から見たパンクラスとは?

菊地成孔

本誌・論客として、また熱烈な前田信者としてもおなじみの
菊地成孔氏がパンクラス特集に登場!
船木誠勝を軸にした独自のパンクラス論を展開する!!

聞き手 ジャン斉藤 コロシアム2000大会撮影 乾晋也 写真協力 パンクラス

——菊地さん、今日はパンクラスの話をうかがいたいんですが。

菊地　えっ？　何かあったんですか？

——じつは、『kamipro Special』でパンクラス特集をやるんです。

菊地　失礼を承知のうえで、こういうご時世だからというエクスキューズ一つで聞いてしまいますが、それは売れるのでしょうか？

——売れるかどうかはべつにして（笑）。パンクラスの15年の歴史を通していまの総合格闘技を考える企画ですね。いまのパンクラスは見てなくても、やっぱり関心を持った人は多いと思いますから

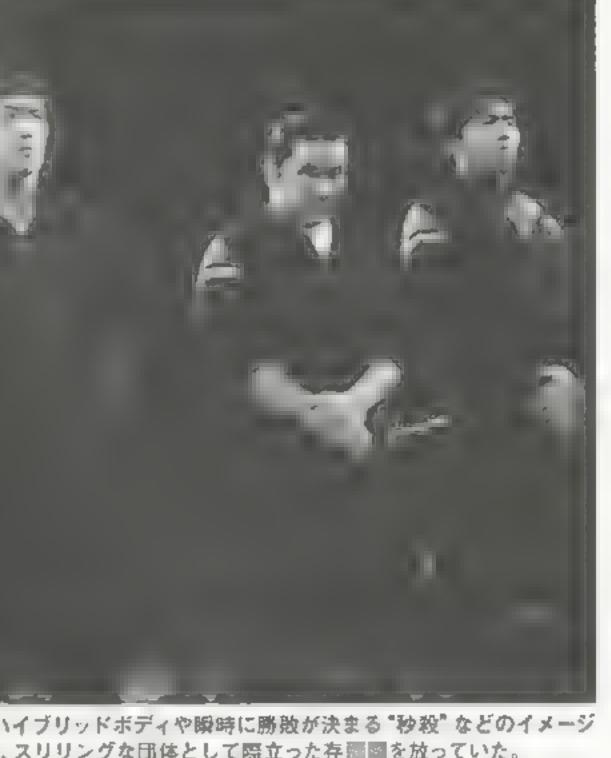
菊地　ああ、そういうことね。「ユニコーンの16年ぶりのアルバムが1位」とかいう話ですね。つまり、昔お世話になった人がいっぱいいる、と（笑）。

——ユニコーンとは一緒できないですけども（笑）。菊地さんといえば、前田信者から見たパンクラスという点からもうかがいたいな、と。

菊地　ただ、パンクラスと前田が揉めたときも「パンクラスが悪者でインチキ」という発想にはなりませんでした。まあぶっちゃけ、「ひょっとして、前田のほうがちょっと悪いんじゃないか？（笑）」、そして「よしんばもの凄～く悪かったとしても、俺は前田を支持するんだ。あたりまえだろ」というのが前田信者の基本姿勢ですからね。

——意外と大人の対応でしたか。

菊地　まあオトナというコドモというかコトナ（前田日明が一時期多用していた批判用語。オトナ＋コドモ÷2＝「ずるがしこいガキ」的な意味）というか（笑）。それにワタクシはパンクラスより船木（誠勝）個人に興味があったんで。船木が離れざるをえなくなった以降のパンクラスは、自分と関係のない世界というか「東京近郊のどこかに誠実に営んでいる団体があるのだろうな。それがいまはパンクラスという名前なのだろう、きっと」といった程度の認識ですから、語る権利などありません。

——そこをなんとかお願いします。

写真は旗揚げ2戦目のパンクラス入場式。初期はハイブリッドボディや瞬時に勝敗が決まる"秒殺"などのイメージ戦略に、リーダー船木の持つヒリヒリ感が加わった、スリリングな団体として際立った存在感を放っていた。

菊地　まぁ、旗揚げ時に受けた衝撃は、中年の読者諸氏皆と一緒ですよ。旗揚げ戦でバーッと幕が開いたら、全員が揃いのハイブリッドボディで、という。格闘技に限らず、あれを見せたのは世界のスポーツ史上パンクラスだけだと思いますよ。最初からある団体にその団体特有の体型があるのはあたりまえだけど、「全員の改造」を見せたんだから、ある意味洗脳を可視化したとも言えます。初期パンクラスについては、いろんなことを『サイコロジカル・ボディブルース解凍』（白夜書房）にも書いたんですけど、船木の引退以前に書いたものなので……たとえば、「船木が仕切ってるあいだにパンクラスは白虎隊みたいになるのではないか？」と書いたと思います。

——ええ。書かれてましたね。

船木「最終的に山の峠で全員で集団自決する」っていうようなイメージですね。船木の自我には死の美学とか、切腹フェチみたいな、「殺される、もしくは死ぬ」という極論への強い撞着があって、それが団体そのものを支配していた。

——極左的で危険なイメージで。

菊地　しかも革マル派みたいに「粛清、粛清で殺し合い」じゃなくて、白虎隊や沖縄玉砕戦のように、「全員で合意のもとに集団自決」に向かっていった団体だと思うんです。バス・ルッテン戦のあとにトランスした船木が初めて、いまや船木語録の基本である、明日死ぬだの生きるだのと言い出した。「え？　そういうふうな感じなの？」みたいな違和感を持って、さらに船木にハマったという経緯の人も多かったんじゃないですか。その船木の排除によって、死のエロスみたいな部分がなくなり、健康的になった代わりにプロダクションとしては小さくなった、と。

——ヒリヒリ感はなくなったけど、安定したわけですね。

菊地　まあ、よくある構造というか。とはいえ、そういう意味で初期パンクラスは船木誠勝による文芸作品だったと思うんです。パンクラスについて書いたものは99年ぐらいが多かったんですが、「船木が東北弁だということを誰もからかわないし、モノマネもしない。タブーになっている」とも書いたんです。船木は現役当時から俳優楽勝のイケメンだったけども、たまにテレビでしゃべったりすると、びっくりするぐらい東北訛りなんですね。東北訛りは全然いいけれども、その違和感ですね。船木って違和感の塊みたいなアイデンティティなんだけど、それを保存するか、ツッコんであげてヘルシーに持っていくか。結果として誰も触れなかった。猪木の「触ってねえですから」みたいな横浜ブラジル弁的な感じで、みんなでマネしたりしておもしろがれば、パンクラスは相当ヘルシーになり集団自決はまぬれるだろう、魅力は減るだろうが、といったことを書いたんです。「やれるのは山田（学）親分しかいない」とも書きましたね、たしか（笑）。

——ツッコミどころにツッコんだら、もっと健康的になる、と。

菊地　「とても美しくカリスマがあるが、宗教的な団体の真ん中にいて、その人が訛っていて誰もツッコまない。モノマネもしない」っていうような話は、ある種典型的だし。加えて尾崎（允実）社長は、「とてもいい人」なルックスですし（笑）。

——宗教的な要素が揃っていた、と（笑）。当時はリングスとパンクラスのファンの

船木時代のパンクラスは白虎隊の末路のようになるイメージがあった

パンクラスvsリングス騒動の本質は猪木vs馬場の論争と同じようなもの

論争も凄かったですよね。97年8月に「どっちがリアルファイトなのか?」って論争が起きて、リング上で髙橋義生(現・和生)が「俺が前田日明を殺す!」とアピールしましたけど。当時、なんでそこまで盛り上がるのかが不思議だったんです。猪木vs馬場の論争みたいにわかりやすくなかったですし。

菊地　本質は猪木vs馬場みたいなもんだったんじゃないですか? そのあとビッグマウスラウドで前田と船木が手打ちをしますが、そもそも前田と船木は第二次UWF消滅の段階では揉めてなかったし、前田はそもそもUインターと揉めていたわけで、それがいつの間にかパンクラスにも、まあ伝染ったんだよね(笑)。

――菊地さん自身が熱くなるようなことはなかったですか?

菊地　なかったですね。最初にも言いましたが、パンクラスに悪感情を持ったこともないし、非常に誠実で立派な団体だと思ってます。「前田が好きなら、さぞかしパンクラスは憎いに違いない」ってことは少なくともワタクシに関してはないです。これっぽっちも。

――ウチの"元前田信者"堀江ガンツもそうなんですね。

菊地　奇妙な話ですが、前田が好きで好きでたまらず、前田に何をされようがついていく、みたいな熱狂的な人でも「ひょっとしたらパンクラスのほうがガチに近い」ぐらいに思ってた人は多いと思うんです。リングスファンのほうがフィールドが広かったんですかね。

菊地　裏事情なんか何も知りませんが、ワタクシも「もの凄い僅差だけれども、あえて言えばおそらくパンクラスのほうが完ガチにちょーっとだけ近かったんじゃないかな」程度には漠然と思っていました。「秒殺」を生んだパンクラスと、「膠着」を作り上げたリングスでは、パンクラスのがガチだろう、とかいった意味ではないですよ。どっちもどっちだけど、パンクラスのがクソ真面目で、魅力に欠けると思ってたわけです。ワタクシも含めたリングス信者は、試合中にウィリー・ピータースがテコでも動かなくなったり、ああいうことが好きだったんですよね。まぁ、結局あの論争はお互いが「八百長だ」と言い合ったと思うんですけど……。

――ああ、そういう意味では猪木vs馬場と論点は同じですね。

菊地　同じです。でも、いまの時代、CAGE RAGEがUFCを八百長だ、UFCがCAGE RAGEを八百長だなんて言わないですよね? いま、団体間の交戦は、すべては企業戦争じゃないですか?

――ええ。興行戦争というか。

菊地　選手間の引き抜きやら、テレビの視聴率戦争はあっても、「そっちは八百長だ」なんて言い合う必要性はまったくないわけですが、あの時代はその必要性がまだ残ってた。これは誹謗でもなんでもありませんが、当時のリングスもパンクラスも結局半ヤオだったと思うんですね。ただし、相当深いところまで自らそうとは思わずに半ヤオをしてたと思うんです。ヤオガチ論争みたいのにはこの視点が落ちてるわけですが、その半ヤオ同士がお互い「ヤオだ」と言って揉めれば、どっちも「殺してやる!」となるに決まってますよ。

――ヒートしてあたりまえですね。

菊地　根本的にはそれだけですから、逆に細かい見立てがおもしろくなってくる。「悪口が一番ヤバいのは誰か?」とかさ。まあ、前田なんだけど(笑)。だから、ワタクシ自身はケンカに加担して燃える、って気にはまったくならなかったですね。

――真相がわからなかったですし。それよりUインターのケンカッ早さのほうが派手でおもしろくて。

菊地　Uインターは宮戸(優光)の◯◯感覚っていうか、パフォーマンスがいちいちキラキラして派手なんですよ。でもパンクラスはまあ……。

――地味だし、ドロドロしててわかりにく

菊地成孔

船木が"盟友"鈴木みのるとの理想を現実化させたパンクラスは、総合格闘技イベントの隆盛、船木の引退とともに、徐々に難しい立ち位置に立たされることになる。

パンクラスvsリングス騒動史

97年8月13日
前田日明がリングス鹿児島アリーナ大会で「パンクラスは[illegible]ヤオだから潰したい」と発言。背後には[illegible]でテレビ周辺で「リングスはパンクラスと違ってプロレスみたいなことをやってる」と風評を流された(?)という疑惑への怒りがあった模様。

97年9月6日
パンクラスは、この日の東京ベイNKホール大会で髙橋義生(現・和生)が「ウチを潰すとか言ってるヤツがいるけど許せない! 俺がやってやる!」と反撃のマイク。

97年9月26日
リングス札幌中島体育センター大会で、前田は「書面を通して(試合を)やりませんか?」と呼びかける」と発言。鈴木みのる戦を希望していた前田は髙橋が噛みついてきたことへの違和感も表明。

97年10月4日
尾崎社長と髙橋が会見を開き、髙橋vs前田戦を正式に提案。日時、会場は97年11月、98年1月、98年2月の全日本キックの後楽園ホール大会を指名。尾崎社長は「97年10月29日の後楽園大会終了後まで返事を待つ」とした。髙橋は「アルティメットルールを希望するが、前田さんに一任する。リングスルールでもいい」と発言。

97年10月11日
「PRIDE.1」東京ドーム大会で、観戦に訪れていた前田と髙橋がバックステージでニアミス。数十秒の睨み合いも乱闘には発展せず。

97年10月14日
リングス後楽園大会で、パンクラス問題に関して坂田亘が「すべては誤解なんです!」「一人の心ないフジテレビのプロデューサーのせい。そいつはパンクラスとリングスどっちにもいい顔をしている」と停戦をアピールしたが、前田は「あれは坂田個人の見解。髙橋くんの言動活動には付き合っていられない」と発言。事態はドロ沼の様相に。

97年10月29日
パンクラス後楽園大会終了後に尾崎社長が「前田氏と今後一切の関わりを持たない」とマイク。事実上の絶縁宣言となった。だが、00年5月にはホテルでリングス所属選手に話しかけた尾崎社長に前田が「殺すぞー!」と暴行を加え、事件に発展するなど両者のリング外の因縁は続くのだった。

column

菊地成孔氏の“2000年の船木誠勝”論

『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』より

インタビュー本文の発言にあるように、05年に出版された菊地氏による衝撃三昧の格闘技評論集『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』(白夜書房、08年に白夜ライブラリーで文庫化)の中で、菊地氏はパンクラスや船木誠勝に関して独自の視点から言及している。そんな中でも今回は、船木vsヒクソン戦直後に書かれたテキスト(その八十九 2000年6月2日金曜日7:48:19AM)から抜粋してお届けします!

(前略)そして、船木×ヒクソン戦が我々に与えた沈痛で抜けの悪い感動(桜庭×ホイス戦と、好対照な感動の質)の正体は、船木の不意打ちのような引退劇だけでなくあの試合が「反近代同士での戦いで、一方の反近代が負けた」という「今、とくに見たくもない物語」が展開され、しかもそれが美しかった。というアンビバレンスだったと思う。時代と寝たような快楽度の高い最新作の後に10年遅れの、しかも名作を見たような感じ。と言っていい。船木があそこまでヒクソンと撞着すると予想していた人は少ないだろう。と、いうより「撞着してくれるな(しそうだな。そして、してしまっては、見たくもない物語になる。というネガティフ洞察によって)」という欲望が、船木が引きこもって鍵をかけた部屋の外では、ヴェルサイユ宮の外での市民革命の蜂起の雄叫びの如く渦巻いたのではないか。そして、この、フランス革命をアナロジャイズした例え話こそ、パンクラスという団体の姿にオーヴァーラップする。

僕は以前、パンクラスが提示できる最も美しい姿は集団自決だと書いた。パンクラスの純粋性と誠実さを信じれば信じる程、そこに導かれる結論は世界に包囲され 追い詰められた果ての集団自決なのだ。あらゆるアナロジーに於いて、パンクラスは越後の白虎隊やジム・ジョーンズのガイアナ人民寺院に相似形だ。しかし、集団自決の可能性よりも個人競技である格闘技の中では、代表者の自決のほうが具体性が高い。負けたら引退という、ネガティブな覚悟、戦前に頻出した「死」という言説、この段階で「負け=死」という感覚が船木のオブセッションになっていたことは明白で、言うまでもないがオフセッションとは激しいナルシシズムからしか生まれない現象だ。

昨年、文庫化された『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』(白夜ライブラリー001)は、定価1,155円で絶賛発売中。このほかにも船木の津軽訛りに関しての言及や、04年という最盛期のPRIDE帝国論から、『ハッスル』を通して見る山口日昇論まで、いま読んでもまったく色あせない菊地成孔節が全開! 未読の方は書店(orネット書店)に走れ!

技術の攻防に関しての分析は、諸説あるだろうか、僕は船木はかなりのところまでヒクソンを追い詰めたと思うしヒクソンはそれを上回る技術力(決定的だったのはタックルではなく、柔道の崩しと相撲のはたき込みに似たテイクダウンであり、その後のポジショニングが難しい筈であるこのテイクダウンの直後に完璧な横四方を取った神業の如き体重移動だろう)によってそれを制した。この瞬間、船木のオブセッションが完全にリリースされたと僕は思う。そして、重要なことは船木がオブセッションした「死」が、ヒクソンがオブセッションしている「殺」を反作用で引き起こしグルーブしたことだ。髙田×ホイス戦に足りなかったものはこれだ。片方に「殺」のイメージがあっても相手に「死」のイメージが生じない限りはぬるい一人相撲になってしまい、グルーブは生まれない。この髙田のぬるさは、パンクラスのぬるさに相当する。

スポーツライクで賞金稼ぎなメンタリティーであるバス・ルッテンに顔面をボコボコにされ、独りよがりなナルシシズムによる一方的なオブセッションを爆発させ、死なかっただの明日からも生きるのだと演説して、外野席以外のファンに冷笑されていた青年軍団カルトとしてのパンクラスは、とうとうそのナルシシズムを100%丸抱え美しく殺してくれる侠客に巡り会ったのである。ナルシシズムのグルーブ。しかし、そこにあったのは、内向的でデリケートな自分を守るための逃避的ナルシシズムと、誇大妄想的で絶対に負けないための攻撃的ナルシシズムの違いだった。ナルシシズムとオブセッションにとらわれた者が、敗北を確信した瞬間に求めるのはマゾヒスティックで美しい死、以外のものはあり得ない。

ヒクソンのマウントパンチはフロイドの言う「懲罰の拳」に見えた。サディストがマゾヒストに対し「お仕置き」という言葉を使うことがアナロジャイズされてもこの際おかしくはない。ナルシスを持つなら自分のように使え、この負け犬野郎め。殺してやる。殺してください。僕は音楽家であるが、SM行為以上のグルーブの場を不幸にして知らない。

船木は最後の数分間で「遅延された自決」を果たした。そして、切腹フェチから三島由紀夫に至るナルシストの究極芸である自決のエロティシズムを爆発させたのである。日本人の集合無意識に訴えるこのエロティシズムは国境や国民性など突破しようとする桜庭×ホイス戦の21世紀向けの明質な快感に背き、淫靡で暗質なものだ。僕はそのことに感動した。感動しつつ、引いた。お茶の間でのテレビドラマに挿入されたベッドシーンを見てしまった家族の誰かのような気持ちで(試合後の談話で船木は「あのままスリーパーをかけられていたら死んでいた」とか「チョークというのは殺すためのもので」などと、すっかりまた独りよがりなナルシス系に戻った。それだったら山本宜久も中井祐樹も死を賭したサムライなのか? 実に馬鹿馬鹿しい。それに対してヒクソンは「年の功で勝ったよ。船木にミスはなかった」と余裕の発言。調教師と奴隷の関係はプレイ中だけでのみ平等なのである)。

船木の自主制作映画を観たんですが あれは船木グロテスクサイドの結晶です

かったですよね。

菊地　まあ、ドロ沼化もおもしろかったけどね（笑）。「元祖・炎上」でいいんじゃないですかね、U系世代的には。ただ、ワタクシはパンクラスの重要な試合は観てない反面、とんでもないものは観ております。船木が撮った映画ですね～（笑）。

――えっ？　そうなんですか！

菊地　船木は第二次UWFの頃から、趣味の欄に「映画制作」って書いているような映画を撮りたい人だったじゃないですか。道場で8ミリ回してるっていう伝説は『週刊プロレス』から入ってくるわけよ（笑）。んでまあ、少しはパンクラス時代に儲かったんでしょうか。マンションの一室を使って撮った船木の自主制作映画があるんです。いま持っていたら、すぐに提供したいぐらいですけど（指差しながら）あの倉庫をあされば出てくると思うんですけどね。

――それって公開されたんですか。

菊地　自主上映でしょうね。じつは、『サイコロジカル・ボディ・ブルース』を書いて、ネットで急速に知り合いになった格ヲタの方にDVDをいただいたんです。「こんなもんがあるので観てください」と（笑）。

――映画のご感想は？

菊地　まあ、船木節ですよ。「生きるの死ぬの」と。「明日が地球滅亡の日だとしたらおまえはどうする？」っていうのを船木が一人ずつ聞いていく映画なんですよ。正直、観ると気持ち悪くなります（笑）。船木って、気持ちの悪い部分ととても美しい部分が、あまりにもきれいに分離されてるわけですが、船木グロテスクサイドの結晶と言えるでしょう、あの作品は（笑）。

――うわ～！　それは凄いなぁ。

菊地　まあ、パンクラスの特集だと言って、あの作品を紹介しないのであれば、そんな特集は技術論しかやることないですよ（笑）。ワタクシが持ってても、2回は観ないと思うんで、倉庫あさって出てきたらかならずご提供します（笑）。

――お願いします！　出演してるのはパンクラスの選手なんですか？

菊地　知らない人もいたけど、全員パンクラシストなのかな？　状況としては、選手が船木の家で飲んでるんですよ。たぶん、船木が引退してから俳優として映画界に入り、いろんな映画に端役で出て現場の感じがわかってきた頃に作った作品だと思うんです。「演出はこうやるのか、カメラはこう撮るのか」とわかってきたときに撮ったんじゃないかな。フィルムじゃなくてデジカムで撮ってるんで、観た感じテレビのバラエティ番組みたいにも見える。

「負けたら引退」を公言、「ヒクソンをぶった斬ってやろうと思って」日本刀持参で入場など、00年5月26日のヒクソン戦は、船木誠勝の最終回的なムードが漂う濃厚な試合となった。

――こなれてるというか。

菊地　そうとも言えますが（笑）。グダグダとも言えますね。凄く哲学的で、かたちとして一番似てるのは宗教団体の映画でしょう。「明日地球が滅ぶとしたら何をする？　10年後、自分は笑って生きてられるだろうか？」みたいなことを、ずっと船木が聞いていくんだから。

――ザ・船木的な映画なんですね。

菊地　ええ。船木は自伝の中でも自分は母子家庭で離婚を2回して、といったことをけっこう赤裸々に書いてあるんですが、それを読むと非常に端的に言って、強くマザコンであることがわかります。保身じゃないけど、マザコンはべつに悪いことではない。単なる偏りですけれども、そういう人が母親の胎内感というか、そこから出たら「生まれる＝死ぬ」みたいなね。最重要事が世界の破滅と自分の破滅、そして誕生、というところに集中しても仕方がないわけですが、それの典型例にしてしかも自己愛の強い天才ですよね。その美学と才能が100パーセント発揮されたのがヒクソン戦ですね。着流しにドスで入場して死の覚悟を見せ、ヒクソンに殺され、試合後に引退発表、と。凄くいい試合だったし、船木も大満足だったと思うんです。船木のM性である「殺されたい、罰されたい、死に顔も美しい顔を見せたい」っていう願望が完全に満たされ、同時にヒクソンのS性である「自分に盾突くヤツは全員殺す」っていう欲望と見事に合致した、画的にも素晴らしい試合だったと思うんです。ただ、ワタクシの興味もそこで切れてしまいまして。

――現在のパンクラスは存在として引っかかりにくくなってますよね。

菊地　最近のパンクラスの試合は観たことはないですが、ああいう存在は必要だし、格闘技におけるある種の誠実さを体現してますよね。DEEPみたいに「お金はないがポップなかわいげは売るほどある」のでもなく、資本のデカいビジネス感覚もない、まさに清貧の思想というか。

――修斗はTシャツブームを牽引した時期もありましたが、競技的にはビジネス面をあえて拒否してきたイメージがあるんです。でも、パンクラスってそういう部分をなくそうとしつつ、なくならないまま現在に至るイメージがあって。

菊地　とにかくワタクシは両団体ともに21世紀に入ってからは一度も観ていないので何も言えないです。ただ、修斗とパンクラスの共通項は、「大将を粛清した」ことですね。「リングスが前田を粛清し、団体を残してたらどうだったろう」というムチャな空想をするに……もしかしたらKOKも続いていたかもな、と（笑）。

――前田のいない堅実なリングスが存続してる可能性もある、と。

菊地　要するに「創立者をクビにする」ということですね。造物主殺しとも言えますし、天才の排除とも言えます。音楽業界でも多々ありますよ。天才的なリーダーを排除し、そのあとをみんなで守り、盤石体制になって永遠に続く、と。

――ダチョウ倶楽部もそうですね（笑）。初代リーダーは現・電撃ネットワークの南部虎弾さんでしたから。

菊地　そうです、そうです（笑）。このメカニズムは一般論としてありますから。パ

ンクラスと修斗はそこが一緒です。修斗では佐山（サトル）が出され、船木は出たのか出されたのかは微妙ですが。

――どっちとも言える感じですね。

菊地 生殺しのようにも見えました。尾崎社長は船木を決して嫌ってないですし、近藤（有己）だって精神的には船木はいまだに正式な父だと思いますが。ともかく、集団の維持のために強い力を排除する、というのは原型的です。リングスみたいに造物主とともになくなる団体もありますけど。なんってってリングス自体は完全には終わってないですね。

基本は休止状態ですから。

菊地 というか、少なくともTHE OUTSIDERに出てる子たちにとってリングスはお題目でも幻想でも思い出でもなく、リアルで実体的な存在です。実際「リングスの仕切りが気にくわなねぇ！」とかマイクで言う子もいたりするんだから（笑）。

――えっ？ そんな発言を？

菊地 だからつまりTHE OUTSIDERの運営はリングスがやってるんですね。選手がエントリーし、チョイスされ、リングに上がるまでの運営管理はリングスです。で、ほら、彼らはヤンチャさんだから（笑）。

――「ふざけんな！」みたいな発言が普通にあるんですか？

菊地 まあ、全然アレですよ、一回だけだし。何か気にくわないところがあったんでしょうね、体制側に対して（笑）。しょうがないですよね、そりゃあ。んで、前田がキレるのかなと思って見てると、ニコニコ笑って「ヤンチャやなあ」って感じで。

――そんなことになってましたか。

菊地 だからU系で「一般的には実態はないが、じつはしっかり生きてる」のがリングスで、帝国に吸収されPRIDEに変わって成り上がったが、帝国が傾斜し完膚なきまでになくなったのがUインター。で、パンクラスはダチョウ倶楽部なんかと一緒だ、と。

――猪木さんのいない新日本プロレスもそうですよね。

菊地 それこそ『kamipro』もそうですよ。山口（日昇）さんがいなくなって、『kamipro』もずっと続くようなイメージがありますから。

――我々もホントは永遠の命がほしいんですけどね（笑）。

菊地 ただ、パンクラスは船木時代は「かぶいてた」っていうか、ケレン味があったんですね。身体もそうだし、ロゴマークを広告会社に頼んだとか、切れ味シャープで前衛的だったじゃないですか。「秒殺」も

同世代の若い選手の多かったパンクラスにおける、唯一の"大人"だった尾崎社長。そのキャラはパンクラスにおける誠実さのシンボルとも言える。

菊地成孔

パンクラスが生んだ言葉だし、凄くクリエイティブで。ただ、あんまりキレキレのクリエイティブって疲れるんですよね。

尖ったことばかり続けるのは、ツライですよね。

菊地 そういう集団は、「饅頭屋がずっと饅頭を作っていくような生活をしたい」「地道でいいんだ」って従業員に思わせやすいし、思わせたらいけない、ということですね。

――ついていくぶんには、安定路線のほうがいいですから。

菊地 単純に裏切り者が出るより、首謀者を斬ったほうが、算数として早いですし。とにかく、そうしてパンクラスはいまも文字どおり生きてるわけですよね。昔の日本みたいに「終身雇用」です。入ったら、尾崎社長が死ぬまで面倒見ますよ」といった集団は必要ですよ。どんなにつまらなかろうと癒しがあるし、「いまのパンクラスじゃなきゃ絶対ダメだ」って人はいるはずなんです。「OZアカデミーじゃなきゃダメだ」って人がいるように（笑）。

――まだまだいますよね。

菊地 だって潰れてないんだから。再び文字どおり、生きてれば勝ちなんですよ。ただ「現在のパンクラス以外にない、最高」という人々にいまさら創世記の話をしても、旧約聖書の話を聞かせるみたいなもんでチンプンカンプンかもしれない。でも、当時はリングスに比べてもパンクラスは団体がとにかく若く見えたんです。実年齢を比べると前田以外はほぼ同じぐらいだったかもしれないですけど、パンクラスは少年に見えた。それが「船木のデビューが例外的に早かった」ということだけではない、という点が重要です。少年の革命ね。

前田も一瞬、そう見えた時期があったわけです。「黒髪のロベスピエール」って言われたんだから「やがて集団自決するだろう」っていう狂信的で美しいイメージが強かったですね。

――そう見せていたのが作者の船木であり、文学作品に見えた、と。大人がいなかった感じはありますね。

菊地 これも過去に書きましたが、唯一の大人である尾崎社長は、お父さんとお母さんを合わせたようなパーフェクトペアレンツみたいなキャラでね。「子どもたちがいっぱいいる」ってイメージもあったんですよ。なんか孤児が集ってるみたいな。もちろん孤児じゃないわけですが。

【09年3月3日 都内・菊地氏の事務所にて収録】

次号予告!!
なんと菊地成孔氏が自宅から、ワワサの船木の映画DVDを発掘!!
4月22日発売予定の『kamipro』にて、続編インタビュー掲載!!
震えて待て!!

きくち・なるよし■1963年6月14日生まれ。千葉県銚子市出身。音楽家、文筆家。ジャズ・ミュージシャン活動の一方で、音楽、料理、ファッション等の著作も多数の文筆家としても知られ、本誌では独自すぎる視点を持つ論客としても活躍中。格闘技批評に『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』（白夜ライブラリー）。

パンクラスに人生を変えられた男

「俺にDEEPをやれって勧めたのは船木さんだからね!」

佐伯繁

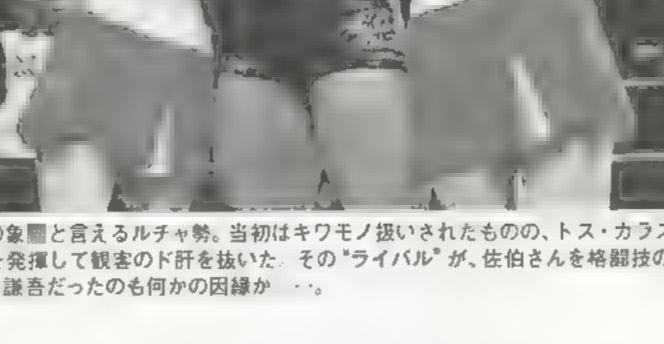
DEEP代表

DREAMをはじめ、さまざまな格闘技イベントと協力体制にあり、
いまや格闘技界のキーマンといっても過言ではない佐伯繁DEEP代表。
もちろんパンクラスとの関係も深く……というより、パンクラスなくして佐伯さんは
語れないほどなのである。佐伯さんにとってパンクラスとはどんな存在なのか。
出会いに始まって現在の課題まで、例によって雑談混じりで聞いてきました!

聞き手 / 橋本宗洋

佐伯　（昨年ダイエットした聞き手に）あれ、橋本さんリバウンドしてない？
——110キロから84キロに落としたんですけど、今年に入って93キロに戻っちゃったんですよ……。
佐伯　ウシシシシ！　やっぱりねぇ！
——めちゃくちゃ嬉しそうですね。
佐伯　やっぱりさ、忙しかったりストレス溜まったりすると、食う方向にいくじゃない、俺たちデブはさ。難しいのよ、ダイエットって。
——まあ、時間的なゆとりがないと難しいですよね。で、今日はもちろんダイエット話じゃなくて、逆ハイブリッドボディの佐伯さんに、パンクラスについてお聞きしたいんですけど。
佐伯　ああ、パンクラスねぇ。難しいよねぇ……。
——ダイエット同様にパンクラスも難しい、と（笑）。佐伯さんがパンクラスと関わりを持つようになったのって、いつ頃なんですか？
佐伯　名古屋にいて、大阪プロレスとかインディーの興行を買ってた頃だよね。
——いまとなっては懐かしい、佐伯さんが編集プロダクションを経営して大金持ちだった時代ですよね。
佐伯　その頃、東京にもプロレス観に行ったりしてたから、そこで誰かの紹介でパンクラスの坂本（靖）さんに会ったんじゃないかな。それで謙吾とも知り合って。
——佐伯さん、謙吾選手の写真集も出してるんですよね。自分で撮影もして。

謙吾という選手に魅力を感じて格闘技に引き込まれていったんだよね

佐伯　その頃は会社の経営に専念してたんだけど、ひさしぶりにカメラマンやってみようかって。それでロスとかベガスに撮影に行ったりね。
——羽振りいいですねぇ。じゃあ、謙吾選手の存在がかなり大きかったわけですね。
佐伯　そうね。謙吾っていう選手に魅力を感じたし、そこから格闘技にも引き込まれていって。で、俺がやってたのは800人、1000人規模の興行なんだけど、どうしても欲が出てくるんだよね。
——大きい興行をやりたくなってきて。
佐伯　それで愛知県体育館を押さえてさ。最初はプロレスの興行をやろうとしてたんだよね。いろんな団体の選手集めて。
——以前、聞いた話ではロード・ウォリアーズvsノーフィアー（高山善廣＆大森隆男）をやる予定だったんですよね。
佐伯　あと高田延彦vsカクタス・ジャックとかね。島田裕二が「やれますよぉ！」って言うから。
——暗躍しますよねぇ、島田さんは（笑）。

初[illegible]EPの象[illegible]と言えるルチャ勢。当初はキワモノ扱いされたものの、トス・カラスJrが高い潜在能力を発揮して観客のド肝を抜いた。その"ライバル"が、佐伯さんを格闘技の魅力に目覚めさせた謙吾だったのも何かの因縁か[illegible]。

佐伯　だけど、さっきも言ったみたいに格闘技も好きになってきてたから、パンクラスのビッグマッチをやってもいいな、と。
——押さえてた愛知県体育館で。
佐伯　で、そういうときに謙吾の写真集のサイン会で、大阪とか名古屋とかいろいろ回ったのよ。
——全国サイン会ツアー！　豪勢ですねぇ。
佐伯　まあ、俺が金出してたからね！
——なるほど（笑）。
佐伯　で、サイン会で札幌に行ったときに船木さんと一緒にメシ食ったんだわ。そこで「新しい格闘技イベントを立ち上げてもいいんじゃないですか」って言われて。
——発案者は船木さんだった、と。
佐伯　正直、俺はどっちでもよかったんで、パンクラスの興行にするか新イベントにするか、向こうにお任せしたのよ。それで返ってきた答えが「パンクラス全面協力で、新しい大会を始めましょう」と。
——じゃあDEEPはパンクラスなしでは始まらなかったし、全面協力が大前提だった、と。
佐伯　もちろん。だって、こっちは格闘技の興行のやり方なんてまったく知らないしね。
——実際、初期のDEEPのマッチメイクは、パンクラスの選手とルチャドールが中心でしたよね。そういう中で、佐伯さんの中ではパンクラスにどんなイメージがありました？
佐伯　やっぱり魅力的な選手が多かったし、グラバカとの対抗戦が盛り上がってたでしょ。純粋に凄いなと思ってたよ。あとサミーっていうビッグスポンサーがいたからね。そこもうらやましかった。そういう中で「次はどの選手を貸してくれるのかな」とか。
——パンクラスなしではDEEPが成り立たないというか。
佐伯　それは選手の面だけじゃなくね。話を持ちかけられて、大阪に道場を作ったりもしたし。
——あ、知らない人も多いんですけど、P's LAB大阪（稲垣組）のオーナーは佐伯さんですからね。
佐伯　そういうとこでも、パンクラスとガ

ッチリ組んでたわけよ。外国人のビザはどうやって取るのかとか、そういう面も教わったし。興行主としての先生みたいなもんだったよね、パンクラスは。細かいことでいうと、控室には水とカロリーメイトを置いておくとか。

――PRIDE武士道アシスタント・ディレクター就任時の名言「会場の掃除から弁当管理まで」はパンクラスから教わったことだった、と(笑)。

佐伯 ルールから階級から、全部お手本だよね。こっちは自信もないしさ。判定で揉めたり、反則があったりすると俺のところに抗議がくるわけじゃない?

――また反則で揉めることが多かったですからね。

佐伯 鈴木みのるvsソラールとかさぁ、あとディファで窪田幸生が2試合連続で金的食らっちゃったり。そういうときに「なんでこうなるんだ!」って詰め寄られても、俺も「なんでだろ?」ってなっちゃうわけよ。

――右往左往って感じで(笑)。

佐伯 いまだったら自分で判断できるんだけどね。

――実際、回数を重ねるごとに、佐伯さんもプロモーターとして成長していくわけじゃないですか。パンクラス以外の団体とも付き合いができていきますし。そういう中でパンクラスの印象って変わりました?

佐伯 まず思ったのは、「なんでこんなにスタッフがいるんだ!?」と。効率悪いんじゃないかって。

2002年3月の愛知県体育館大会では、日本vsルチャ5対5対抗戦が実現。近藤有己vsキック・ボクサー(という名のルチャドール)、鈴木みのるvsエル・ソラールなど佐伯イズムあふれるマッチメイクがファンを魅了した。

佐伯繁

こうなる前に、パンクラスにはやれることがあったんじゃないかな

――そういう面も見えてきて。まあ、それは佐伯さんがなんでも自分でできちゃうタイプだからでもあるんですけどね。

佐伯 離脱した選手もいて、彼らと直接、話をするといろいろ不満も聞くしね。あと、なんでもパンクラスの影響下でやってると、矛盾も出てきちゃうのよ。大阪道場にしたって、俺が金出してるのになんでDEEPジムじゃないのか、とかさ。前にね、(前田)吉朗とDJ(taiki)が試合したとき、DJがパンクラスのテーマで入場したんだよね。「前田はDEEPの選手だから」って。

――ファンの目には見えないところで対抗戦になって。

佐伯 そのDJも、ウチで出場者決定戦やってDREAMに出るんだからワケわかんないけどね(笑)。

――そういう部分でも、DEEPがどんどん力をつけてきたってことですよね。DJ選手のみならず、パンクラスを抜けた選手がいっぱい出るようにもなって。

佐伯 それは違うんだって! よく「引き抜いた」とか言われるんだけどさぁ、選手のほうから来るんだからしょうがないじゃん!

――また受け入れますからね。佐伯さん、面倒見がいいから。

佐伯 誰でもいいってわけじゃないし、なんでもワガママ聞くわけじゃないけどね。話を戻すと、大会の回数を重ねてくと、ウチも独自色を出す必要が出てくるじゃない。パンクラスから借りれる選手で興行やっていくと、どうしてもDEEPならではの物語が作れないんだよね。

――むしろ勢いがある選手ほど、パンクラスで出番があるからDEEPには出ないわけですしね。

佐伯 そういうこともあったんで、パンクラスとの関係に、一区切りつける時期がくるんだよね。具体的に言うと、2002年8月の有明コロシアム。田村潔司vs美濃輪育久やったときね。あそこでやっぱり、自分も自信がついてきたし、お金もなくなってきたし(笑)。

――そこからDEEPも後楽園がベースになって、独自路線の中で長南(亮)選手みたいな"DEEPファイター"も出てきましたし。

佐伯 フューチャーファイト(本戦開始前の試合)を始めたのも、ウチが最初だったしね。

――いま、DEEPは後楽園を確実に盛り上げる路線で成功してると思うんですけど、一方でかつての師匠的存在であるパンクラスはディファ大会が主体になったり、苦しい状況が続いてますよね。

佐伯 俺からは言いにくいけどねぇ……。こうなる前に、もっとやれることはあったんじゃないかと思うんだわ。やっぱり一時期、マッチメイクのグレードが下がったように見えたじゃない。

――予算が苦しい中で、苦しいなりのマッチメイクしかしないからお客さんが入ら

ず……というスパイラルですよね。

佐伯　結果論かもしれないけど、あそこで無理してでもいいマッチメイクしておけばね。毎回、近藤（有己）選手を出してもよかっただろうし。マッチメイクで興行のイメージってガラッと変わるからさ。

――「いまのパンクラス頑張ってるな。おもしろそうだな」っていうイメージは大事ですよね。

佐伯　そのへんはもったいないよね。いまだってさ、近藤選手ってデカイ存在なのよ。

――僕も復活してほしいんですよ。

佐伯　光らせる方法が絶対あると思うんだよね。それは伊藤（崇文）ちゃんだってそうだし、アライ（ケンジ）とかも。ただ、いまは現状を受け止めて、割り切ってやってくしかないと思うけどね。

――過去がどうこうじゃなく、ここから前を向いていくしかない、と。

佐伯　結局、マッチメイクが大変なのはどこも一緒だからね。選手はみんな上の舞台を目指したいわけでしょ。そういう中で試合を組まなきゃいけないんだから。

パンクラスに人生を変えられた男

また、メジャーから声がかかるタイミングが、いまは凄い早いのよ！

――そのへんは後楽園、ディファで興行をやってるプロモーター全員の悩みどころでもある、と。

佐伯　そうだよぉ！　この前だってウチのさぁ……。

――いや、DEEPに関する悩みは今度ゆっくりお聞きしますんで、今日はこのへんで大丈夫です（笑）。

【09年3月10日　DEEP道場にて収録】

さえき・しげる■1969年6月25日、富山県出身。総合格闘技イベントDEEPを2001年に旗揚げ。DEEP代表であると同時にDREAM広報を務めるなど八面六臂の活躍を見せるが心労も多く、最近では円形脱毛症が6つも発覚！

プレイバック再録

暴言！

2002年3月30日、愛知県体育館「DEEP 4th IMAPACT」

ルチャリブレ軍団の首領

ドス・カラス

「パンクラスは実力も人気も何もない！」

DEEPにおけるパンクラスを語るうえで避けられない、02年3月30日に行なわれたルチャとの対抗戦。ここではメインで[illegible]ドス・カラス[illegible]選手をはたしたものの、鈴木みのるvsソラール戦では、ソラールの金的蹴りによって、両軍大乱闘となる[illegible]パンクラス[illegible]ルチャという意外すぎる因縁が生まれた。そのときのルチャ軍首領ドス・カラスのコメントがあまりにもトンパチなので、思わずここに再掲載してしまおう。

――息子さんであるドスJr.選手は負けてしまったわけですけど――

ドス　まず最初に[illegible]、（ケン）ゴが勝ったのはただのラッキーということだ（キッパリ）。ジュニアの顔は少しも傷ついてないことがそれを証明している。そして非常に残念なことにレフェリーのジャッジに問題があった。ブレイクすべき局面では止めず、止めないでいい局面で止める。レフェリーは日本人びいきじゃないのか？　たとえばボクシングにしても、タイ人やメキシコ人が日本に来ると日本人選手に必ず[illegible]ルトを獲られてしまう。それはジャッジが日本人をひいきしてるからだよ（キッパリ）。今回の大会でも、日本人とブラジル人の試合（佐々木[illegible]）[illegible]人が勝った[illegible]。結果は引き分け[illegible]不[illegible]な判定[illegible]日本人とメキシコ人が闘う以上、レフェリーはアメリカ人にすべきだね。

――それでは、レフェリーがしっかりしてればドスJr.も勝っていた、と

ドス　もち[illegible]勝って[illegible]はずだ[illegible]ソラールにしてもファールなどやってないのか[illegible]ファンが一番わかってるんじゃないか？　ファンはどっちを応援していた？　ソラールだろ。どっちにブーイングをしていた？　スズキとかいうボーイにじゃないのか

――パンクラス勢は「あのファールはワザとだ」と言ってるんですけど？

ドス　フフフ（不敵に）。じゃあ、言わせてもらうが、乱闘を仕掛けてきたのはどっちなんだ？　奴らはマリファナでもやってるんじゃないのか？　あいつらの小便を検査するといい（笑）。そもそもバレ[illegible]トドの「トド」というのはスペイン語で「全部」という意味なんだ。今日の大会は我々ルチャドールから言わせれば全然「トド」なんかじゃないと[illegible]。

――パンクラス勢は「バカにするような[illegible]たらルチャと全面対抗戦をやって、日本で仕事ができないように[illegible]でやる」と[illegible]な発言もしてますが。

ドス　記者の皆さんにお願いがある。「いつでもやってやる！」と彼らに伝えておいてくれ！　明日でもかまわない。このまま我々をメキシコに帰すようだったら、[illegible]ますます[illegible]がかかることになるよ。

――パンクラスの印象はありますか？

ドス　パンクラスなんていう団体はまったく知らなかった。今回初めて試合を観させてもらったが、良いところが一つもない団体だね（キッパリ）。客を興奮させるところか冷めさせていただろう？　客を興奮させたのは我々ルチャドールだ。[illegible]はプロとして失格だ。そして技術的にも[illegible]ものが[illegible]られなかった。つまり、すべてにおいて良いところが何[illegible]団体。それが私の[illegible]ラスとかいう団体の評価だ。

――対抗戦では全敗[illegible]ですが？

ドス　負けたとは思ってない。もう一度言うが、レフェリー[illegible]問題があったと[illegible]ケンゴが勝ったのはラッキーなだけだ。バス[illegible]ルッテンという有名な選手が「ドスJr.がバーリ・トゥードの練習を半年でもしたら世界最強になれる」と言っていましたよ。

ドス　それは充分わかっていることだよ。

――わかってましたか（笑）。

ドス　ジュニアはアマレスで世界各国の強豪と闘ってきたんだからね。残念ながらオリンピックの出場は、メキシコ政府とのトラブルでダメになってしまったがね。

――今回は残念な結果でしたけど、我々もドスJr.選手には期待していますから。

ドス　私にはジュニアのほかにも[illegible]息子がいて、まだ15歳なんだが190センチという長身なんだ。ジュニアの影響もあるが、バレ[illegible]トドの選手になりたいと言ってるよ。そちらも楽しみにしていてくれ[illegible]

kamipro books

秋山成勲は、
悪質な反則野郎である。
チュ・ソンフンは、
悲劇の元・在日韓国人である。
どちらの姿も正しく、
そして正しくない。

魔王――。

日本からでは見えない真実。
韓国からではわからない事象の裏側。
韓国現地取材、証言構成によって、
"ヌルヌル事件"桜庭和志戦から
衝撃のUFC参戦まで――。
本書は魔王・秋山成勲の素顔に迫る
書き下ろしノンフィクションである――!!

全国書店にて4月2日(木)発売

魔王
秋山成勲
二つの祖国を持つ男

田中太陽 著

B6変型判 260ページ 定価=1,680円(本体1,600円+税)

enterbrain 株式会社エンタープレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)[通信販売のお問い合わせ先] http://www.enterbrain.co.jp/

UFC人気爆発の原動力

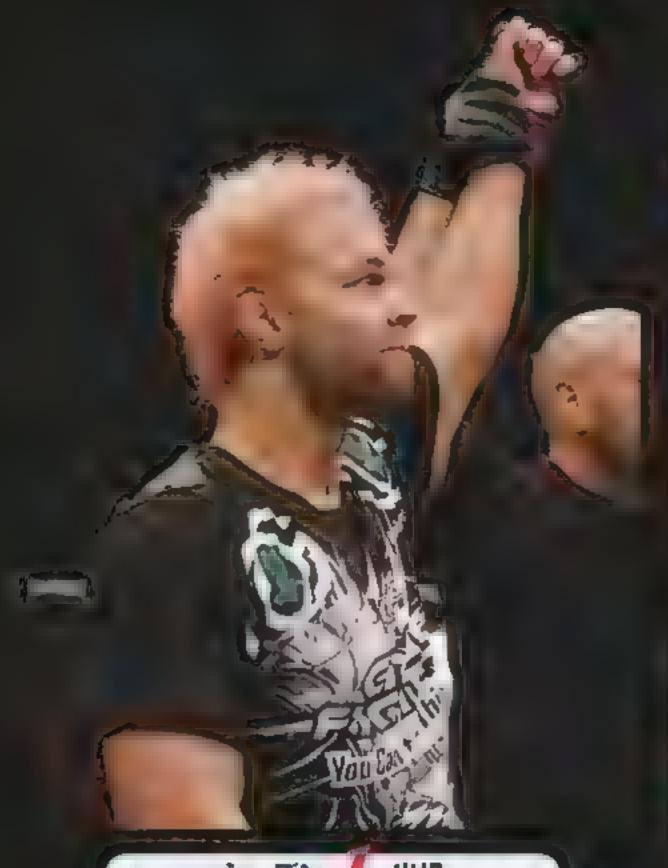
リアリティショー TUF

THE ULTIMATE FIGHTER

『TUF』を知らずしてUFCは語れない!

UFC人気爆発の原動力となったリアリティショー「ジ・アルティメット・ファイター(TUF)」。
この番組により、MMAというものがアメリカで世間に知られるようになったが、この選手育成番組から巣立った選手が、
いまのUFCトップ戦線にかなり食い込んでいるのだ。もはや『TUF』を知らずして、UFCは語れないのである。
ここでは『TUF』出身ファイター、そしてコーチを通して、『TUF』の実態に迫ってみよう。

構成/堀江ガンツ　撮影/Josh Hedges(UFC)

シーズン 1 出場

JOSH KOSCHECK
ジョシュ・コスチェック

レスリングをバックボーンに持ち、金髪のチリチリヘアが特徴的。ジョルジュ・サンピエールやチアゴ・アウベスに敗れており、やや"神の階級"では影が薄い存在だが、パワフルなテイクダウンとパンチを活かしたスタイルでトップ10には入るであろう実力者。短期間で試合をたくさんこなすことも多いまさにタフガイ。

シーズン 1 ミドル級準優勝

KENNY FLORIAN
ケニー・フロリアン

ブラジルでは名門グレイシーバッハで柔術を、タイでは武蔵も練習するシッチョートンジムでムエタイを学ぶ。本場で習得した柔術+ムエタイをベースにしたファイトスタイルの持ち主で、ション・シャークをヒジ打ちで血まみれにした試合は超有名。青木真也や長南亮をはじめ、日本人ファイターの中にもファンの多い。

シーズン 1 ミドル級優勝

DIEGO SANCHEZ
ディエゴ・サンチェズ

「TUF」ではジョシュ・コスチェックやケニー・フロリアンという名だたる強豪ファイターを下して優勝。強さはもちろんのこと、常にアグレッシブなファイトで観客を魅了するUFCの名勝負製造機。前回の試合から階級をライト級に落とし、BJペンのベルトを狙う。ちなみにヒクソン・グレイシーをこよなく愛している。

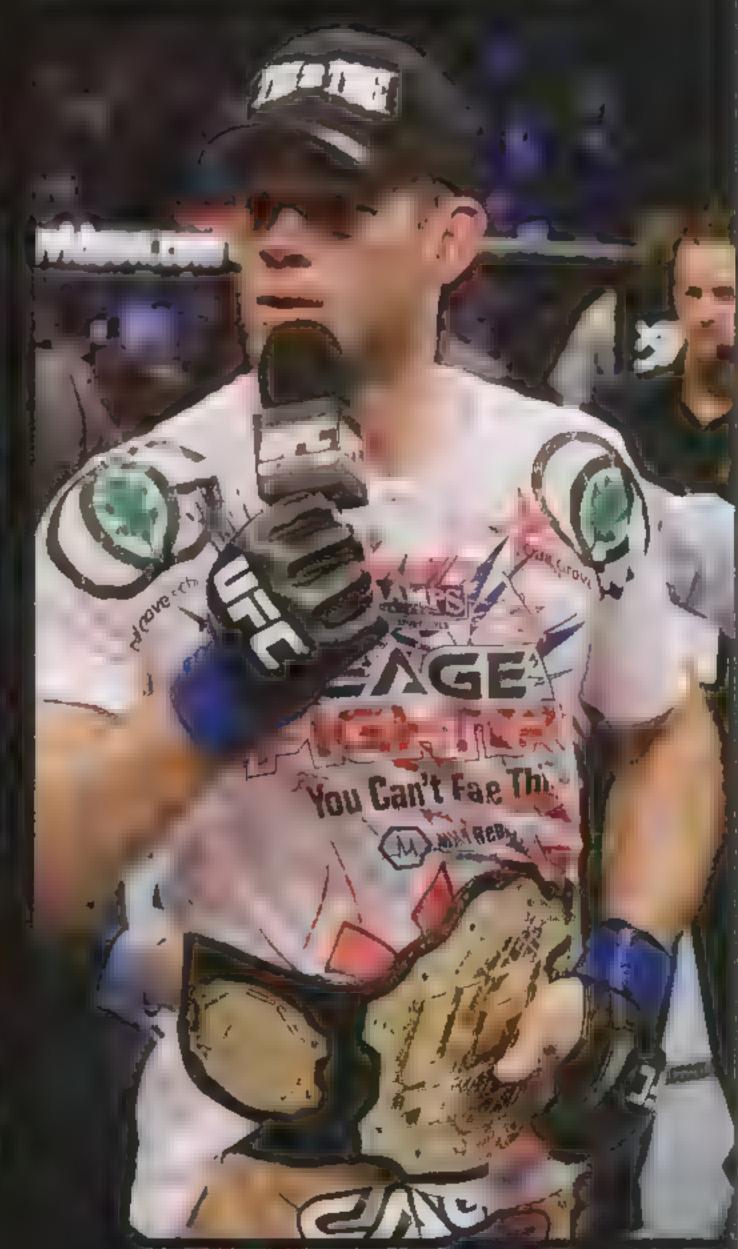
シーズン 2 ミドル級優勝

JOE STEVENSON
ジョー・スティーブンソン

26歳にして40戦近い戦績を誇っている若きベテラン。「TUF」出場以前にもKOTCをはじめ、様々な大会でキャリアを積んできた。いつも気合十分のファイトを見せるのだが、ここ最近は連敗中とやや元気がない。フロントチョークを得意としたり、背が低くて筋肉質なところなど、見た目が北岡悟似。(北岡本人は否定)

シーズン 1 ライトヘビー級準優勝

STEPHAN BONNAR
ステファン・ボナー

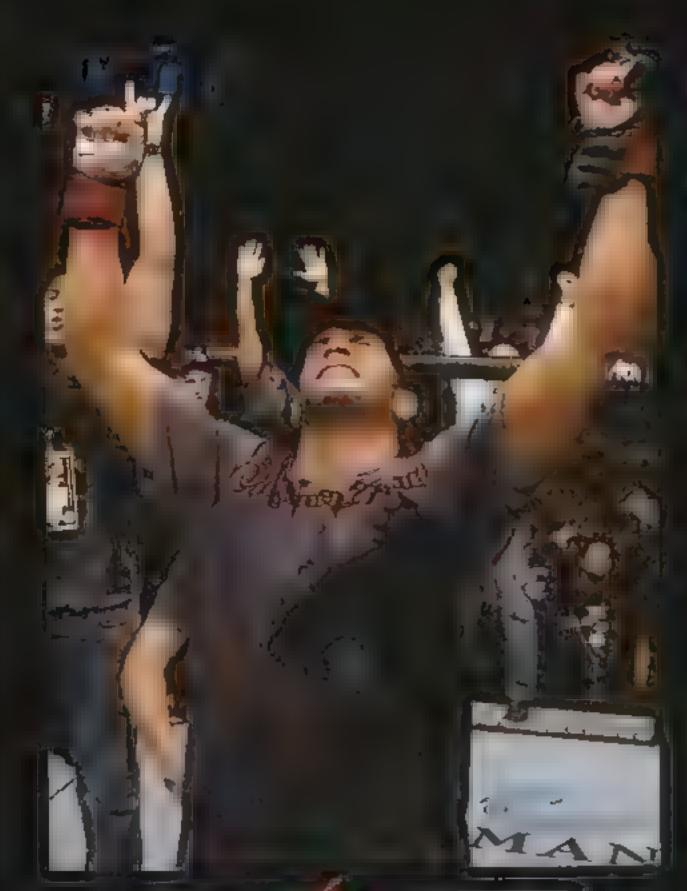
ムエタイや柔術をバックボーンに持ち、「TUF」出場前には「ジャングル・ファイト」でLYOTOと対戦したこともある。TUF1ではフォレスト・グリフィンに敗れるも、その後はUFNを中心に活躍。グリフィンとは2度対戦、ラシャド・エバンスにも敗れている。層の厚いUFCライトヘビー級では中堅クラスといったところ。

シーズン 1 ライトヘビー級優勝

FORREST GRIFFIN
フォレスト・グリフィン

20歳で格闘技を始め、デビュー戦の相手はなんとあのダン・スバーン。「TUF」をキッカケにUFCの超人気選手となり、マウリシオ・ショーグンにも勝利。クイントン"ランペイジ"ジャクソンを下して、ライトヘビー級王者にもなった。ファイトスタイルは豊富なスタミナでフルラウンド動き続ける頑張り屋さん系。

UFCには日本の格闘技ファンにとって無名ながら、
アメリカでは絶大な人気を誇るファイターが数多くいる。
たいたいこのタイプは「TUF」出身ファイターだ。
フォレスト・グリフィン、ラシャド・エバンスら、
「TUF」からUFCチャンピオンがすでに生まれている時代。
いま一度、「TUF」出身ファイターをおさらいしてみよう。

文/中村拓己(GBR)　撮影/Josh Hedges(UFC)

TUF出身ファイター

シーズン4 ミドル級準優勝

PATRICK COTE
パトリック・コーテ

UFC3連敗を喫した後、「TUF」に出場し、再びUFCレギュラーの座を勝ち取った不屈の男。ケンドロール・グローブやヒカルド・アルメイダという強豪を下して、絶対王者アンデウソン・シウバに挑戦。しかし試合中にステップを踏んだ際に右膝を負傷し、TKO負けというダイナマイト四国ばりの負け方をしてしまっている。

シーズン3 ライトヘビー級優勝

MICHEL BISPING
マイケル・ビスピング

イギリス出身で地元のケージファイトで活躍し、「TUF」に抜擢された。これまで判定決着が2つしかなく、デビュー以降13連勝&KO・一本勝ちという記録を打ちたてた。敗れた相手も現ライトヘビー級王者のラシャド・エバンスであり、ビッグネームとの対戦は少ないものの、この階級のトップコンテンダーであるといえる。

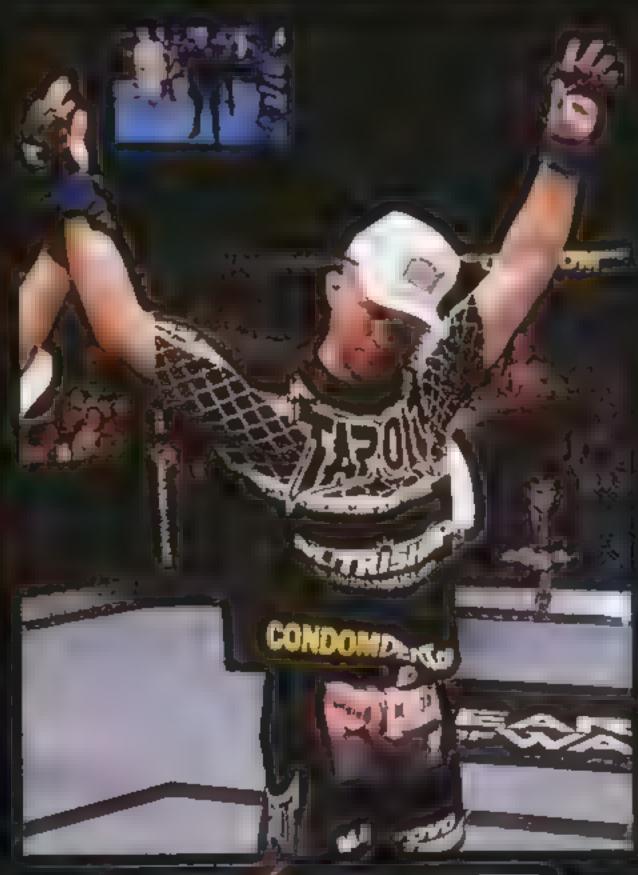
シーズン2 ライトヘビー級優勝

RASHAD EVANS
ラシャド・エバンス

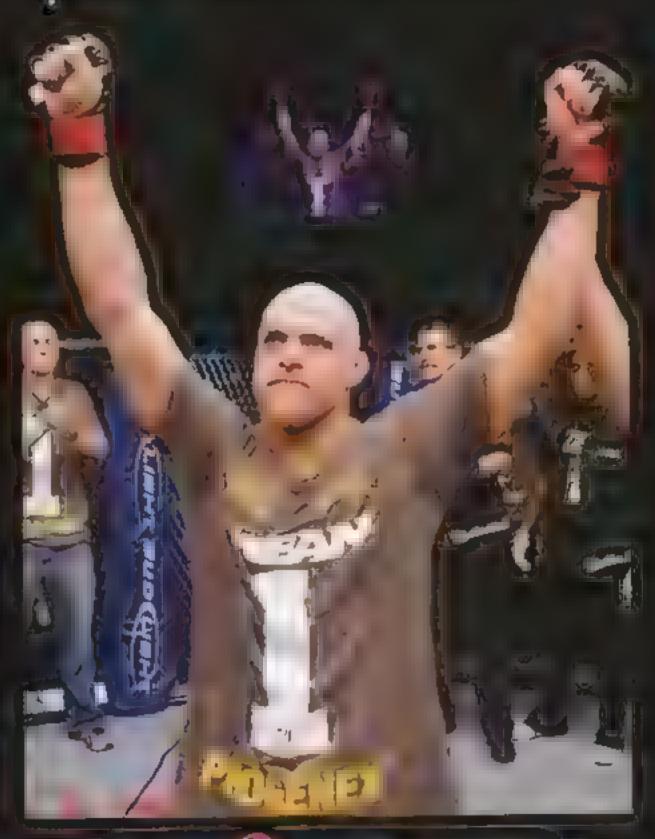
高校時代にはアメフトも経験、格闘技のバックボーンはレスリングとボクシング。名匠グレッグ・ジャクソン率いるジャクソンズMMAの一員でチャック・リデル、フォレスト・グリフィンを下し、総合格闘技無敗のまま、ライトヘビー級王者となった。類稀な体のバネと見事なパンチのカウンターはまさに芸術品。

シーズン5 ライト級準優勝

NATE DIAZ
ネイト・ディアス

PRIDEアメリカ大会で五味隆典と対戦したニック・ディアスの実弟。ライト級において183cmという長身を誇り、長い手足を利用した打撃と柔術をバックグラウンドに持つサブミッションテクニックが武器。対戦相手に三角絞めをかけたまま、中指を立てるポーズをとるなど、ハチャメチャな性格?でもある。

シーズン4 ウェルター級準優勝

CHRIS LYTLE
クリス・ライトル

かつてパンクラスに格闘技留学していたこともある日本でもお馴染みのファイター。その後はUFC、WECなどでキャリアを積み、CAGE RAGEではチャンピオンにもなった。「TUF」出場後は勝ったり負けたりの試合が続いているが、トップどころとの対戦が多かったことも理由の一つ。技術的なレベルは高い選手だ。

シーズン2 ライトヘビー級準優勝

KEITH JARDINE
キース・ジャーディン

過去にパンクラスで山宮恵一郎とも対戦したことがあるファイター。決して綺麗なフォームとは言いがたいのだが、なぜか当たるパンチが武器でチャック・リデルやフォレスト・グリフィンも下している。ちなみにヴァンダレイ・シウバに豪快なKO負けを喫し、ヴァンダレイのUFC移籍後、初勝利の相手でもある。

UFCの頂点に立ったTUFファイター

RASHAD EVANS

ラシャド・エバンス

「『TUF』に出ていなかったら、こんなに早くチャンピオンになれなかっただろうね」

現在、群雄割拠のUFCライトヘビー級戦線で頂点に立つ男、ラシャド・エバンス。
この新世代のハードパンチャーは、もともと「TUF シーズン2」の優勝者。
無名の格闘家からリアリティショーによって、一気にトップに駆け上がるきっかけをつかんだシンデレラボーイが、
若いファイターにとっての「TUF」を語ってくれた。

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦　撮影／Josh Hedges（UFC）

チャック・リデル、ランペイジ・ジャクソン、マウリシオ・ショーグン、フォレスト・グリフィンなど、スター選手がズラリと揃い、選手層の厚いＵＦＣの中でも最もホットな階級であるライトヘビー級。そのＵＦＣ最激戦区の頂点に立つのが、このラシャド・エバンスだ。

日本ではあまり知られていないエバンスが、多くのスター選手を押しのけてチャンピオンの座についているのは不思議に思うかもしれないが、エバンスは『ＴＵＦ』のシーズン２優勝者であり、アメリカではかなりの知名度を持った選手。ＵＦＣはすでに『ＴＵＦ』出身ファイターがトップに立つ時代が来ているのである。

そんなエバンスがいかにして『ＴＵＦ』でのし上がり、ＵＦＣの頂点に立ったのか。ラスベガスで王者を直撃した。

――エバンス選手、はじめまして。日本のＭＭＡマガジン『ｋａｍｉｐｒｏ』です。インタビューよろしいですか？

エバンス　問題ないよ。日本のマガジンが俺に取材なんて珍しいね。日本のファン

は俺のこと知っていてくれるのかい？

――もちろん、テレビ（WOWOW）を通じて知られてますよ。今日はエバンス選手が『TUF』に出演してから、いかにしてここまでのぼりつめたのかを聞かせてください。

エバンス OK！

――まず『TUF』での経験はあなたにとってどんな意味がありましたか？

エバンス とてもいい経験になったよ。あの番組に出ることで、とくに様々なプレッシャーをどのように対応するかを学ぶことができたからね。UFCのファイターであるってことは、常に「プレッシャーと共生」することを意味するんだ。『TUF』でのプレッシャーに対応できなかったら、UFCのファイターになるなんてことは不可能なんだよ。

――『TUF』での経験がなかったら、チャンピンになるにはもっとあとになっていたと思いますか？

エバンス 間違いなく時間がかかっていただろうね。このスポーツはファンあってのもので、UFCはそのファンの声によってマッチメイキングを考慮しているといっても過言ではないからね。幸い俺は『TUF』というリアリティショーを通じてファンの支持を得られたので、その結果として早い時期にチャンスをもらえたし、タイトル挑戦にもたどり着いたんだと思う。

――もともと『TUF』に出ようと思ったきっかけはなんだったんですか？

エバンス 俺はUFCファイターになりたかったから、スパーリングの模様を収めたビデオテープを直接、スパイクTV（『TUF』を放映しているテレビ局）に送ったんだ。そのときのスパーは、BGMにラブソング系のスローなミュージックが偶然にもラジオから流れていて、激しいスパーとのコントラストがとてもおかしいものとなって、その結果、『TUF』のチームメンバーに選ばれたんだよ（笑）。

――偶然、おもしろビデオがウケてしまったんですか（笑）。

エバンス まあ、ファイターに限らず、無名の人間がチャンスをつかむきっかけなんてそんなもんだよ（笑）。

――『TUF』に出て一番良かったことと、一番大変だったことを教えてください。

昨年末、行なわれたフォレスト・グリフィンとのライトヘビー級タイトルマッチは、『TUF』優勝者同士の闘いだった。もう時代は『TUF』世代に移りつつある。

エバンス 『TUF』で一番良かったことは、生まれて初めてフルタイムで練習に専念できたことだね。以前は仕事をしながらの練習だったからね。もちろんリッチ・フランクリンやマット・ヒューズという素晴らしいコーチがいたばかりでなく、ランディ・クートゥアーやジェレミー・ホーンなどトップファイターたちが来て、一緒にトレーニングを行うことができたんだ。もうその雰囲気だけでも、自分にとっては初めて体験した凄いものだったんだよ。逆に一番嫌だったことは、テレビ番組ということでプロデューサーの思惑を感じたときだね。たとえばプロデューサーのお気に入りのファイターとそうでないファイターの扱いが異なったりとか、そういう実力以外の要素がどうしてもあったんだよ。

『TUF』出演中は感情のコントロールが大変なんだ

――なるほど。エバンス選手はプロデューサーに気に入られるために、何か工夫したりしたんですか？

エバンス 俺はパフォーマンスを見せるチャンスが来たときに、ベストの動きを見せるようにしたんだよ。当然のことだけどね。とにかくプロデューサーには最大限、自分の能力を見てもらおうと必死だったよ。

――『TUF』に出る前はまったくの無名だったあなたが、いまやUFCでも一番スター選手が揃っているライトヘビー級のチャンピオンになっているというのは、どんな気分ですか？

エバンス クレイジーだね！ あの頃の俺には信じられないことだよ。でも、チャンピオンになったとはいえ、俺はいまだにハングリー精神を持ち続けているし、より強くなるためにハードなトレーニングを続けているよ。確かに昔はベルトを巻くことが目標だったけど、実際にチャンピオンになったいまが最高にハッピーかというと、そうではなかったんだ。いまは目標もベストのファイターとして、どこまで防衛できるかということに自動的に変わったしね。

――あなたやグリフィンなどの『TUF』出身ファイターの活躍によって、若いファイターにとって『TUF』は夢の舞台となってますが？

エバンス 確かにその通りだと思うよ。とくに『TUF』のファーストシーズンで、グリフィンがステファン（・ボナー）と素晴らしいショーを行なってくれたお陰で、それまでMMAなど観たこともなかった人たちをも惹き付けたんだ。同時に若いファイターにはUFCへの登竜門になったしね。

――チャンピオンとなったいま、今後は逆に『TUF』のコーチとなって若いファイターにチャンスを与えたいという気持ちはありますか？

エバンス もちろんだよ。チャンスがあったら『TUF』でコーチになって、リッチ・フランクリンやマット・ヒューズが俺たちに与えてくれたものを今後は若いファイターに還元したいね。実際に『TUF』を経験している自分は良い指導者になれると思っているよ。常にカメラが回っているというのは、テレビに慣れていないファイターたちにとって大きなプレッシャーになるし、カメラが回ってないところでもいろいろなことが起こるからね。『TUF』に参加しているあいだは、とにかく感情をどうコントロールするかが、とても大変なんだ。そういった若いファイターの気持ちが、俺には実体験としてわかるから、チャンスがあればぜひコーチをやってみたいね。

――わかりました。では、今後の活躍に期待してます。

【09年1月30日／米国ネバダ州ラスベガス、MGMグランドガーデンアリーナにて収録】

Rashad Evans■1979年9月25日、米国ニューヨーク州出身。リアリティショー「TUF シーズン2」に優勝し、UFCと契約。その後、破竹の連勝を続け、現在はMMA14戦無敗の戦績を誇る。現UFC世界ライトヘビー級王者。180cm、93kg。

現役『TUF』コーチが語る『TUF』の“効果”

DAN HENDERSON

ダン・ヘンダーソン

「『TUF』のコーチは出演料は安いけど その“見返り”は非常に大きいんだ」

UFC人気爆発の原動力となったリアリティショー「TUF」は、早くもシーズン9を迎えているが、現在、そのコーチを努めているのが、おなじみダン・ヘンダーソンだ。今年1月の「UFC93」でリッチ・フランクリンを破り、「TUF」コーチの座を獲得したダンヘン。そんな現役コーチに「TUF」の裏側を聞いてみた。

聞き手&撮影/堀江ガンツ　通訳/石井史彦

――今日は『TUFシーズン8』でコーチを務めるダン選手に、『TUF』についていろいろ聞かせていただきたいと思います。

ダン　OK。ただ、あんまり話せないことも多いんだけどね。

――そうなんですか？

ダン　まだ放送前だからさ、機密事項が多いんだよ（苦笑）。

――なるほど。ネタバレになっちゃいますもんね。

ダン　だから、どこで収録しているかとか、漏らしちゃいけないんだ。厳密に言えば、俺がいまここに住んでいることさえ、ホントは明かしちゃいけないんだよ（笑）。

――じゃあ、プレスを招いてインタビューを受けたりしたらマズいんじゃないですか⁉

ダン　ま、日本のプレスだったらいいかと思ってね（笑）。だから、俺がここに住んでいることは内緒だぜ。

――いま、ラスベガス郊外の某所にあるコンドミニアムにいるわけですけど、ここは『TUF』の収録のために住んでるんですか？

ダン　ああ。スパイクTVがこの場所を提供してくれたんだ。俺の自宅があるカリフォルニア州テメキュラからラスベガスまで毎日通うわけにいかないからね。だから、いまは家族と離れて暮らしてる。

――ということは、『TUF』の収録期間は単身赴任みたいなものなんですね。

ダン　基本的にはそうだね。このあいだ『アフリクション』の試合でソクジュのセコンドに付くために一度カリフォルニアに帰って、ついでに8歳になる息子のレスリングの試合も観てこれたけど、このケースは例外かな。スケジュールが許せばそういうこともできるけど、やっぱりTUFファイターや自分の練習には穴を空けたくないからなかなか家には帰れないよね。

――ご家族はいまの生活は理解はしてくれてるんですか？

ダン　たまにワイフも子どもたちも不満を言ったりするけど、まあ大丈夫なんじゃないか？　ただオレ自身、子どもたちに会えないのは寂しいけどね。

――食事はどうしてるんですか？

ダン　自分で作ったり、外食したりだね。あんまり外食ばかりしてるとやっぱりお金がかかるから、なるべく自炊するようにしている。

――なんか、独身時代に戻ったみたいな感じですね。

ダン　まあ、メリットは自由に昼寝ができるくらいかな（笑）。

――いま1日はどんなスケジュールなんですか？

ダン　だいたい朝と夕方は練習してるね。たとえば今日だったら9時から11時までは近所でクロストレーニングをやって、17時からはジムで練習。でも、そのあいだはずっとフィルムスタッフがついてきてるから、ちょっと落ち着かないんだよね。

――ずっと追いかけてるんですか⁉　それではかなりストレスになりそうですねえ。ちなみに、収録の中で何が一番大変ですか？

ダン　とにかく時間を奪われるのが一番つらいね。たとえばここからジムまで片道30分運転するだろ。つまり、往復1時間。それを朝夕の2回やるから、まず移動だけで2時間は消費されるんだ。そのあいだにインタビューが入ったりするだろ？　だから時間がいくらあっても足りないんだよ。

――貴重なお時間をスミマセン！　でも

今年1月の『UFC93』で元UFC世界ミドル級王者リッチ・フランクリンを破り、『TUF』コーチの座を獲得したダンヘン。コーチ就任は自分のバリューを上げる絶好のチャンスのため、燃えている。

——『TUF』は、そういった犠牲を払ってでも出演する価値はありますか？

ダン もちろん、そうだね。『TUF』の出演だけを考えたら、それは時間と奪われるし出演料も安いんだけど、番組出演は自分の存在価値を高めることになるからね。今後いいスポンサーがついたり、次の契約更新のときにいい契約ができるというメリットがあると思ってるよ。

——『TUF』のコーチをやることによって、知名度が格段に上がり、タレントとしてのバリューも上がるわけですね。

ダン 極論を言えば、プロというのは「いかに有名になれるか」ということにかかってる。だから、存在をアピールできる場としてはいい仕事だよね。やっぱりファイターといえども人気商売だから。

——初代のコーチにはランディ・クートゥアーやチャック・リデルという有名選手でしたが、やはり多くのファイターは一度は『TUF』のコーチになってみたいと思うもんなのでしょうか。

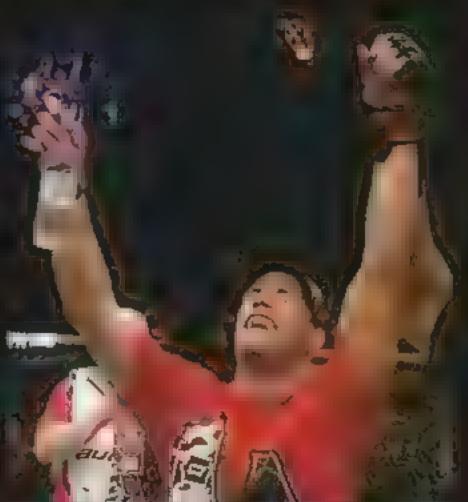
ダン それはファイターによって考え方が違うんじゃないかな。たとえば『UFC93』でコーチ就任権を懸けてオレと闘ったリッチ・フランクリンは以前にも一度コーチをやってるけど、彼自身はそれほどやりたいという気持ちはないみたいだったよね。でも今回はただのコーチというわけじゃなくて、「チームUSA」vs「チームUK」という対決だから、オレ自身は今回のコーチに就任するということには大きな意味があったんだ。

——では、コーチの就任権を懸けたリッチ・フランクリン戦はとくに気合いが入った、と。

ダン もちろんだね。それにコーチに選ばれるということは、今後UFC側としても、今後、その選手を売ってくんだという意味も含まれている。そもそも、『TUF』という番組はUFCを放映しているスパイクTVが関わっていて、スパイクTV自身もMMAに対してかなりの知識を持っているんだ。だからじつは、今回のコーチになる前からスパイクTVからコーチになってくれというオファーはあったんだよ。

——そうだったんですか。では、初めからアメリカ代表のコーチとしてダンがふさわしいという判断だったんですね。それはやっぱりオリンピックキャリアも関係してるんでしょうか。

ダン たぶんね。オリンピックに出場したということはオレ自身にとっても特別な経験だし、オリンピックでのオレのキャリアは今回の『TUF』のプロモーションとしても利用されている。だから、自分にとっても名誉だし、いいモチベーションになってるよ。

——今回の『TUF』はアメリカ人ファイターだけを集めた「チームUSA」とイギリス人ファイターだけを集めた「チームUK」ですが、国でチームが分かれるのは初めてですし、それだけでも注目度は高まりそうですね。なおかつ、アメリカ市場とともにヨーロッパ市場が爆発する可能性もありますし。

ダンヘン同様、『TUF シーズン9』でチームUKのコーチを努めているマイケル・ビスピン。イギリスで絶大な人気を誇るビスピンのコーチ就任はイギリス市場を考えてのことだろう。

ダン　それは間違いないだろうね。まあ『TUF』自体は以前からヨーロッパ地域でも観られる環境にあったけど、今回の「チームUK」にはますます注目が集まるだろう。それに、いまいるファイターは国を代表して試合をするということを経験したことがない選手ばかりだから、そういう意味では彼らにとってもいい経験になるんじゃないかな。

——ダン選手がコーチを務める「チームUSA」には将来有望な選手はいそうですか？

ダン　基本的にファイターはスパイクTVが人選してるんだけど、その中にも何人か凄くいいファイターがいるのは確かだね。オレのチームに限らず、「チームUK」もタフな選手が揃っているから番組的にもおもしろいと思うよ。

——コーチと生徒の関係は番組を収録している3ヵ月だけで終わるんですか？　それとも今後も続く場合もあるんですか？

ダン　過去の例でいうと、実際ショーが終わってからもコーチについてそのままジムに所属した選手もいるよ。

——じゃあ今回、ダンさんが有望な選手をスカウトすることもあるわけですね。

ダン　まあね。いまのメンバーには〝腐ったリンゴ〟みたいなファイターは一人もいないから、可能性としては全員が来たとしてもウエルカムだね（笑）。

——では、生徒たちはハングリーなファイターばっかりなんですね。

ダン　もちろん。なんと言っても『TUF』は若いファイターにとっては大きなチャンスだからね。だから、たとえ24時間、自分の周りでカメラが回ってたとしても、彼らにとってはこのチャンスをいかにものにするかというほうが重要だと思ってるだろうな。格闘技を自分の仕事として食べていきたいと思ってるヤツばかりだから、そっちのプレッシャーのほうが大きいし必死だと思うよ。

——そういう意味ではファイターとしての将来を相談されたりすることはありますか？

ダン　うーん、相談といっても、いまはテクニックのことが大半かな。だけど、将来ファイターとして成長するにつれて悩みも出てくるだろうから、もしかしたら相談される局面も出てくるかもしれないな。ただ、やっぱり常にカメラが回ってるから、個人的に相談するってことが難しいのかもしれないね。

——なるほど、選手もコーチも大変そうですねえ。『TUF』の番組自体は、出演者にアクター的な要素を求める場合もあるんですか？

Dan Henderson■1970年8月24日、米国カリフォルニア州出身。99年に第1回リングスKOKに優勝。PRIDEではウェルター級とミドル級の二冠を制した。180cm、84kg。

ダン　いや、それはないよ。スパイクTVはそんな演出はまったくしないんだ。だから〝リアリティショー〟なんじゃないか。

——看板に偽りなしですか。

ダン　カメラを通して自分たちファイターの普段の生活を見せるというのがこの番組なんだけど、ファイターによってはカメラを経験したことがない選手もいるから、普段より自分を表現しようとして過剰な言動をとったりする選手もいるかもしれないね。

——でも、放送が終わったときは、選手にとってもコーチにとっても違う人生が開けてくるんでしょうね。

ダン　もちろんファイターとしての自分にもプラスになるだろうし、はじめに言ったけど究極はもっと収入が増えるように期待してるよ（笑）。

——じゃあ、いまはミリオネアの入り口にいるという感じですか。

ダン　いや、最近はミリオネアを通り越して、ビリオネアになることを夢見てるんだ（笑）。

——さすが、夢がデカイですねえ！　最後に『TUF』でおなじみのコーチ対決（マイケル・ビスピン戦）はいつになりそうですか？

ダン　7月ぐらいじゃないか？　若いしタフだし、ここでの練習でもどんどん上達してるから、ビスピングと闘うのも楽しみだね。

——そういう意味では若いビスピングと経験豊富なダンとの対決は見どころですし、勝負どころでもありますね。

ダン　もちろんタフな試合になるだろうけど、ま、たぶんオレが勝つと思うよ。でもその前に、やっぱり4月から始まる『TUFシーズン9』に注目してほしいな。

【09年1月30日／米国ネバダ州ラスベガス郊外某所にて収録】

「TUF」のコーチ就任をきっかけにビリオネアになりたい

DAN HENDERSON

スーパースターへの登竜門 「TUF」歴代コーチ

【シーズン1】
チャック・リデル
ランディ・クートゥアー

【シーズン2】
マット・ヒューズ
リッチ・フランクリン

【シーズン3】
ティト・オーティズ
ケン・シャムロック

【シーズン4】
コーチ制度なし

【シーズン5】
BJペン
ジェンス・パルヴァー

【シーズン6】
マット・ヒューズ
マット・セラ

【シーズン7】
ランペイジ・ジャクソン
フォレスト・グリフィン

【シーズン8】
アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
フランク・ミア

【シーズン9】
ダン・ヘンダーソン
マイケル・ビスピン

〝キモ強〟北岡に続く〝戦極の申し子〟はこの男か！

戦極フェザー級GP 大本命・日沖発 こいつは本物だ!!

3.20 戦極～第七陣～ 代々木第二体育館

DREAMフェザー級GPに遅れること2週間、ついに開幕した戦極フェザー級GP。DREAMより2キロ重い65キロの実力者16名を集めて行なわれたこのトーナメントは、好勝負が展開されたが、その中でもとくにインパクトを与えたのが、エース格の日沖発。戦極フェザー級はこの男を中心に展開していく！

構成／堀江ガンツ　試合写真／

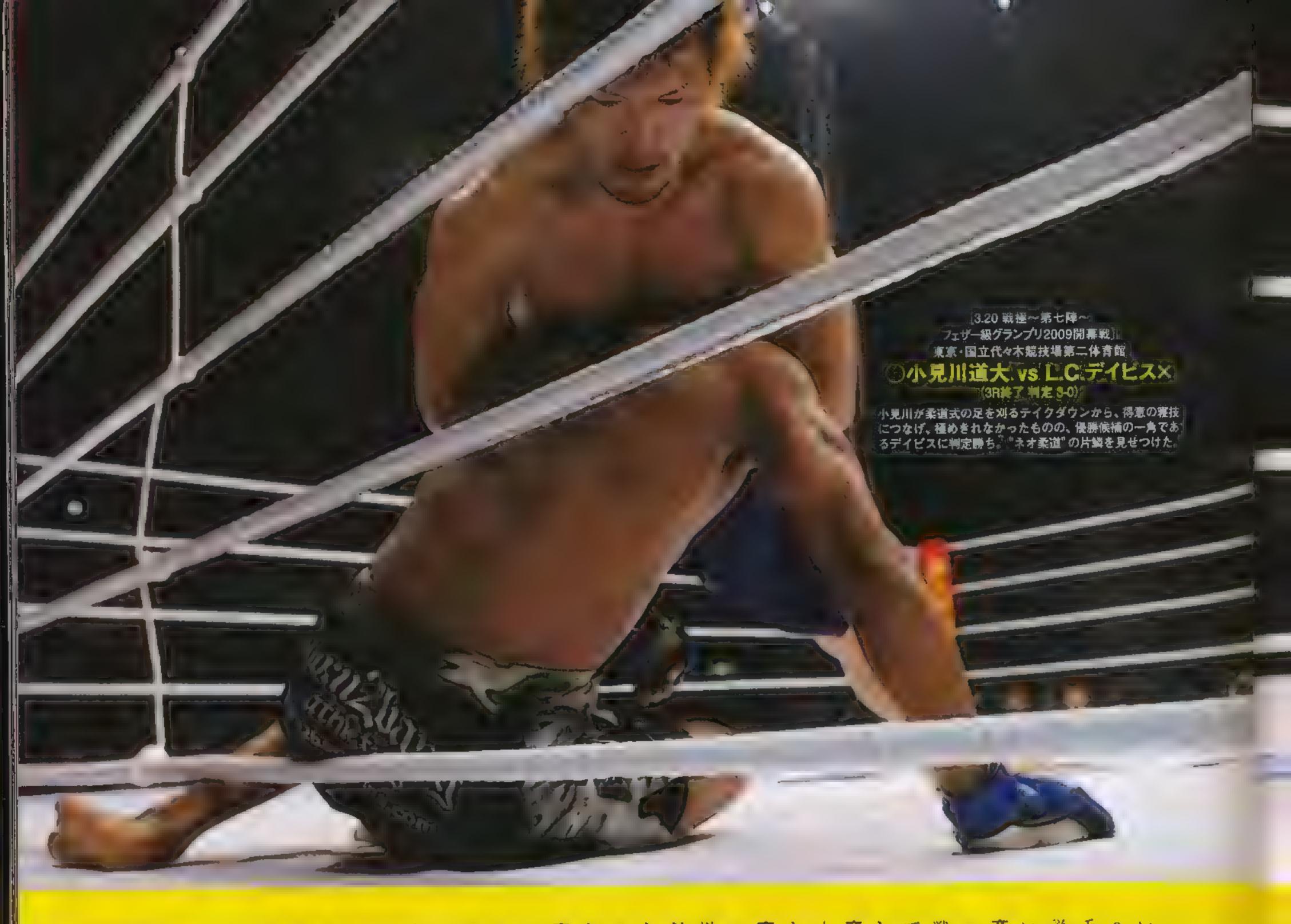
［3.20 戦極〜第七陣〜フェザー級グランプリ2009開幕戦］
東京・国立代々木競技場第二体育館
◎日沖 発 vs クリス・マニュエル×
（1R 4分12秒 腕ひしぎ十字固め）
戦極フェザー級のエース格、日沖が名門アメリカン・トップチームのクリス・マニュエルと対戦。日沖は終始グラウンドでコントロールし完勝。下馬評どおりの強さを見せつけた。

キーワードは「見切り」と「フィジカル」!!

“世界のTK” 髙阪 剛の 戦極 SENGOKU フェザー級GP プロフェッショナル解説

3.20「戦極〜第七陣〜」東京・国立代々木競技場第二体育館

【3.20 戦極～第七陣～
フェザー級グランプリ2009開幕戦】
東京・国立代々木競技場第二体育館
○小見川道大 vs L.C.デイビス×
（3R終了 判定3-0）
小見川が柔道式の足を刈るテイクダウンから、得意の寝技につなげ、極めきれなかったものの、優勝候補の一角であるデイビスに判定勝ち。"ネオ柔道"の片鱗を見せつけた。

日沖はスタンドから寝技への移行のバランスが完璧だったと思いますよ

さて、戦極フェザー級GP1回戦がいまさっき終わったばかりですけど、『kamipro』読者にはなじみの薄い選手が多かったんで、プロフェッショナル解説者に総括を丸投げしちゃおうかな、ということでうかがいにきました（笑）。

高阪 ワシに丸投げかい（笑）。

よろしくお願いします（笑）。まずは戦極フェザー級のエースとして期待されている日沖選手ですけど、まさに圧勝でしたよね？

高阪 圧勝ですね。

――日沖選手はどこがとくに優れていたと思いますか？

高阪 これは日沖に限らずなんですけど、いま試合のやり方として、とくに寝技を仕掛けたときに極まらなかった場合、どこで見切りをつけるか、ということがポイントとしてあるんですよ。

――極まらなかったときの切り替えができるかどうか。

高阪 そうです。寝技を仕掛けてダメだったあと、相手にいい体勢に持っていかれる前にスタンドに戻すなり、スイープするなり、なんらかの対処をしなきゃいけないんですね。で、日沖はそこのバランスが凄く良かったですね。技を仕掛けて失敗してガードになった状態っていうのは、バウンドに対して凄く脆いんです

――このあいだのDREAMでは、石田光洋選手と対戦した中村大介選手がそんな感じでしたよね。極めきれずにポジションが悪くなり判定負けという。

高阪 そうです。極めるためにはしつこくいくことも大事なんですけど、でも総合の試合ではどこで見切りをつけるかが重要になってくるんですよ。日沖はその見切りのタイミングがよかった。最後も腕十字を切り返されそうになったところを、すぐにもう一度マウントに体勢を戻して、最後は三角からもう一度腕十字という勝ち方。これが凄くよかった。結局、技をつなげる動きと、途中でやめる勇気の両方が凄く大事になってくるんですよ。

――なるほど。極めるためには、一度仕掛けた技をあきらめて、次にいくことも大事だ、と。

高阪 日沖はそのへんのバランスが凄くとれてる印象を受けました。前に修斗で（佐藤）ルミナくんとやった試合なんかもそうでしたし、自分の中で微妙な力の加減とか、ペース配分がわかってるんだと思うんですよ。試合をやりながら、相手が窮地に追い込まれていっているのが、肌感覚でわかるんでしょうね。頭で考えるというより、先に身体が動いている。フェザー級っていうのは、一瞬タイミングが遅れただけで命取りになりますから、その先に動くってことが凄く大事なんですけど、日沖はそれができてましたね。

――なるほど。では優勝候補と言っていいですかね？

高阪 今日の試合を見る限りはそうですね。スタンドからの寝技への移行のバランスとか、完璧だったんじゃないかな。悪いところは見当たらなかったですね。

［3.20 戦極～第七陣～
フェザー級グランプリ2009開幕戦］
東京・国立代々木競技場第二体育館
○金原正徳 vs キム・ジョンマン×
（3R終了 判定 3-0）
ZST最強の男、金原がDEEPでも活躍するジョンマンのスタンドでの圧力をいなし、効果的に打撃をヒットさせて、フルマークの判定勝ち。同じZST出身の山田は敗れたが2回戦進出。

［3.20 戦極～第七陣～
フェザー級グランプリ2009開幕戦］
東京・国立代々木競技場第二体育館
○ナム・ファン vs 門脇英基×
（1R 3分9秒 TKO）
「戦極」の国保広報がどうしても出場させたかったという門脇がベトナム人ファイター、ナム・ファンと対戦。門脇は得意の寝技に持ち込みたかったが、ナムのフックでKO負けを喫してしまった。

小見川は今日みたいな闘い方ができたら、かなり上までいきますよ

――日沖が前評判どおり、大本命に躍り出た、と。そして小見川選手も一皮剥けた感がありましたが。

高阪　今日の小見川は良かったですよ。じつは小見川に必要だったのは、今日、日沖がやったような動きなんですよ

――技に見切りをつけて、次の動きにいくことが必要だったわけですか

高阪　それが今日はできてましたからね。小見川って、今大会出場している日本人選手の中で、唯一、フィジカルで外国人選手に勝てる男なんですよ　ほかの日本人選手は、技で上回っているのに、力で防がれている場面が何回もありましたよね？。

――スイープというより、「よっこいしょ」って感じでひっくり返されたりしてましたよね。

高阪　そう　技の名前が「ひっくりがえし」としか言えないような力任せだが、外国人選手はできちゃうんですよ。でも、小見川はフィジカルで相手に勝って、なおかつ試合のやり方も今回は良かったんで、自分は凄く嬉しかったですね。

――ようやく持ち前のパワーを試合の中でうまく使えるようになった、と。

高阪　たとえば、ガード（ポジション）から、フロントチョークからストレートアームバーにつなげる小見川の技があるんですよ。それを2ラウンド目にやって極まらなかったんですけど、すぐに蹴り上げを使って立ち上がりましたよね。小見川にはあれが必要だったんですよ。

――あのままガードにいたら、パウンドの餌食になるか、不利な時間が続いていた可能性もあるわけですよね。

高阪　だから結局、そこで見切れるかどうかです。勝つためには相手にいいポジションを絶対取らせないように、攻め方をリセットすることが大事になってくるんですよね。3ラウンドも同じ技で極めきれないときに、すぐにスイープで返したましたよね。この動きを観たとき「一皮剥けたな」と思いましたね。以前の小見川だったら、あそこで頑張って頑張って伸ばして取ろうとするあまりに、結局ガードの状態になって。しかも攻めきったあとのガード、というより仰向けの状態なんで、パンチのディフェンスとかしづらいんですよね、疲れちゃってて。

――そこでダメージを負っていた、と。

高阪　だから疲れる前に返して上を取る、自分の身体の中でそれが昇華できてたって印象があったんで。頭じゃなくて身体がちゃんと動きだしてる。なおかつフィジカルでも勝ってた。小見川は今日みたいな試合ができるなら、けっこう上位にいけると思いますよ。何度も言うけど、なんといってもフィジカルが強いから。やっぱりフィジカルって重要なんですよ。

――スポーツですからね。

高阪　結局、相手の技を潰し合う試合だったりとか、そういう展開にもしなったら、フィジカルが強くないと、なんともできないんですよ。そのフィジカルが強い小見川っていうのは、今大会の台風の目になるんじゃないかな。なんせフィジカルが強い。

【3.20 戦極〜第七陣〜
フェザー級グランプリ2009開幕戦】
東京・国立代々木競技場第二体育館
◎ロニー・牛若 vs 山田哲也×
（3R終了 判定 3-0）
"高校生ファイター"山田が、卒業直後にGPにエントリーし、イギリスのロニー・牛若と対戦。山田は果敢にサブミッションを極めにいったが極めきれず、惜しくも判定負けを喫した。

【3.20 戦極〜第七陣〜
フェザー級グランプリ2009開幕戦】
東京・国立代々木競技場第二体育館
◎ニック・デニス vs 川原誠也×
（1R 2分36秒 TKO）
パンクラスのケンカ屋、川原がKOTKカナダ王者のデニスに果敢に打撃戦を挑むが、ハイキックと右フックで二度のダウンを奪われ、最後はパウンドの雨を降らされTKO負け。

やっぱりフィジカル（笑）

高阪　逆に考えると、今回負けてしまった川原くん、石渡くん、山田、門脇なんかは、どちらかというと試合をコントロールしているんだけど、相手のほうがフィジカルで上回っているから、最後の一押しができなかったんですよね。

　とくに山田選手なんかは、いい仕掛けをたくさんしてましたけどね。

高阪　だけどそれを全部力で潰されちゃってるんですよ。あとは技を仕掛ける前の段階で、やらせないようにされてたりとか。だから凄くもがいてましたよね。身体の強さの違いっていうのはいかんともしがたいんですよ。それを乗り越えて、試合で力を発揮するというのはなおさらですよね。

　――日本人でもう一人勝ち上がった金原選手はどうでした？

高阪　今日の彼はスタンドが良かった。総合の試合の中で、相手の技や身体の強さを消せる試合ができていたんですよ。相手の力を正面から受けずにさばくのがうまくて、相手を疲れさせるんです。キム・ジョンマンなんか相当力強いし頑丈な選手だから。

　――力を逃がすのがうまいんですね。

高阪　そして逃がしたところで、自分の技を差し込むというね。あとハイキックをうまく当ててましたよね。あれはガッチリ踏み込んで蹴るというより、ちょっとだけ足を返して振り上げるみたいなハイだから、相手にもわかりづらいんですよ。力を逃しながら、ああいう攻撃ができるっていうのは、身体のバランスのとり方をよくわかってるということですよね。

　あと印象に残ったのは？

高阪　第一試合に出たニック・デニスと門脇とやったナム・ファンかな。身体の圧力の違いが出てましたよね。とくにナム・ファンの打撃はおもしろくて、最後はオーソドックスからサウスポーにスイッチして、右のフックを当ててるんですよね。ああすると腕が凄く伸びる感じになって、遠い間合いからでも当たるんですよ。彼がやってたベトナム空手にああいう動きがあるんじゃないかな。彼なんかおもしろい存在ですね。

　――マルロン・サンドロの寝技もおもしろかったですね。

高阪　そうですね。彼なんかは見切りプラス相手の動きに合わせて技を差せるタイプなんですよ。テイクダウン取ったからって、上のポジションに固執してない。返されても、返されてもそこから攻撃を仕掛けていける。

　――最後は相手が立ち上がったのに、肩固めを極めちゃいましたからね。

高阪　あれはなかなか極められませんよ。普通、スタンドだとうまくクラッチできないんですけど、フェザー級という軽いクラスなんで、相手の身体も細いから、クラッチができたんでしょうね。あと身体も微妙にうまくズラして、取りやすい方向に持っていってますよね。だから極まるんですよ。

　スタンドの肩固めって、藤田和之選手がプロレスでよく使ってるのは観たん

外国人選手のフィジカルの強さが全体を通じて非常に目立ちましたね

［3.20 戦極～第七陣～フェザー級グランプリ2009開幕戦］
東京・国立代々木競技場第二体育館
◎ジョン・チャンソン vs 石渡伸太郎×
（1R 4分29秒 チョークスリーパー）
GUTSMAN修斗道場の石渡がMMA8戦無敗のチャンソンに挑んだが、左ストレートでヒザが落ちたところでバックに飛びつかれ、そのままチョークで絞められ、たまらずタップ。

［3.20 戦極～第七陣～フェザー級グランプリ2009開幕戦］
東京・国立代々木競技場第二体育館
◎マルロン・サンドロ vs マット・ジャガース×
（2R 2分57秒 肩固め）
パンクラスフェザー級王者のサンドロが、名前がカッコいいKOTC世界フェザー級王者ジャガースと対戦。激しい寝技の攻防となるが、最後はサンドロがスタンド肩固めを極め勝利。

微妙なバランスをしっかりと定着できたら日沖の本命は揺るがない

ですけど、MMAで極まるの初めて見ましたよ。

髙阪　ほう！　藤田に習ったのかなあ？

――そんなわけないと思います（笑）。では、1回戦が終わって8名が2回戦進出した中で、本命と対抗を挙げると誰になりますか？

髙阪　本命はやっぱり日沖でしょうね。今大会は外国人のフィジカルの強さっていうのを見せつけられた試合が多かったんですけど、日沖はフィジカルが強い相手でも、それをゼロにしちゃう試合のやり方を体得してますんで。だから力でねじ伏せられるってことはまずないですね。技によって、フィジカル負けしない闘いができる、と。

髙阪　ただ、一つ心配なのは、日沖って自分が観てる限り、けっこう調子の波があるんですよ。攻撃の総合的なバランスが今日は凄く良かったんですけど、そのバランスが絶妙なだけに、ちょっと崩れると総崩れになることもあるんですよね。この絶妙感をしっかり定着させて、今日やった感じができるならば、本命は揺るがないと思いますけどね。

――では対抗は？

髙阪　対抗はね……けっこう横並びではあるけど、今日みたいな試合ができるなら、小見川って言ってもいいんじゃないかな。

――それぐらい赤丸急上昇な感じがありますか。

髙阪　今日みたいな闘い方ができれば絶対勝てるのにって、自分はずっと思ってたんですよ。今日出していたガードからのストレートアームバー、じつは練習だとかなり極まるんです。だけど実際試合になったら極めきれないことのほうが多いので、いままではそれで逆に相手の攻撃もらってしまっていた。でも今回はちゃんとその対処、切り替えができてたんで。もう一回、試合を観たいなって思った人も多かったんじゃないかな。

――では、2回戦はゴールデンウィーク中の5月2日（代々木第二体育館）ですから、初めて会場に足を運ぶファンもいるかもしれませんが、フェザー級GPに関しては、この二人にまず注目したほうがよさそうですね。

髙阪　そうですね、注目してほしいですね。ほかの試合も1回戦より2回戦のほうがおもしろくなると思いますよ。勝った選手がバラエティに富んでますからね。動きで魅せる選手、一発で倒せるヤツ、フィジカルが強いヤツ、寝技が強い選手に、おもしろい打撃ができる選手……。いろんな組み合わせが考えられるし、けっこうおもしろいことになると思います。

――では、戦極フェザー級がなんとなくわかってきたところで、また次回もお願いします！

【09年3月20日　都内・代々木第二体育館にて収録】

TKインフォメーション

4月16日から5月いっぱいまでTKオフィシャルジム「ALLIANCE-SQUARE」では設立記念日キャンペーンとして入会金を無料！　この機会をお見逃しなく！
また、4月からはジムリニューアルの一環として月曜～金曜の20時から初心者や女性にでも気軽に運動していただけるクラスを増設しております！　初回は無料でご参加いただけますので、気軽にご利用ください！
詳細はalliance-square.jpまで！

3.20 戦極～第七陣～ TOPICS

休憩明けに北岡がリングに登場。マイクを握るとはしばしに北岡節を交えながら、8月の『戦極』でライト級王座防衛戦を行なうことを発表した。

［3.20 戦極～第七陣～戦極ライトヘビー級ワンマッチ］
東京・国立代々木競技場第二体育館
○キング・モー vs 川村 亮×
（3R終了 判定 3-0）

いまや『戦極』のガイジンエース格となったモーに、パンクラス期待の川村が挑んだが、モーのタックルの嵐に思うような展開が作れず判定負け。モーはヒザのケガもあり、判定に持ち込まれたのを悔やんだ。

休憩前には五味隆典も登場。「5月10日の修斗のJCBホールで中蔵（隆志・修斗世界ウェルター級王者）選手との試合が決まりました」と、ひさびさとなる修斗参戦を自ら発表した。

［3.20 戦極～第七陣～戦極ヘビー級ワンマッチ］
東京・国立代々木競技場第二体育館
○BIG・ジム・ヨーク vs ジェームス・トンプソン×
（1R 4分33秒 KO）

PRIDEでおなじみのトンプソンさんが、公明正大な『戦極』のリングに登場！　いつものゴング&ダッシュを見せてくれたが、クロスカウンターをモロに食らってKO負け。期待どおりの大味な試合だった。

フェザー級GP2回戦開催！
『戦極～第八陣～』
東京・国立代々木競技場第二体育館
5月2日（土）開始14:00 開始16:00

出場予定選手
日沖 発　小見川道大／金原正徳
マルロン・サンドロ／ロニー・牛若
ニック・デニス　ジョン・チャンソン　ナム・ファン

・チケット料金・
全席指定・消費税込
最前列VIP席 70,000円 ※専用入場ゲート・特典つき
VIP席 50,000円 ※専用入場ゲート・特典つき
RRS席 25,000円　SS席 17,000円
戦極シート（SS席）17,000円
※特典付き　S席 12 000円　A席 7,000円
※1歳以上のお子様も入場券が必要です。

お問い合わせ
ワールドビクトリーロード TEL.03-5381-7108

突然ですが、日沖選手って試合でも記者会見でもいつも冷静沈着なイメージがあるんですよ。あんまり感情を起伏することってないんですか？

日沖　いえいえ、そんなことないですよ。試合になると凄く緊張してますし。でもプライベートで頭にくることとかあってキレたりもしなさそうですよね

日沖　そうですね、あんまりキレないですね（笑）。あまりめったに怒まないです。

——そういう日沖選手の佇まいを見ていると、凄く求道者っぽい感じがするんですけど、ご自分ではどう思っています？

日沖　いやあ、そんなにカッコいいもんじゃないですよ。練習がキツいのはもちろんなんですけど、その中に楽しさもありますし、そんなに修行僧みたいな生活を送っているわけじゃないです

——わかりました。では昨日の試合からを振り返ってもらいたいんですが、本当に完璧な勝利だったと思うんですけど、もし自己採点するなら何点ぐらいですか？

日沖　うーん……80点ぐらいですね。昨日の試合のプランの中では満足ができる試合だったと思います。

——どんな試合をしても100点になることはないと思うのですが、残りの20点はどんなところが足りなかったと思います？

日沖　観ている人からすると、僕が相手のディフェンスに合わせて展開があったと[illegible]手のディフェンスが良くて、ポジションを戻されたり、立たれたりといった場面があったじゃないですか。僕は相手を抑える技術には自信があるんですけど、そこで何度かエスケープされてしまったわけですから、そこをキッチリ闘っていれば、観てい

戦極フェザー級GP優勝候補大本命の
15歳から歩んだ一途な道

「65キロで世界最強になる。その目標は簡単に変えられない」

戦極フェザー級GP1回戦ではATTのクリス・マニュエルに何もさせずに圧勝した日沖。大会ポスターやパンフレットに[illegible]たフェザー級のエース候補はその名に違わぬ活躍を見せた。そんな日沖が『kamipro』に初登場！　優しめのビジュアルと落ちついた口調から穏やかなイメージの日沖だが、格闘技に対しては絶対に譲らない強いこだわりを持つ頑固者。日本が誇る軽量級の至宝がここにあり！

もっと完封できたのかもしれません

——これは最近、青木真也選手が言っていたことなんですけど「自分は攻めて守っての攻防からの試合じゃなく、相手を最初から圧倒して勝つ試合がいい試合だ」と。日沖選手は青木選手とも練習していたこともあると思うんですが、この青木選手の意見にはシンパシーを感じますか？

日沖　お客さんの目線で言えばシーソーゲームのほうがおもしろいかもしれません。でも僕個人は、青木選手と一緒で最初から最後まで圧倒して勝ちたいです。試合でシーソーゲームになるとやっているほうは、消耗するんですよ。だから自分のペースで闘って相手を圧倒すればスタミナもロスしないじゃないですか。

——その中でもプロファイターとしてお客さんが盛り上がるおもしろい試合をしたいという気持ちはあるんですよね？

日沖　もちろん「あります」。でもそれはパフォーマンスやショー的な意味ではなくて、結果としておもしろくなってくればいいなということなんですよ。だから僕の中での優先順位では勝負が第一。その上で欲を言えばおもしろい試合になればいいなという考えです。

——それは舞台が大きくなっても、絶対に譲れない部分ですか？

日沖　譲れないです（即答）。それはファイターとして譲れないです。僕はプロレスラーではないですから。

——今回は『kamipro』初登場ということで、日沖選手がどんな人物かというのを振り返ってもらいたいんですが、日沖選手は高校には行かずにずっと格闘技一本でやってきたんですよね。でもどう見

『不死身のエレキマン』
ェルター級GPを
ハだ!

4.5『DREAM.8』から、いよいよDREAMウェルター級GPが開催!
しかし、現在3月22日深夜の時点で1回戦の組み合わせは、なんと1試合しか発表されてない!
大会まで2週間を切ってるのに、どういうことだ。ホントにGPは開催されるのか!?
いや、この際、極端に言えば中止になってしまったって構わない。1試合だけ発表されたカードは、
ある意味、ウェルター級GP以上に熱いカードだからだ。
青木真也vs桜井"マッハ"速人!
90年代から総合格闘技の中量級を牽引してきたカリスマに、自称"DRAAMの大黒柱"が挑むこの一戦は、
間違いなく、やや閉塞感を感じる現在のマット界を解放し燃え上がらせるであろう。
"バカサバイバー"と"不死身のエレキマン"が会場に流れたそのときから、男の祭りは始まる!
この熱き一戦にはもう事前の公開練習も必要ない!!

4.5『DREAM.8』日本ガイシホール
『バカサバイバー』vs『不
DREAMウェル
超えた闘い

――世の中不況で大変ですけど、マッハさんはどうですか？

マッハ　不況？　あんまり関係ないけどね。どうせ、財布にはいつも1000円ぐらいしか入ってないから。

――あんまり持ち歩かない？

マッハ　よく落とすんですよ。珍しくお金が入ってると、必ず落とす。もう決まってるんですよ。返ってくる確率も高いしね。

――というと？

マッハ　お金が入ってない財布は返ってくるんだけど、たくさん入ってると、足がつくと思うのか、返ってこないんですよね。

――まあ、みんな現金ですからね。さて、そんな不況も吹き飛ばすようなカード、青木真也戦がDREAMウェルター級GP1回戦（4・5名古屋）で行なわれることになりました。青木選手の参戦発表の時点から、「ヤケクソなんじゃないの？」と厳しい言葉を向けてましたよね。

マッハ　だってヤケクソじゃないですか。青木選手はライト級でしょ？　ライト級の選手がいきなりウェルター級に出て、勝てるとは思えないからさ。

――オレの階級に出てきやがって、みたいな気持ちもありますか？

マッハ　ほかの日本人も強いですからね。白井（祐矢）選手も池本（誠知）選手も。まあ、ただの1回戦としか見てないですよ。事実上の決勝戦だなんて、思ってないですから。

――4年前に対戦していますが、そのときとはまったく違う？

マッハ　あのときは確かに彼も（修斗の）ミドル級だったけど、いまは修斗でいったらウェルター級じゃないですか。そんな上げたり下げたりね、ボクシングの6階級制覇じゃないんだから、甘く見るなと。

――マッハさん自身も『PRIDE武士

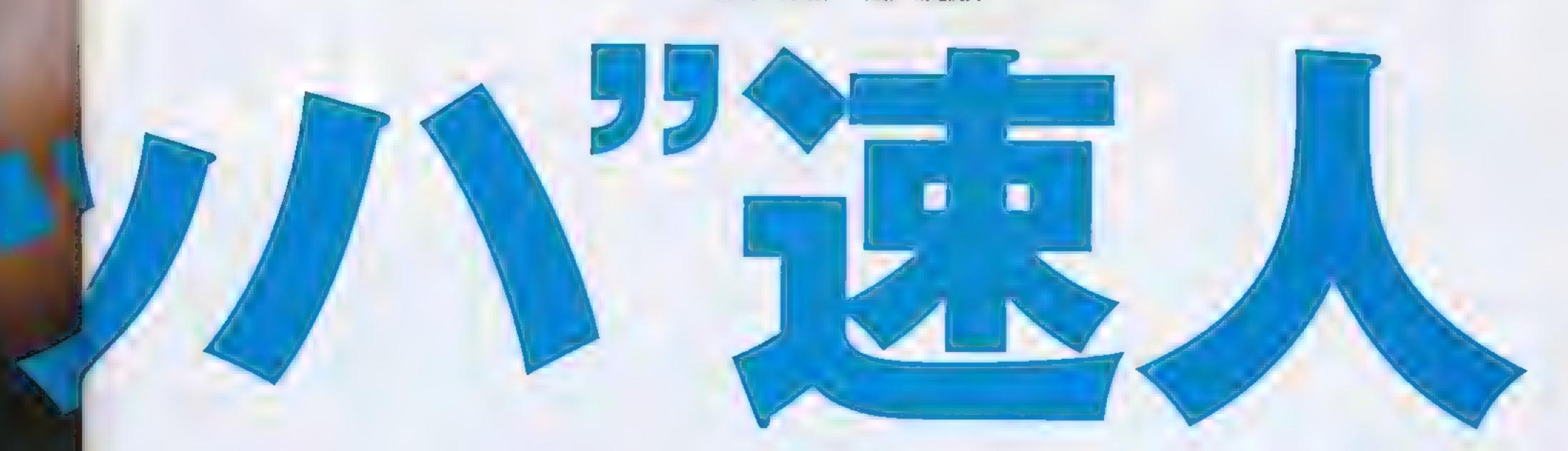
DREAMウェルター級の“大黒柱”が青木真也をメッタ斬り!!

大黒柱一本じゃ家は支えられない。おまえだけが柱じゃないから、安心しろって

DREAMウェルター級GPは、初っ端から激アツ！　1回戦からいきなり切り札ともいえるカード「桜井“マッハ”速人vs青木真也」が決定した！
「事実上の決勝戦」との下馬評も高いこのカードを前にマッハに話を聞いてみると、意外な発言が次々と……。青木の参戦会見では階級を上げての挑戦に「ヤケクソじゃないの？」と冷ややかだったマッハだが、じつはマッハ自身が忘れきっていた“過去”もほじくり出した！

聞き手　高崎計三　撮影　菊池茂夫

HAYATO "MACH" SAKURAI

桜井"マッ

道』の初期の頃、83キロに上げて苦労してましたよね。その苦労を知っているからこそ、「甘いもんじゃないよ」という気持ちがあったりしますか？

マッハ　あっ！……オレもやってたなあ。

——あ、忘れてましたか（笑）。

マッハ　やってた（笑）。じゃあ、いま言ったこと全部……うーん……。

　青木選手の挑戦も許せる気持ちになってきましたか。

マッハ　まあ、彼も若いからさあ。

——方向性が変わった（笑）。

マッハ　彼が何歳のときに総合始めたか知らないけど、オレも17歳のときから殴ったり蹴ったりやっててさあ、彼は20歳ぐらいからかな？　まあ、オレもそういう頃もあったよね。

——いきなり軟化しましたね。

マッハ　あ、オレのときは階級がなかったんだよ！　いまみたいに分かれてなかったんだよ！

——『武士道』に出るにはその階級に合わせるしかなかったですからね。事情が違う、と。

マッハ　そうそう（笑）。

——よかったよかった（笑）。では話を戻すと、DREAMではウェルター級は今回が初めてのGPになります。その意味で、これまでの長いキャリアの集大成というような意識はありますか？

マッハ　集大成ねえ。オレ、上だけじゃなくて下も見てるからさ。オレもさ、17歳のときに始めて、トーワ杯のときに高校生のオレでも優勝したら賞金500万円くれるっていうから、金に目がくらんで格闘技の道に入ったんだけど、それからずっと上しか見てなかったわけよ。だけど、いま若い子たちに揉まれながら格闘技を続けてきて、下も見られる立場になってきてね、その17年の集大成っていうかさあ。なんだろうね、もう言葉じゃないですよ。やるだけですよ！

——いきなりまとめましたね（笑）。

マッハ　彼も新しい技術を取り入れて、いろいろやってるけどさ、新しい技術も結局は古くなるからね。いまは新しいけど、どんどん下から新しい子が出てきたら、古くなってくるもんじゃないですか。それから彼がね、こんなふうに残っていけるかっていったら、わからないじゃないですか。だから、それをわからせてやりたいですね。その古い技術を使うなと。……その古い技術でやられたりしてね（笑）。わかんないからなあ、試合だから。

青木真也のウェルター級GP出場決定会見では「ヤケクソなんじゃないの？　勝とうと思ってるのかね？」と発言したマッハだったが、対戦決定会見では「いつもどおりKOで勝ちます」と短くコメント。すでに戦闘モードだ。

青木戦はただの1回戦。事実上の決勝戦だなんて思ってないから

——どっちなんですか（笑）。

マッハ　そういうことを、言葉で言うことはできないけど、見せたいですよね。

——下も見られる立場になったということですが、今回の青木戦もそうだし、門馬（秀貴）戦、長谷川（秀彦）戦と……。

マッハ　みんなオレとやりたがるんだよね。全日本選手権ですよ！　日本人ばっかりだもんね。こないだの大晦日も柴田（勝頼）選手だし。ホント日本人ばっかりだね！　でもいいけどさ、おもしろいから。

——おもしろいですか。

マッハ　未知の領域だからね、やったことないんだもん。やってみりゃいいんだよね、誰が一番強いんだって。

——で、オレだろうと。

マッハ　ぶっちゃけ、オレだと思うね。

——ダハハ！　ぶっちゃけましたね。

マッハ　いや、青木選手じゃないと思う。彼はうまいと思うけど、強いとは思わないんだよね。技術で勝ってるだけで、人間力で勝ってるわけじゃないんだよ。……彼の批判ばっかりしてますけど、素晴らしいところもあるんですよ。

——どうしたんですか、急にフォロー始めて（笑）。

マッハ　素晴らしいと思いますよ、常に新しい技術を取り入れてね。自分の道を作ってさ、オリジナルで。でも彼も常にそうやっていかないといけないから、大変だと思いますよ。

——道を作るということで言えば、マッハさんのキャリアも総合格闘技自体ができてくる道だったわけですよね。

マッハ　そうだね。TOPS作って、川尻（達也）選手や石田（光洋）選手もいまはあんなになったけどね。

——自分がやってきた経験は違うぞというところがある？

マッハ　経験が違うのは誰の目から見てもあきらかでしょ。だけど彼は新しさってところでチャレンジしてるからね。

——人間力という言葉が出ましたが、マッハさんの強さはいつも「理屈抜き」という印象が強いですよね。

マッハ　細かいことできないからさあ、オレ。細かいことができないってところで、あと何年やれるんだってずっと言われてきて、そこから10年以上経ってるわけでしょ。それだけできてるんだから、身体能力の衰えもないんでしょうね。

——自分で力の衰えを感じたりすることはないですか。

マッハ　そうですね。……まあ酒飲んでさあ、すげえ酔っぱらって、記憶がなくなるってことはありますけどね。

——それは衰えなんですか（笑）。記憶をなくすのが早くなってきたとか？

マッハ　そうっすね。でも量はすげえ飲むんで、まだだいけますけどね。（インタビュー場所の）この店にもすげえ迷惑かけてるんだよな（笑）。

——違う話になってますよ！　練習とかで衰えを感じたりすることはないわけですか？

マッハ　いや、そういうふうにやってるう

ACH" SAKURAI

青木選手はうまいけど弱いヤツには負けない。人間力で勝ってないんだよ

05年8月に修斗のリングで一度だけ実現しているマッハvs青木。このときはマッハが判定で青木を下したが、大物マッハ相手に互角の攻防を展開した青木も評価を上げた試合だった。DREAMでの再戦はどうなるか？

HAYATO "MAC

ちは大丈夫じゃないですか。全然感じたことはないですよ。

――酒が飲めるうちは大丈夫、と（笑）。

マッハ　パンチもそんなに効いたことねえし。

――そんなマッハ選手をどうやって攻略したらいいんだってのは、相手の選手にはありますよね。

マッハ　まあそういう勢いでね、次も頑張りたいですね。

――青木選手はDREAMの大黒柱を名乗って、「全試合に出たい」とか、「DREAMを背負う」ということを強く意識してますよね。マッハさんはその部分ではどうですか？

マッハ　それはオレも同じですよね。やっぱ、修斗の頃から同じですからね。大黒柱ってさあ、1本だけじゃ、家でもなんでも支えられないんですよね。そんな一本の大黒柱で何ができるんだっていうことですよ。だから、おまえだけが大黒柱じゃないから安心しろって感じですよ。

――なるほど（笑）。オレも立ってるぞ、と。マッハさんと青木選手、川尻選手、石田選手の4人は「やれんのか！組」みたいな見られ方ってあるじゃないですか。そのへんでの仲間意識というのは？

マッハ　まあ仲間意識はあるけどさ、試合になったら別だよ。やるしかねえんだから。

――ウェルター級GP、他の日本人選手についてはどうですか？

マッハ　白井選手はトータル的にバランスが凄くいいしね、池本選手は凄く打撃が強いし。侮れないんじゃないですか、それぞれに。白井選手のほうがバランスいいと思うけどね。（同席した広報に）外国人は誰が出るんですか？

広報　（申し訳なさそうに）まだ発表してないんです……。

――……という状況については？

マッハ　まあ、いま世界ではさあ、ウェルター級って「神の階級」ってキャッチフレーズがありますけど、UFCもウェルターの選手をどんどん集めてるじゃないですか。なかなかねえ、難しい階級ですよ。

――UFCのウェルター級も注目されている中で、DREAMのウェルター級もそれに匹敵するというか、超えるものを見せなきゃいけないという意識は？

マッハ　見せなきゃいけないって意識はないけど、勝たなきゃいけないっていう意識はありますね。

――UFCに？

マッハ　いやいや、対戦相手に。それが結局、そういうパフォーマンスになるんだよ。

――PRIDEがなくなってからとくに、「UFCが素晴らしい」「アメリカが素晴らしい」という意見が大勢を占めてますが、日本で闘っている身からしたらどうですか？

マッハ　いや、素晴らしいのは素晴らしいんだよ。だけど、どこどこと比べて、ってのは言ってないでしょ？　素晴らしいは素晴らしいでいいんじゃないですか。PPVもかなりの数を獲ってるし、素晴らしいですよ、エンターテインメントとして。

――その一方でDREAMは？

マッハ　これからじゃないですかね。まだ作ってるところでしょ。

――ちょうど1年経ったところですが、DREAMになってみてどうですか？

マッハ　……まあぶっちゃけ、PRIDEのほうが好きですけどね（笑）。

――それもぶっちゃけですねえ、ホント。

マッハ　いや、PRIDEを味わうと、すべてが違う気がするんですよね。世界最

高の格闘技エンターテインメントはPRIDEでしたね。それは本当に思いましたよ、やってみて。だけど、なくなっちゃったから、しょうがないっすよね。

――なくなったのは残念ですけど、いまの状況で前を向くしかないですからね。

マッハ　でも、やることは一緒ですけどね。踏みつけがないだけで。オレ、そういうところが好きだったんですよね。バイオレンス的なものが好きだから。

――あ、そこがポイントですか。でもマッハさんに踏みつけのイメージはそんなにないから、意外ですね。

マッハ　なんでもあり系が好きだから。（以下、シウバvs近藤戦でのシウバの踏みつけについて熱弁を振るうものの、申し訳ないですが割愛）でも、アレも何年も前だもんなあ。やっぱりねえ、PRIDEは熱が違いましたよ、会場の。

――それも、DREAMがこれから作っていかないといけない部分ですよね。

マッハ　いや、その時点でのエンターテインメント性の話なんですけど……でもおっしゃるとおりですね、作っていかないと。ダン、ダン、ダダン！ってね。

――それじゃPRIDEそのままじゃないですか！　熱ということで言うと、先日のフェザー級GPはいかがでしたか？

負けてうなだれる青木に手を差し伸べるマッハ。このときから3年半。青木は知名度、実力ともに大きく上げているが、はたしてどんな試合になるのか。激しい攻防になることは間違いない。

PRIDEこそ最高の格闘技イベント DREAMも作っていかないとね

マッハ　ちょっとインパクトがなかったよね。やっぱり、KIDが出ないとダメなんじゃないですか？　ほかの選手たちも頑張ってたから申し訳ないんだけど、やっぱ新しい階級ってそういうもんですよね。いい選手たちなんだけど、みんな知らないから。みんな表に出てないから、その意味では経験がないじゃないですか。だからはじめだけでもKID選手みたいにインパクトのある選手が出て、それに周りが便乗してっていうかたちだったらよかったんでしょうけどね。凄くもったいないですけどね、みんないい選手なのに。そういう意味で試合のインパクトが出なかったっていうのはね。

――その中でウェルター級は、マッハさんが軸にいることはもうあきらかですけど、全体像はまだこれからって感じですよね。

マッハ　そうだね。ウェルター級の日本人って少ないですよね。『戦極』でもウェルターやってるのに、誰もいないもんね。

――郷野選手や長南選手がUFCに出ているのと、最近は階級を落とす選手が多くなってますからね。

マッハ　それ問題っすよね。昔、オレが修斗やってる頃はミドルとウェルターが一番多かったのにね。それは、はじめに作らなかったのがいけなかったのかねえ。オレだって、上げざるをえなかったんだから。

――忘れてましたけどね（笑）。

マッハ　昔のことは忘れちゃうんですよ。未来しか見てないから。過去はどうでもよくなっちゃう。……まあでも、オレは階級を落とす傾向は嫌いですけどね。ていうか、落とせないですもん。

――個人的事情ですね（笑）。

マッハ　だって死にそうになるんだもん。あ、だからダメなんですよ！

――ん？　何がですか？

マッハ　落とすから、体力が弱くなるんですよ。落としすぎるとね。だから、人間力

ACH" SAKURAI

今回は俺が（青木に）勝つと思うけど大晦日にリベンジマッチ受けてもいいよ

も生まれてこないんじゃないですか。

——あ、そこにつながったんだ。

マッハ ハハハハ！ いやでも、本当にそう思いますよ。だから、へんな技に頼るしかなくなるんですよ！（笑）。新しい技、新しい技ってねえ。

——そこにもつながるんですね。でも、上げて出てたときもそれはそれで大変だったんですよね？

マッハ いや、身に染みて感じましたよね。オレの階級も作ってくれって。

——じゃあいまは、やっと自分の階級ができたという喜びがありますか。

マッハ ま、そうっすね。喜びというか、もちろん不安もありますけどね。そういうふうにみんなが思ってくれてて、期待を裏切るわけにもいかないしね。自分との闘いの中での不安や怖さはやっぱりありますよね。慢心できないですよ。

——PRIDEライト級のときはどうでした？ 73キロでしたが。

マッハ やっぱ、上げるよりはいいですよね。でもいいときもあれば悪いときもあって、落とせないんですよね、どうしても。でも落とすしかないでしょ？ やっぱ弱ってきますよね。普通なら五味選手のパンチでKOなんかされないんだけどな。ずっと練習してて、いつもやっつけてたんですけどね、やっぱ階級が違うとダメですよね。ま、彼が強くなっててやっつけられたのかもしれないし、それはわかんないけどさ（笑）。……ま、時代ですよね。そう思いたくねえけど。17（歳）からやってるから。

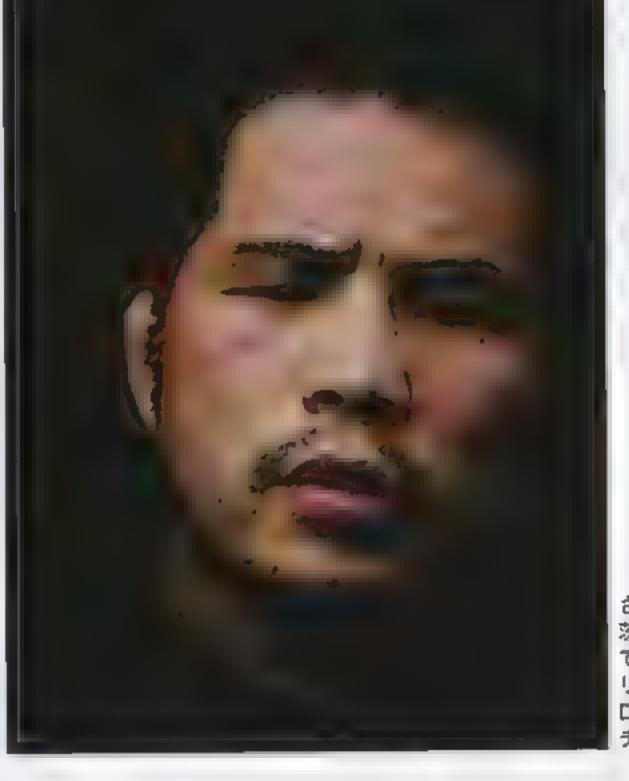
——それを言うなら、マッハさんの時代はずっと続いてるんじゃないですか？ 人間力も衰えてないし。

マッハ まあ……なんつってもメシ食わなきゃダメですよね。

——マッハさんに言われたら説得力ありますね（笑）。

マッハ メシ食わないとねえ、何も生まれないですよ。抜け殻になりますから。じつはこのあと、専門家の人と会っていろいろ話を聞くんですけどね、メシの食い方とか。

——なんだ、考えてるんじゃないですか。

さくらい・まっは・はやと■1975年8月24日、茨城県出身。90年代から修斗のトップとして活躍する、総合格闘技を牽引してきたカリスマ。PRIDEではライト級GPで準優勝。DREAMではウェルター級に階級を上げ、チャンピオンの座を狙う。171cm、76kg。

マッハ いやでも、ダメなんですよね。どうしても食っちゃうから。73キロのときも最初はよかったんだけど、後半きつかったですよね。だんだん落ちなくなって。やっぱ人間、無理するもんじゃないっすね。

——いま、ナチュラルでどれぐらいですか？

マッハ 増えたんですよ。90キロはないけど……88キロ。

——ほとんど変わらないじゃないですか！

マッハ 太ってるわけじゃないんですけど。自転車始めたからかなあ。脚が太くなっちゃったからなあ。すげえヒザ蹴りになったって言われてますけどね（笑）。

——ブログに書いてましたね。

マッハ 山で、アップダウンを自転車に乗ってやるんですよね。

——新しいトレーニングメニューですか

マッハ やっぱ、格闘技のためにやってんですよ。もう17年経ちますけど、違うこともいろいろ取り入れてね。ランディ・クートゥアーもそういうことやってるって言うし。ボート漕いだりとかね。

——その「新しいこと」が、技術的なことじゃないあたりマッハさんらしいですけどね。

マッハ オレもちょっとずつはありますよ、技術的なことも。でもそんなふうに見せないっていうか、単純なかたちでやれてるっていうのがオレの魅力でもあると思うしね。だってさ、オレがラバーガードなんかやったら気持ち悪いでしょ？ ハハハハ！

——気持ち悪いって言ったら失礼ですけど……気持ち悪いです！

マッハ ハハハハハ！ まあこれだけやってれば、何が流行って何が出てきて……ってありますけどね。

——名古屋での対戦っていうのはどうですか？

マッハ あんまりイメージ湧かないっすけどね。どこでやるんでしたっけ？

——えっ⁉ 日本ガイシホール（旧名・レインボーホール）ですよ。

マッハ レインボーホールっていったら、辰吉選手と薬師寺選手だよね。その意味じゃ、どっちが薬師寺選手になるんだっていうね。ガハハハ！

——選手によっては「さいたま最高！」みたいなこともあるじゃないですか。マッハさんは？

マッハ 近いからね。

——あ、それだけ（笑）。会場とかは関係ないですか。

マッハ ないっすね。でも、みんながさいたまで観たいんだったら、今回もやって大晦日もまた彼とやればいいんですよ。

——？？？

マッハ 今回オレが勝つと思うけど、大晦日にリベンジしてくれって言ってさ（笑）。

——で、また勝つわけですか。

マッハ ハハハハ！ でも、何回やってもいいぐらいのいいカードだと思うからさ。

——じゃあ今回もいい試合になって、マッハさんの人間力が見られることを期待してます！

【09年3月18日／都内・マッハ道場にて収録】

HAYATO "MAC

超強力なコラム陣が連載中!!

青木真也
『週刊ワオ木真也』

長南亮
『ピラニアUSA日記』

金沢GK克彦
『こちらプロレス村役場ドットコム』

新日本プロレス
『週刊新日本プロレスNOW通信』

カリスマ司会者の原タコヤキ君が毎週多彩なゲストを迎えてお届けするポッドキャスティング番組。ドッキリもあるよ!?

注目の試合、重要な大会は細かくお届けしています。写真はもちろん各試合の短評も充実! 試合後のコメントもここで読もう!

カード発表の記者会見や衝撃的な発表など記者会見の内容をいち早くお届け! また、会見内容もできるだけ詳しくお伝えします!

次号の表紙は? 内容は? そんな疑問にいち早くお答えします! 雑誌「kamipro」およびkamipro booksシリーズの発売情報はこちらで!

このほかにもインタビューや読者プレゼントなど企画満載!

プロレス&MMAのニュースサイト

kamipro.com

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

カミプロドットコム

こちらは無料です!

レッツ毎日アクセス http://www.kamipro.com/

ハイブリッドなプレゼントです

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2009年5月7日(木)頃発送予定です)。

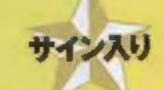
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望賞品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦歴代パンクラシストで一番好きなのは?⑧パンクラスにおけるベストバウトは?

【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「明日また生きるぞ」係まで

※応募締切は2009年4月27日(月)当日消印有効

PRESENT*01

日沖発サイン入り『戦極〜第七陣〜』パンフレット

[戦極]

「戦極〜第七陣〜」で開幕したフェザー級グランプリの優勝候補であり、本誌初登場の"修斗の子"日沖発のサイン入りパンフレットです。

PRESENT*02

ジョン・チャンソン サイン色紙

[非売品]

「戦極」で勝利したジョン・チャンソンのサイン色紙。ビッグマウス炸裂の危険なインタビューを「kamiproドットコム」で近日公開!

戦極■http://www.sengoku-official.com/pc/

PRESENT*03

FRONT

パンクラス Cobra Tシャツ

[パンクラス/¥3,675(税込)]

ロサンゼルスのダウンタウンでバウンサーをしているアーティストKiyoshi Nakazawaとパンクラスのコラボ Tシャツ。サイズはL。

PRESENT*04

鈴木みのるサイン入り パンクラスTシャツ

[パンクラス/¥3,150(税込)]

パンクラスのロゴ入りのシンプルな黒Tシャツに鈴木みのるのサインを入れてプレゼント。サイズはL。これを着て風になれ!!

PRESENT*05

北岡悟アキレス犬Tシャツ

[パンクラス/¥3,675(税込)]

パンクラスで現在人気ナンバーワンの商品がこちら。本人はキモ強いがTシャツは非常にかわいいです! サイズはL。

PANCRASE STORE■http://www.pancrase-store.com/

PRESENT*06

北岡悟ステッカー

[パンクラス/¥735(税込)]

北岡のTシャツがステッカーになった。フロックマとアキレス犬を貼りまくろう。材質は紙で表面はPPコート加工してます。

PANCRASE STORE■http://www.pancrase-store.com/

PRESENT*07

DVD『沖縄伝統空手道 剛柔流DVD BOX』

[株式会社クエスト/¥13,440(税込)]

流祖・宮城長順先生より受け継いできた剛柔流のすべてを公開。八木明徳先生創作明武拳および剛柔流の型に合わせて織り込んだ全3巻。

PRESENT*08

DVD『初見良昭 大光明祭2008 九流派(9つの空間)を無にする』

[株式会社クエスト/¥5,880(税込)]

いにしえの技をいまに伝える現代の武神・初見良昭。その初見宗家の誕生日に開催される年に一度のセミナー大光明祭の模様を収録!

QUEST■http://www.queststation.com/

PRESENT*09

DVD『DEEP THE BEST 2008』

[株式会社クエスト/¥5,880(税込)]

「DEEP 34〜39IMPACT」から2008年のベストマッチを厳選。08年6月のMIKUの試合や12月の長島☆自演乙☆雄一郎の試合も収録!

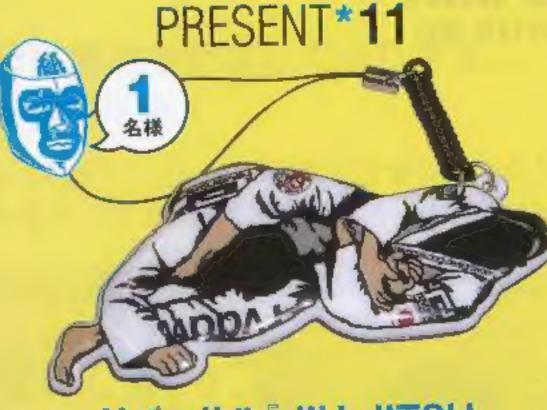
QUEST■http://www.queststation.com/

PRESENT*10

MIKU Tシャツ(SUNSET)

[リバーサル/¥5,040(税込)]

携帯サイト「kamipro Move」でも絶賛連載中のDEEP女子チャンピオンMIKUのシュートボクシング参戦記念モデルTシャツ。サイズはM。

PRESENT*11

リバーサル『JIU-JITSU ABSOLUTO CLEANER』

[リバーサル/¥1,050(税込)]

柔術をモチーフにしたリバーサルらしい携帯ストラップ&クリーナーです。色はWHITE。ほかの色も販売中なので下記URLでチェックせよ!

リバーサル■http://www.rvddw.com/

こちらでも毎週プレゼント実施中!! **http://kamipro.com/**

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2009 MAY
2009年4月14日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
大川義之
スズキィ
八木賢太郎(おしるしのため非番)

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子

編集次長(○○します!!)
松林 貴

デザイン大将
出田さん(TwoThree)

デザイン司令長官
金井ヒサくん(TwoThree)

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木みのるちゃん(以上、TwoThree)

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
丸山剛史
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト

お勘定
工藤ちゃん

酩酊営業
入江テギュン(TwoThree)

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本"コールドフォイル"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川"今夜は梅酒"奈津子
白倉明子

戦極マダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555(代表)

印刷
大日本印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン スポーツ企画編集部
☎03-3265-7166

格闘技もいいけど、プロレススペシャルもよろしく……ネッ!

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]☎0570-060-555(受付時間/土日祝祭日を除く12:00~17:00) メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン(URL:http://www.enterbrain.co.jp/)、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。